

関西学院大学総合政策学部

2018年度 日本語Ⅰ・Ⅱ レポート集

大学生生活の希望

目次

■ 授業案内

2018年度「日本語 I」(月曜 2限)【読む・書く】授業案内 4

2018年度「日本語 II」【読む・書く】(月曜 2限) 授業案内 7

■ 1クラス (担当: 牲川 波都季)

海洋環境保護へのあゆみ—小さいことからやろう

何 夏華 (カ カカ) 11

夢の実現への第一歩

—国際公務員になるために国際交流を通じてコミュニケーション能力を
張 宇霄 (チョウ ウシヨウ) 14

本で自分をより良くしよう

姚 迪 (ヤオ ディ) 19

力を持つ映像を作るための大学での学び

梁 賢 (ヤン ヒュン) 22

差別問題の改善に力を入れたい

楊 子怡 (ヨウ シイ) 26

人とつながる為の外国語

李 珉知 (リ ミンジ) 31

日本語を通して日本文化を楽しみたい

劉 日華 (リュウ ヤーワツ) 34

目標を実現して行こう—環境と経済が共に発展することを望む

梁 宇軒 (リョウ ウケン) 38

■2クラス（担当：横野 さゆる）

大学でやりたいこと 王 子嬌（オウ シエン）	43
新たな私 王 澤琰（オウ タクエン）	48
コミュニケーション能力を身につけよう 姜 セラピナ（カン セラピナ）	52
人生の楽しみは体験や発見にある 饒 哲銘（ジョウ テツメイ）	56
大学生のうちにやりたいこと 包 旨名（ハウ シメイ）	60
昨日死んだかのように生きろ！そして永遠に生きることに学べ 関 庚珍（ミン ギョンジン）	64
理想の自分へ 楊 佳康（ヨン ジャカン）	68

■3クラス（担当：勝部 三奈子）

今までの自分，そして今から イー グアンジェン	73
大学での学び—ジャーナリストになるため必要な力 王 清（オウ セイ）	76
4年間の「人間関係」（Feat.自分が4年間叶えたいこと） 金 東夏（キム ドンハ）	80
将来のための大学4年計画—人生の課題について、大学で実現したいこと 計 鵬飛（ケイ ホウヒ）	83

子供は我々の希望—難民を支援すること 蔣 天宇 (ショウ テンウ)	92
これからの私 申 洋朱 (シン ヤンジユ)	96
いまから 張 詩琪 (チョウ シキ)	99
大学四年間を使って実現したい目標 龐 逸翔 (ハウ イッショウ)	103

2018年度「日本語Ⅰ」（月曜2限）【読む・書く】授業案内

1 クラス：牲川 波都季

2 クラス：横野 さゆる

3 クラス：勝部 三奈子

大学時代にしてみたいことについて、クラスでの議論とレポート執筆からじっくりと考えます。

このプロセスを通じて、自分の大学生活に必要なことばの力を獲得していきましょう。

1. 目標

日本語運用を通して、アカデミックなことばの力（ことばを用いて自らの問題と解決方法を見つけ出し、それらを他者とともに考えていく力）を身に付ける。この能力の基本として、日本語を使って学んでいけるという自信と学んでいきたいという意欲をもてるようになる。また、安心して大学生活を送れるよう、他の留学生との関わりを深める。

2. 使用テキスト

(1) プリント教材

(2) 参考として、関西学院大学総合政策学部『改訂新版 基礎演習ハンドブック K.G.りぶれつと, no. 31』関西学院大学出版会，を使用する。

3. 授業内容

大学生活で実現したいことをテーマに、議論しながらレポートを書くことで、下記の目標を達成する。

(1) 他者に説得的に自分の考えを伝えるための、レポート執筆の方法を習得する。

(2) 大学4年間の勉学・生活の充実に向け、目標を明確化することができる。

4. 今学期のレポート

(1) 大学生活でしてみたいことをレポートのテーマとする（秋学期も続きを書く）。

(2) クラスでの議論を踏まえ、どのようなことをなぜしてみたいのかについて、じっくり考える。

(3) 中間レポートの長さは1600字以上とする（秋学期末の最終レポートは4000字以上）。

(4) 中間レポートに剽窃があった場合、日本語Ⅰの月曜日の点数を0点とする。

(5) 秋学期末に提出の最終レポートは、ウェブサイトなどで広く公開する。

5. 評価

日本語 II の成績＝月曜日の成績 50%＋木曜日の成績 50%

月曜日

- (1) 提出物 35 点 下記 6 参照
- (2) 報告 10 点 下記 6 参照
- (3) 積極的参加 5 点 下記 7, 8 参照 (クラス活動への参加度と出欠)

6. 提出物と報告のポイント

	提出物	報告
(1) テーマメモ 1	7.5	2.5
(2) テーマメモ 2	7.5	2.5
(3) テーマメモ 3	7.5	2.5
(4) 中間レポート	12.5	2.5

○提出物は、必ず決められた 提出時限・時間 に提出すること。遅れた場合、満点から 50%引く。
提出しない場合、各提出物のポイントは 0 点。

○提出物は、議論を踏まえ、毎回修正すること。修正しない場合、各提出物のポイントは 0 点。

○(1)～(3)の提出物に剽窃 (引用元・引用箇所を明記しない他者の著作物からのコピー・要約) があつた場合、各提出物のポイントは 0 点。

○(4)の中間レポートの文字数が 1600 字未満だった場合、割合に応じてポイントを引く。

○(4)の中間レポートに剽窃があつた場合、日本語 I の月曜日の成績を 0 点とする。

7. 積極的参加

参加度

議論に積極的に参加しなかったり、提出物の修正程度が非常に少ない場合、ポイントを引く。

出席

- (1) 日本語 I (月＋木) の欠席の合計が 8 回分になった時点で、不合格
- (2) 遅刻は累積 90 分で 1 回の欠席としてカウントする。
- (3) 欠席 4 回目から欠席ごとに事務室を通じて呼び出し、警告する。
- (4) 成績の積極的参加のポイントから、欠席 1 回のごとに 1 点を引く。
- (5) 学部事務室に欠席届を出す場合は、教員にもコピーを渡すこと (最終締切は 7 月 15 日 (日))。

8. 不合格になった場合の再履修

- (1) 再履修クラスはないため、不合格者は次年度に同じレベルのクラスを受講することになる。
- (2) I → (春) → II (秋) → III (春) → IV (秋) → V (春) の順に受講しなければならないため、I が不合格になった学生は、秋は日本語 II を受講できず、来年春に日本語 I を再受講する。

9. 日本語 II (秋学期) と夏季休暇中の課題

- (1) 中間レポートの結果を踏まえ、自分が大学時代にしたいことを明確にする、またはその実現方法を考えるための本を 1 冊選び読む。
- (2) (1)の本を読んで考えたことについて本文を引用した上でまとめ、中間レポートの続きとする。
- (3) 締め切りは全員 9 月 14 日 (金)。

10. 授業予定

回	月 日	授業内容	課題	課題提出日
1	4/9	オリエンテーション&自己紹介 アイデアを出す		
2	4/16	テーマを考える 1	テーマメモ 1	
3	4/23	テーマを考える 1	テーマメモ 1	
4	4/30	テーマを考える 1	テーマメモ 1	
5	5/7	テーマを考える 2	テーマメモ 2	
6	5/14	テーマを考える 2	テーマメモ 2	
7	5/21	テーマを考える 2	テーマメモ 2	
8	5/28	テーマを考える 3 (交流授業)	テーマメモ 3	
9	6/4	テーマを考える 3 (交流授業)	テーマメモ 3	
10	6/11	テーマを考える 4		
11	6/18	テーマを考える 4		
12	6/25	テーマを決める	中間レポート	
13	7/2	テーマを決める	中間レポート	
14	7/9	テーマを決める	中間レポート	

※予定に変更がある場合、クラス内で連絡する。

2018 年度「日本語 II」【読む・書く】（月曜 2 限）
授業案内

- 1 クラス：牲川 波都季
2 クラス：横野 さゆる
3 クラス：勝部 三奈子

大学時代にしてみたいことについて、クラスでの議論とレポート執筆からじっくりと考えます。
このプロセスを通じて、自分の大学生活に必要なことばの力を獲得していきましょう。

1. 目標

日本語運用を通して、アカデミックなことばの力（ことばを用いて自らの問題と解決方法を見つけ出し、それらを他者とともに考えていく力）を身に付ける。この能力の基本として、日本語を使って学んでいけるという自信と学んでいきたいという意欲をもてるようになる。また、安心して大学生活を送れるよう、他の留学生との関わりを深める。

2. 使用テキスト

- (1) プリント教材
(2) 参考として、関西学院大学総合政策学部『改訂新版 基礎演習ハンドブック K.G.りぶれつと, no. 31』関西学院大学出版会、を使用する。

3. 授業内容

- (1) 段階的にレポートを書き進める。
(2) クラスメートの質問・助言をもとに、レポートを加筆・修正する。
(3) 大学で求められるレポートの書き方の基本と、剽窃・引用の問題について知識を得る。
(4) (1)から(3)を通し、大学生活に必要なことばの力の基礎を身に付けるとともに、大学でしてみたいことを明らかにする。

4. 今学期のレポート

- (1) 大学生活でしてみたいことをレポートのテーマとする（春学期の続き）。
(2) 文献と議論に基づいてレポートを執筆し、どのようなことをなぜしたいのか、明確にする。
(3) 最終レポートの長さは 4000 字以上 とする。
(4) 最終レポートに剽窃があった場合、日本語 II の月曜日の点数を 0 点とする。
(5) 最終レポートは、ウェブサイトなどで広く 公開する。

5. 成績

日本語 II の成績＝月曜日の成績 50%＋木曜日の成績 50%

月曜日

- (1) 提出物 35 点 下記 6 参照
- (2) 報告 10 点 下記 6 参照
- (3) 積極的参加 5 点 下記 7 参照 (クラス活動への参加度と出欠)

6. 提出物と報告のポイント

	提出物	報告
(1) 文献レビューまで	7.5	2
(2) 下書き 1	5	2
(3) 下書き 2	7.5	2
(4) 最終レポート	10	2
(5) 公開用最終レポート	2.5	0
(6) 相互自己評価表	2.5	2

○提出物は、必ず決められた 提出時限・時間 に提出すること。遅れた場合、満点から 50% 引く。

提出しない場合、各提出物のポイントは 0 点。

○提出物は、クラスでの議論を踏まえ、必ず毎回修正 すること。修正しない場合、各提出物のポイントは 0 点。

○(1)～(4)の提出物に剽窃 (引用元・引用箇所を明記しない他者の著作物からのコピー・要約) があつた場合、各提出物のポイントは 0 点。

○(4)の最終レポートの文字数が 4000 字未満だった場合、割合に応じてポイントを引く。

○(5)の公開用最終レポートに剽窃があつた場合、**日本語 II の月曜日の成績**を 0 点とする。

7. 積極的参加

参加度

議論に積極的に参加しない、提出物の修正程度が非常に少ない場合、ポイントを引く。

出欠

(1) 日本語 I (月＋木) の欠席の合計が 8 回分になった時点で、不合格になる。

(2) 遅刻は累積 90 分で 1 回の欠席としてカウントする。

(3) 欠席 4 回目から欠席ごとに事務室を通じて呼び出し、警告する。

(4) 成績の積極的参加のポイントから、欠席 1 回のごとに 1 点を引く。

(5) 下記理由で遅刻・欠席する場合は、次回の月曜日の授業時に 証明書または代替書類のコピー (学部事務室に欠席届を提出する場合は、欠席届のコピー) を提出すること。

二親等以内の親族の死亡、病気・怪我、事故、公共交通機関の遅延

1 月 10 日 (木) 分の提出締切は 1 月 13 日 (日) (メール添付による提出可)

提出があつた場合、遅刻・欠席に算入しない。ただし提出物、報告・議論の成績はマイナスする。

8. 不合格になった場合の再履修

再履修クラスはないため、日本語 II が不合格になった学生は、来年秋に日本語 II を受講する。

日本語Ⅱ 授業予定 9月29日修正版

回	月日	授業内容	課題	課題提出者
1	9/24	オリエンテーション 本をまとめる	文献レビューまで	全員
2	10/1	本をまとめる 台風のため休講		
3	10/8	本をまとめる		
4	10/15	引用の方法・剽窃の問題 本をまとめる		
5	10/22	レポートをまとめる1（交流授業）	下書き1	
6	10/29	レポートをまとめる1（交流授業）	下書き1	
7	11/5	評価の観点を考える		
8	11/12	レポートをまとめる2	下書き2	
9	11/19	レポートをまとめる2	下書き2	
10	11/26	レポートをまとめる2 相互自己評価会について	下書き2 最終レポート	
11	12/3	相互自己評価会	最終レポート 相互自己評価表	
12	12/10	相互自己評価会	最終レポート 相互自己評価表	
13	12/17	相互自己評価会	相互自己評価表	
		各自の評価会1週間後まで	公開用最終レポート	
14	1/7	まとめ・レポート集の配布（交流授業）		

※予定に変更がある場合、クラス内で連絡する。

1 クラス

担当 牲川 波都季

海洋環境保護へのあゆみ

小さいことからやろう

何 夏華

海といえば、みんなは何を思い出したのか。私にとって、海はさしぶりの隣人のイメージが頭に浮かんだ。子供の頃から、父の仕事のため、いくつかの都市で暮らすことがある。チンタオという沿海都市はその中の一つだ。ずいぶん昔のことだけど、海が青くてきれいな存在だとずっと思い込んでいる。しかし、海洋汚染のニュースがよくテレビに出ている。藻類汚染やプラスチック汚染によって、海が元の様子を失って美しくなくなっている。この状況に向かって、自分が何をすべきか、何ができるのか、あらためて見直した...

いつから環境問題に関心を持ったのか、はっきりと言えれば自分も忘れた。ほかの住んだ都市と比べ、戻った故郷の環境が良くないため、自分が綺麗なところで暮らしたい願望が生まれた時に、環境問題に興味があったかもしれない。私のふるさとは以前石炭が多いから工業を中心として経済を発展している。火力発電所、採掘工業のせいで、空気が汚く、市内の川も臭い匂いが出る。本当に暮らし心地がよくない都市だった。が、近年石炭が少なくなり、政府は環境を改善する方針を打ち出したから、環境が少しずつきれいになっている。今年の夏休みは中国に戻った時、ふるさとの様子はかなり変わった。昔、臭い匂いの川さえもきれいになった、毎晩 川に沿って散歩する年寄りがよく見られる。ただ数年間で環境が大きく変わった、規制の力は新たに認識した。

環境保護への進む道を決めたが、環境の範囲は広くて、分かれている道の中から、自分が歩く道はどこか、迷っていた。

以前、暇つぶしのためにブルー・プラネットというドキュメンタリーを見た。巨大なイカ、名の知らない魚、サンゴ礁により、海洋世界のスペクタクルを描いた。海が広くて海洋生物も多いから、人間は何をしたとしても海に影響を与えられないはずだと思っていたが。死んだクジラの体中は8キロのポリ袋があり、地球温暖化によってサンゴ礁の白化...人間の活動が海に与えた影響は思った以上に厳しいんだ。自分の進む道を探した、海をもとのきれいな様子に戻りたいんだ。

元々日本を留学先として選んだ理由の一つは環境保護に関する知識を学びたいことだ。1955年～1970年代前半、日本の高度経済成長期の間、経済成長に伴って環境問題も生じた。例えば、四大公害。今の中国は経済を急速成長している、空気汚染や水質汚染などの環境問題も多く、あの時期の日本に似通っているところがあるから、モデルの日本から自分が学びたい知識が得られるので、日本へ来た。

いま関学に入った、自分の目標に少し近づいたが、自分の日本語能力の不足も確実に感じた。授業の内容を十分に理解するために、自分の日本語能力を高めなければならない。とくに、日本語のコミュニケーション能力だ。一年生のうちに、基礎演習の課題やプレゼンテーションを通して、日本人のクラスメイトとの合作から、自分の日本語会話する能力を鍛える。基礎知識を積むために、環境に関する科目を履修する。秋学期は環境倫理という科目を履修した。環境問題解決のために有効な思想的視座を獲得する一方で、グループワークによって日本語コミュニケーション能力も高められると思う。学習以外は、休みの時

間を利用しボランティア活動を参加するつもりだ。大学を離れて、社会の各年齢層の方との交流ができる。自分の視野を広げられ、会話能力も鍛えられる。とりあえず、大学一年生のうちに、一番重要なことは日本語能力を向上させることだ。二年生以後、環境法や国際環境政策などの科目を履修し、より専門性の高い知識を身につけたい。

去年の夏休みに北海道へ旅行した。小樽の天狗山の頂上から眺め、青い海と青い空との分け線を区別できなく一つになるような絶景だ。あれは海のあるべき様子だと思う。北海道から戻った後、その景色はずっと忘れられなく自分は海洋汚染を勉強したい心がもっと明確した。

確かに、海洋プラスチック汚染この問題において文科生の私にとって難しく、プラスチックを完全分解するなど有効的な解決方式は理科の知識が非常に必要だ。しかし、文科生の自分は政策方向からプラスチックを解決する道へ努力することができる。

夏休みの時、「プラスチックスープの海」という本を読んだ。著者はチャールズ・モアとカッサンドラ・フィリップスだ。この本の内容を簡単に要約すれば、プラスチック汚染は国際社会の注意を引き起こす歴史経緯の説明する本だ。著者のチャールズ・モアはロサンゼルスから三四キロ南にあるアラミス湾にある家で育てられ、海を愛する性格だ。子供のころ、チャールズの父は手漕ぎボートでアラミス湾内を回っているとき、海面にごみが浮かいているのに気付いた、市役所にボートで出るさいに清掃をするので契約してほしいと申し出ましたが、受け入れられなかった。こういうことをきっかけに、チャールズは自分で行動する環境保護運動をめざすようになった。1990年代初めに、チャールズは遺産を相続し、沿岸の海をかつての状態に戻すため、アルガリータ海洋調査財団を設立した。

ある偶然の北太平洋への航海経歴で、海面に浮かんでいるプラスチックの数が多いいことを気が付いた。これらのプラスチックはどこから来るのか、行く場所はどこなのか、どんな危害を持っているのか、色々な疑問をチャールズが持っている。答えを求めるために、もう一度北太平洋に行く計画を立てて、調査に行った。

その後、北太平洋ごみベルト（カリフォルニア州とハワイのあいだの海域）へ何度も航海し、取ったサンプルを調査分析する仕事をやっている。海鳥のひなの死体からボトルキャップを発見することや、マイクロプラスチックとプランクトンの数の比較などの事例から、プラスチック汚染の危害を証明した。その危害を伝えるために、チャールズは知り合いの人と一緒にドキュメンタリーを作り、国際的な環境会議でプラスチック汚染についての研究結果を発表し、社会の注意を引き起こした。

この本の中で、私に一番印象を残ったのは、この「ものを買うのは、買い物かごに入れたすべての品物の原材料とその行く末を考慮したうえでの、モラルをわきまえた決定であるべきだろう。（チャールズ・モア 2012：155）」である。私たちの生活はいつのまにかプラスチックに囲まれた。ペットボトル、買い物用レジ袋、日常生活でよく使っている。さらに、電気製品、自動車などその他にもプラスチックは利用されている。確かに、プラスチック製品は用途が広くて利便性が高いのは事実だ。でも利便性だけで追及するのは良いのか。中国のデリバリーサービス産業が完備していて、数多くの飲食店はデリバリー

サービスを提供している。家を出かけたくないとき、ネット上で注文したあと待つだけだ。本当に便利なサービスだけど、食べ物を載せる容器はほぼプラスチック製品で、使い捨てのものだ。製造されたプラスチックごみの最良の解決法はリサイクルだと思う。しかし、すべてのプラスチックがリサイクルできるのか。「プラスチックの海」の15章により、プラスチックごみを処理する方法を下記の通りにまとめた。

ペットボトルのようなプラスチック製食品容器や日用品包装につけている、数字付き矢印三角形がある。例えば、1はポリエチレンテレフタレート、2は高密度ポリエチレンでどちらもリサイクルできるといえないし、一度リサイクルされるともう二度とできない。選ぶ分けられたプラスチックは買い取り手を探し、買い取り手がないと、埋立地に送る。買い取り手があるとしても、プラスチックから新しいプラスチックを作るのは難しい。なぜなら、プラスチックの溶解温度が低いので、プラスチックに残っていた物質は気化できず、再処理する前によく洗浄しなければならない。それに、プラスチックは脂肪親和性なので完全に洗うことができないため、再製造する際に食品に触れる産業には向かない。

これを見た後、プラスチックごみを処理するさいに手数がかかって煩わしさを確実に感じたうえで、すべてのプラスチックがリサイクルできるとは限らないこともわかった。

そのため、新しい商品を手に入りたいときに、ごみをちゃんと分類できるのか、これらのプラスチックはリサイクルできるのか、最後はどこに流出するのか、買い物するまえにこの問いを考えたいうえで決定するのほうがいいだろう。でも買い物する際に、こういうことを先に考えるのが難しいかもしれない。今の私たちが生きている世界は、プラスチック製品を製造し、消費するのは日常茶飯事だ。急にプラスチック製品の使用禁止させるとしても不可能な話だ。しかし、少しずつプラスチック製品の消費を抑えて、それに人々は自覚的にそうすれば、プラスチック汚染が控えられると信じている。

以前、知っていたプラスチックに対する三つのR (Reduce, Reuse, Recycle) が大事で、今はもう一つのR (Refuse) を加えてプラスチックに囲まれた世界に拒絶するという考え方が、当今のプラスチックの解決にふさわしい。

今年の夏休みに帰国した、数年前と比べ海はきれいになっているが、砂浜にペットボトルやビニール袋などのゴミが依然として残っている。それに、国内でのレジ袋の消費率もあまり変わらないんだ。こういう状況に向かって、今の専門知識を持っていない自分ができることを限られている。しかし、小さいことから環境を保護することができる。例えば、できるだけレジ袋を使わない、ごみをちゃんと分類するなど。本当に小さいことけど、自分の行動で周りの人に影響を与えられるなら、プラスチック汚染に対する大きなメリットだと思う。プラスチック汚染は世界的な問題で一か国や一人が解決できることではないので、小さいことを繋げて思う以上の力が発揮できることを信じている。まずは、自分ができることからスタート。

授業に対する意見

- 1：交流授業の回数が少なく、もう少し増えればいいと思う
- 2：紙を浪費する（毎回印刷して、それに9人分で紙を無駄になると思う）

夢の実現への第一歩

—国際公務員になるために国際交流を通じてコミュニケーション能力を—

チヨウウシヨウ

1. はじめに

ライト兄弟は鳥のようにそらで自由に飛びたく、飛行機を発明した。エディソンは夜のまちを光で飾りたく、電球を発明した。人間は夢を追いかけてながら現代社会の構造を建てた。

私にも夢があり、それは国際公務員なることである。この夢は私を子どものころから今まで支えてくれていた。小さい頃から、「将来、何をしたいの」と聞かれると、よく「世界を変えたい」と何気なく答えていた。それは中二病だったかもしれないが、だんだん大きくなり、ありのままの世界の様子見えるようになってきた。知らなかった地域、遙か彼方の国の人達は、自分が想像できない生活を送っているとか…世界を変えたい、よくなって欲しい、この自分の手でと思い始めた。

本レポートは夢にあたって、国際公務員を紹介しながら、どうやって国際公務員になるかを検討する。セクション2にそもそも国際公務員というのは何かを説明し、現代社会の世界構造にて国際公務員の役割を整理する。セクション3は国際公務員になるための一番重要なポイントとしてあげられた国際交流について説明し、そしてセクション4に国際交流をするのに今の時点では高めるべきだと考えられるコミュニケーション能力について、自分の現状に言及しながら具体的な方法論を挙げてみる。セクション5はまとめにあてられる。

2. 国際公務員とは

国際公務員と普通の公務員の違いについては、国際公務員の担当する仕事は簡単に言うと、要するに一国や地域のために働くわけではなく、開発途上国への技術援助、難民救済、教育の普及など、さまざまな分野に渡り、どの国の政府からも拘束されず、中立の立場、かつグローバルな視点で職務を行う義務を負っている。

2.1. 世界構造について

第二次世界大戦が終わってからわずか八十年だが、戦後の世界構造は驚くほどのスピードでできていた。一方、すでにできた世界構造には、いくつかの問題がありながら、至急に取り組むべきである。

資本主義と市場経済化によって、先進国(あるいは富裕層)に吸いあげられた発展途上国(あるいは貧乏な人達)は資源と環境を奪われ、低賃金で働き、紛争や差別などに苦しむ。子

供たちの能力を高められず、格差が定常化した。こうした広がる貧富の格差や紛争、差別及びテロなどがどんどん現代社会の課題になっている。なんと世界の富裕層上位8人の資産が下位50%と同額であった。

多様な格差が広がる現代社会では、一番注目されたのはやはり貧富の格差であると考えられる。それを含む、国際的な課題が山積みの今は、国際人道支援にどうやって取り組むのかがますます重要となっている。近年、国際人道支援に関わるアクターの数が増加し、国際人道コミュニティ全体としての対応力が問われている。主要な人道支援アクターとしては政府、国連機関、国際/国内NGO、ボランティア、民間企業、メディア、そして被災者を含む一般市民など。特に国連人道機関の中には、国連難民高等弁務官事務所と国連児童基金(UNICEF)、などが活動している。

このように多くのアクターが関わり、その相互の関係が複雑化する中、人道支援の実施には共通のアプローチとして人道原則が貫かれる必要があり、国連システムとそのパートナーはより有効な国際人道システムの構築に長く取り組んできた。

わたしはこのような組織などで一部分として活躍したいので、世界にある貧困地域にいて、現場での人道支援の調和や現地課題の取り込むことができる国際公務員になろうと思いはじめた。

3. 国際交流とは

国際交流は国際公務員にとって、避けることはできない仕事手段である。世界のある場所に行き、その住民や現地で活躍している人の国籍は一つに限らない。様々な価値観があるなか、共通点を求めて相異点を保留する、大同につき小異を残すことが重要である。

私は日本で留学し、実質に国際交流でもある。日本人学生に限らず、色々な国籍の留学生と一緒に勉強することで、異文化交流を味わった。しかしそういう国際交流をすればするほど、やはりバックが違うので、異文化交流は想像以上に誤解などが起こりやすく感じた。夏休みに「ようこそ、わが家へ」という本を読んで、そこそこ啓発を得た。

書名から見ると、単なる家族物語だと思えば大間違いだ。本作品の主人公は倉田太一という銀行ではたらいているサラリーマンで、四人家族を持ち、一見普通の生活をくらししているが、ある夏の日、倉田太一は会社帰りに混雑している駅のホームで、割り込み乗車の男を注意し、バスを乗り継いで帰宅の途中、その男に尾行されていることに気が付いて、冷や汗をかきながらも何とか巻いて帰宅したが、その翌朝から倉田家に対する執拗な嫌がらせが始まった。エスカレートする嫌がらせに、警察に被害届を出し、防犯カメラも設置した。しかし、空き巣の痕跡を見つけ、さらに盗聴器まで見つかった。一方職場では、営業部長の不正を疑ったことから、勤務先でもトラブルに巻き込まれたという話であった。

本作品の著者、池井戸潤は日本の小説家であり、金融界や経済界を舞台にした小説を多く書くが、乱歩賞の選評で「銀行ミステリの誕生」と評されたことで、以後の作品にも「銀行ミステリ」とレッテルが貼られ、「元銀行マンが明かす銀行の内幕」という読まれ方をされることが多かった。

「ようこそ、わが家へ」この本も例外ではなく、銀行に関わっている。池井戸潤の原作は色々とドラマ化されており、原作も気にはなっていたのだが、ドラマ「半沢直樹」を観た影響で少し池井戸潤の小説を敬遠していた。

ドラマ「半沢直樹」はドラマ自体は面白かったのだが、主人公・半沢直樹が相手を土下座させシーンがダメどしでも苦手だった。私は相手に屈服させ、土下座をさせる事にカタルシスを感じなかった。相手をカでねじ伏せて土下座させるのは、水戸黄門が印籠を出して相手をひれ伏させるのとは少し意味が違うような気がする。だから、池井戸潤の描く勧善懲悪は相手を屈服させる系なのかと思って、池井戸潤の小説を敬遠していたのだが、「ようこそ、わが家へ」を読んで池井戸潤に対するイメージが変わった。

「ようこそ、わが家へ」の主人公、倉田太一は犯人に倍返しも土下座も要求せず、最後に「できるだけ早く忘れて、普通の生活に戻りたい。もし、それが適うのなら他には望まない。その人のことも、できれば穏便に済ませてやってください」と言い、犯人を許したのである。息子・倉田健太は犯人の正体を知って犯人に報復したが、報復は報復、負の連鎖になるだけである。

怒る事は簡単だが、許すことは難しい。倉田太一は「池井戸潤作品で史上最弱の主人公」と言われているが、倉田太一は最弱の主人公でなどではなく、立派な主人公だと私は思った。国際交流もそうだと思う、許すことと配慮することを信条で、コミュニケーションを取るべきだと考えられる。

4. コミュニケーション能力について

国際公務員になるため、上記のようにある程度のコミュニケーション能力を身に付けるべきである。

まずは話すと聞く力である。

国連での通用語は英語とフランス語などと言われ、国際公務員になるため、語学力が絶対条件である。英語は小学校から勉強して来たが、まだ英語で仕事できるほどでなく、これからは勉強しなければならない。一方、日本語の学習はついに三年目になった。私の場合は日本で留学し、英語よりかなりの進歩はしているが、会話力の方はまだ力を入れなくてはならない。この二か国語だけで足りないので(母国語として、中国語が話せるのはあたり前であると考え)、欧州語としてドイツ語の授業も取っている。

語学力はもちろんだが、「何が話せる」より、「何を話すか」も大切である。やはり国際公務員というのは、異文化間の交流をしながら、仕事をする職業である。自分が留学をしているので、異文化間のコミュニケーションの難しさはよく分かっている。だから異文化間のコミュニケーションをアップするため、いろいろな工夫をしなければならない。グループワークで行われる授業を取ったり、グローバル的なサークルに参加したり、実際に異文化間の交流を味わい、満喫して、そして慣れる。「話せる」ようになっていくことなど。

個人的にグループワークもコミュニケーション能力に関わっている。コミュニケーション能力の良さはグループワークの決め手だといいい過ぎない。

約半年前、KSCUP が行われ、うちのゼミは試合前日ゼミキャンプでオールにも関わらず、準優勝だった。体力的にはほかのゼミに負けているが戦略上だけ自信を持っている。全体的にはフォワードがゴールまで走りながら短いパスで繋がるというスタイルだが、相手によって異なることもあった。それを全部まとめ、各試合前に選手に伝えることが大事で、選手達がちゃんと理解し、実施できるのも重要なことだと思う。国際公務員としては、相手の伝えたいことを理解できるかどうか、中心を把握できるかというのがとても大事だと思う。そういう能力を身につくため、ある程度「聞く」の授業を取っている。例えば自然科学史など、参加度がそんなに高くなく、90分間に先生の話さえちゃんと聞いていればいいという授業が正直おもしろくないと思われているが、確かに聞く力向上に役に立つと考える。こういう授業を通して、「聞ける」よくなればと思う。もちろん、単なる「聞き取れる」では足りなく、ちゃんと相手の話が「読み取れる」を目標として、頑張らないといけないので、できる限り多くのコミュニケーションをとることだ。

最後はリードカだ。

私は週末によくサッカーを観るためスタジアムまで足を運んでいくが、現地観戦とテレビ観戦一番の違いはやはり「臨場感」と「一体感」である。臨場感についていうまでもなく皆さんは分かると思うが、私にとって、一体感の方が楽しく思う。プレー中同じチームの選手が団体であれば、ゴール裏にいるサポーターも団体である。90分を通し、選手に熱く応援を届けるため、歌ったり踊ったりしているのがサポーターである。毎試合キックオフの二時間前、ゴール裏にコールリーダーという人が立ち上がり、当試合はどの方針で応援するのかを声明し、決起集会を行う。それがちゃんとリーダーとして誰かしているから、スタジアムに一体感があるわけと考えられる。

今年の10月に新月祭が三田キャンパスで行われ、うちのゼミはこの際に模擬店を出し、僕はゼミ長の推薦で責任者とすることになった、やはりリーダーと一般の参加者とは異なり、発注やら人事やらいろいろなことを考えなければならず、実際に運営の際にもさまざまなトラブルがあったが、みんなの努力でなんとかなった。二日間けっこう大変だったが、初めての運営の試しとして、自分は少しでもリーダーシップに近づくほかにも色々な貴重な経験を得たとも言えるだろう。

5. むすび

本レポートは私の夢をあたって、夢—目標—手段の順に書き込んだ。夢としては冒頭にて国際公務員を簡単に紹介した。続いてに国際交流について説明した、最後は国際公務員になるため、私が大学在学中にできることとしてコミュニケーション能力をあげた。

もちろん大学時期で、コミュニケーション能力の向上さえさせれば、国際公務員になれるわけではない。とりあえず自分の目標とミッションをはっきりさせないとあとのことはお話にならない。国際公務員になるのが実に難しいと思うが、これはただの夢が実現するための第一歩だから、第一歩を踏み出し、そして第二歩を。諦めなければ、夢は必ずかなうと信じている。

参考資料

『ようこそ、わが家へ』池井戸潤 2013年7月10日 小学館

池井戸潤 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/池井戸潤>

外務省 人道支援 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jindo/jindoushien1_1.html

人道支援 | 国連広報センター http://www.unic.or.jp/activities/humanitarian_aid/

授業についてのコメント

一年間お世話になりました。日本語1と日本語2(月)の授業と通し、先生やクラスメートなどから様々な意見をいただき、レポートを何度も書き直し、自分の文書力が確実に向上したと感じました。

課題といえばやはり少なくて一年間レポート一通しかないのも楽は楽ですが、充実とは言えません。来学期にもうちょっと難しい課題を挑戦してみたいという感じかなと思いました。

本で自分をより良くしよう

姚 迪

本は人間の聖なる窓である。中学時代までは自分の知らない世界を本の中から知っていました。だんだん大人になってきて、自分の頭や目を使って、見ながら考えるようになりましたが、それにしても、私たちは本の世界はまだ知らないです。本についてはいろいろな解釈があります。

私にとっては、その本は自分の先生であり、先輩みたいな存在です。何故かという、小学生六年だった時の出来事です。小学校からは本を読むのが大嫌いでした、小学校六年の夏休みの時、親のいる山東省に休みを過ごすことになって、おじいさんの息子、つまり、私のお兄さんであって、夏休みの時、よく一緒に遊んでいました。遊んでいるときにお兄さんからいろいろな面白い話を聞いて、聞いてみると、お兄さんは本を読むことで、こういう話をわかったのです。それが原因で、私は本を読むことが好きになりました。

そのときから、本を読むようになって、本に対しする特殊な感情も自然に生まれてきました。本は自由なものです。本を読んでいるうちに、時間を忘れる、悩みを忘れる、すべてのものを忘れることで、その場に存在するのは自分と本だけである。いわゆる空想の状態かな、その雰囲気は私大好きです。その雰囲気に存在しているうちに、今までの自分を省みることもでき、これからの自分を予測することもできます。これらのことが考えられること自体が、私たち自分にとってはとてもいいことだと思っています。

今の人々が生活する社会は何でも早いだと思いませんか？食事は早く済ませて、仕事に行く。仕事を済ませて、早く家に帰る。早く家に帰るといっても夜の十二時ぐらいなら、早いといえるのでしょう。家に帰って、さっさと片付けて布団に入る。明日また同じ日がやってくる。忙しいといっても、時間を割くなら、暇な時間もさけるでしょう。仕事の休憩時間や電車に乗っているあいだに、スマホを見る時間を十分に利用して、本を読むことに使ってみたらどうですか？自分の精神世界を充実させることで、肉体の疲れは感じにくくなるのではないのでしょうか？

知識の世界はつきがなくて、何千年から伝わってきたものや出来事をできるだけ沢山知って、それに前人の知恵と現代人の知恵を交わしながら新しくすばらしいアイデアが生み出せるかもしれないです。本にも範囲が広くて、読みたい本も必ずあります。私は本であれば何でも読むわけではないですが、人物伝記だけではなく、怪談物語とか、宗教伝記や哲学も時々読みます。一番読みたい本はやっぱり歴史や怪談物語に関する本です。私は昔のことや儀式に対して、興味を持っているからです。その時代に存在していたものは必ずその意味がある、モノやある儀式に対する解釈など、これらのことを理解することから、昔の人たちはこういう考え方とか、こういうことについて特別だねとか。こんなことは面白いところだと思います。なので、私はこの大学時代で沢山の本を読んで、自分の知識を増やして生きたいと思います。例えば、日本でいうと、私は日本の平安時代に興味を持っています。当時は貴族の世であると言われていていいです、その時の貴族はどのような風に生活しているのか、また、貴族はどんな様子なのか、貴族の間にも権力の争いとかあるのか、これらのことについてこの大学時代で本を読むなり、講義を聴くなりして。少しずつ解明していきたいと思います。

国々の本は自国の特殊な文化雰囲気によって、違いますので。日本の本の雰囲気を実際に味わってみたいです。こういう本を読もうとしている自分は自分の国の歴史に対しての認識はどれくらいなのか、こんな瞬間に自分を問いかけた。ここはこういう名前で、歴史遺跡だけわかって、詳しくは何も知らない中国遺跡まだまだあるということに気が付いた、なので、中国の遺跡をもっと詳しく知るために、夏休みの間に私は「中国の世

界遺産を旅する：響きあう歴史と文化」という本を読みました。

私は子供の時から歴史に関する本を読むとき、その本の内容を読みながら、内容で描かれている光景を想像するようにしています。だから、今夏休みの間に、自分が本を読んで、感想を書く課題が出されたら、歴史に関する本を読もうという考え方は頭の中に浮かびました。やっぱり昔のことを知ることで、なんで今まで至ったかっていうのは誰にとっても大事なことですかね。確かに我々は輝いた時代があった、屈辱な時代もあった、それに今は誰にも負けない時代であった。輝いた時代は我々の誇りとなり、屈辱な時代は我々の雑談となり、今の時代は我々の幸運である。なので、中国はごく長い歴史を持つ国であり、夏休みは「中国の世界遺産を旅する：響きあう歴史と文化」という本を読みました。書名の通りに、この本は中国に現存している世界遺産のことを書く本です。この本は中国にある数多くの昔からあった遺跡のうちに、世界遺産に登録されている七つの中国古代遺産を紹介しています。（無論、他の世界遺産もあるが、この七つだけがこの本の中に挙げられている。）

さて、この本を開けますと、初めには中国の歴史に関する知識が大雑把に載っておりまして、昔から現代まで残れるものこそが、それが世界遺産でして、歴史と文化の精華だと言っています。最初は中国が王朝時代に入り、二番目の殷(商)ともいう王朝の文字の話を紹介します。つまりは甲骨文のことである。初めは清朝の王懿榮や劉鶚が北京にある漢方薬店で当時「竜骨」と称して売られていた薬(甲骨片)に古い文字を発見したと伝えられています。これらの甲骨を大量に購入して分析したところ、その素材は亀の甲羅や牛の肩甲骨で、そこに刻まれた古文字は、今から三千年前の中国古代王朝「殷」の文字であることが判明した。「殷」よりもっと前の時代もあったが、この甲骨文は最も古い時代の文字だということは確かのことです。

次は中国では聖人と言われている孔子のことについて詳しく説明しています。詳しくいうと、孔子が作った儒教と孔子のふるさとのことです。孔子の生まれた故郷曲阜にある孔子廟(孔子を祀る廟)。孔府(孔子直系子孫の邸宅)。孔林(孔子一族の墓地)総称三孔です。曲阜の入り口にある(孔子列国行)像というのが一番有名でしょう。

五十にして天命を知った孔子は、夢と理想を胸に諸国を巡ったということです。ここまでみると、二千五百前の春秋時代がよみがえるでしょう。春秋時代の魯の哀公時代に始まる孔子廟はその後漢高祖劉邦や唐代の第2代皇帝唐太宗や同じ唐代の唐玄宗や元代明代の皇帝たちの命令で孔子廟の拡張が行われました。今までの規模に達したという。孔子廟以外にも孔子の御霊を祀る正殿大成殿や孔府や孔林全部のものが昔の時代の光景が目の前に表しているという。

今の中国でも聖人だと言われている孔子の弟子であり、孟子がこんな話を言いました：「天の将に大任をこの人に降さんとするや、必ず先ずその心志を苦しめ、その筋骨を勞せしめ、その体膚を飢えしむ」つまり、人は生まれてから天が自分に天命を授かる、その天命を受けて一人前になれるというわけですが、その一人前になるにはその過程は必ず欠かせないものである上にも、心や身体や筋骨まではきちんと鍛えなければならないということです。

孔子はこんな言葉も言いました「ゆくものはかくのごときか、昼夜を別たず」これはある日に川に立っていた孔子が自分の弟子に言った話です。意味は「時間はこの川が流している状態みたいに、永遠に流しつつ、止まることは絶対ない」我々は時間を大切にすべき、時間は誰かを待つことはない、誰かのために、止まることはない、今の自分を大切にすることこそが一番大事なことです。経ったことは経ったことで、それを素直に受け入れればいいのです。例えば悔しいことであっても、残念なことであっても、もう決めた以上は過去にはめる権利はないのです。これからの自分はどうすれば過去に

起こったことが起こらないように頑張ることが大事だということです。

第3章と第4章は中国の戦国時代を終わらせて、六国を統一した秦の始皇帝の始皇帝陵や兵馬俑坑の話と始皇帝が作った万里の長城の話です。秦という時代を作った人であってその強大な力を利用し自分を埋蔵する大きな陵墓を立てた。これが始皇帝陵である。また兵馬俑坑というのはこの陵を取り巻くように配置していて、その規模は2万㎡に及ぶ。三つの俑坑に戦車約100台、陶馬が600体、武士俑は成人男性等身大約8000体で、みな東を向いている。この兵馬俑の発見は当時の衣装や武器・馬具などの研究に極めて重要なものです。

今の万里の長城は現存する人工壁の延長は6259,6kmである。匈奴のような北方の異民族が侵攻してくるのを迎撃するために、秦代の紀元前214年に始皇帝によって建設された。長城は始皇帝によって建設されたと一般には考えられているが、実際にはその後いくつかの王朝によって修築と移転が繰り返され、現存の「万里の長城」の大部分は明代に作られたものである。この現存する明代の長城線は秦代に比べて遥かに南へ後退している。これこそが始皇帝の野望や国防意識を表す証です。あとは中国の聖なる山泰山やシルクロードの夢敦煌莫高窟や発見された地下宮殿明の13陵、全てのものは昔の中国の光景を反映しているものです。悠久の歴史を誇る中国に、文化や思想の精華である世界遺産がまだまだ数多く存在している。この本を読んで、こういう歴史を知ることができたことは夏休みの間に一番の獲得とも言えます。

本を読んでいる間に、知らないうちに自分の持っている知識面が増え、いつかは使うところがある、知識っていうのは多ければいいに越したことはない。これらの知識を獲得する手段としては、紙でできた本を読むほかには楽しいことはない。私は本を読み始めた時は、紙でできた本しかないからです。自分の知識量がどんどん増え続けることで、人格は進化していく・これからは自分が歴史に関する本をもっと読みたいと思っています、自分が今持っている歴史に関する量はまだまだだからです。

あっという間にこれレポートに取り組み始めた時から、今までもう一年の時間が経ってしまったという。いいことでしょうか、悪いことでしょうか。一年の間に、クラスに所属されている方々に感謝の気持ちがいっぱいです、いろいろな意見を交わしたり、議論したりしたからです。いろいろも進歩しているからです。

力を持つ映像を作るための大学での学び

ヤンヒョン

私の夢はドキュメンタリーや芸能に限らず、ミュージックビデオや広報映像も制作するフリープロデューサーです。私の夢を実現するために関西学院大学の総合政策学部にあるメディア情報学科を目指しています。この夢のために勉強しながら大学生活を楽しく送りたいです。特に、大学生活の中でやってみたいことは是枝裕和監督のような作品を作りたいと思います。

父が映像関係の仕事をしており、父が映像作業をするのを見て映像に興味を持ち始めました。私も高校も映像特性化高校に進学しようとしたのですが、両親に反対され、私が希望する高校に行けなくなり、代わりに最初は一般の高校で勉強しました。その高校で、1年生を送る途中、5月に校内自作映像大会(User-Created Contents)に出ることになりました。その映像は著作権の侵害を防ぐための広報映像でした。友達と計画、撮影、などをしながら感じられなかった私の中の情熱を感じました。これをきっかけに私は私の夢を映像系にはっきり決め、両親に私の意志を明確に伝えました。両親は私を理解してくれて、後11月ごろ、ソウル映像高等学校に転学しました。映像高等学校で映像の基礎を学んで短編映画の撮影もしました。映像を学校で勉強することに非常に大きな喜びを感じ、友人らと協働して作業しながら大変だったことも作品が完成できれば、いい思い出になるということも知り、本当に楽しくて有益な生活を経験しました。このように、私は実際の体験を基づいて何よりも映像という分野を学びたいと思うようになりました。

映像を学ぶために私が日本留学を決めた理由は、日本文化や日本語が好きであったことに加えて、日本で作られてきた様々な映像作品に関心があったからです。韓国は今、少子化・高齢化日本が歩いてきた道を歩いています。たとえば、高齢化社会で起こる人材不足問題など、いろいろな研究者が問題を研究するときに日本と比較して研究することも多いです。今、日本が高齢化や少子化などの問題についてどんな政策や対策を行うかを見たら、韓国もそんな問題についてうまく対応できるように準備できると考えています。韓国はそんな問題を色々な方法で知らせているけど思うように関心があつめられていないです。日本は先に言った通りに韓国より前から高齢化や少子化問題を経験してきたのでそれについての研究や論文が多いです。それを翻訳した本や論文などを韓国で見たことはありません。みんな問題があることをしているのに、誰もその問題を解決するために動かないから社会が動かないことだと思うことでこの人達を動かせるために私はなにができるかと考えながら日本留学を調べていました。勉強の後、それを伝えるためのメディアは映像がいいかなと思いました。

ソウル映像高校から映像と言うメディアが持つ力は社会を動かせる力だと学んだのでやってみようと思い、関係あるメディアを探し始めました。その中で感動した一つの映画と一人の監督を見つけました。それは社会問題を映画で表現した『そして父になる』とその監督の是枝裕和です。映画の簡単なストーリーは、両家庭の子どもが病院で入れ替わったという事実を後で知るようになりました。子供たちを置いて血縁が重要か、育ててきた情が重要かという話を中心に流れます。参考に是枝監督が映画を作成することになったきっかけは常に映像作業などで忙しかったのに娘と多くの時間を過ごすことができず、事実上家には寝に入ってきた是枝監督がある日、家を出る自分に娘が“次にまた遊びにきてください”とあいさつしたことによって身分だけお父さんであって、子と何の精神的連帯感もなく暮してきたということに衝撃とインスピレーションを受けて作るようになったということです。是枝監督は、社会の人々が気にしないような面にカメラを向けて様々な挑戦的な作品を撮り続けていると思います。是枝監督は上のテーマのように血縁と育てた情、そして現在、両親たちの無関心などの多くの人気がつかない問題、目を背けている問題があると思います。そうした問題を焦点として、社会をすこしでも動かすことができる作品を作りたいとあらかじめ決断しました。決断した後に日本の大学で読んだドキュメンタリー原作の本“朽ちていった命”は私がなぜこんなことをしなければならぬかを教えてくれました。

決断した後に日本の大学で読んだドキュメンタリー原作の本“朽ちていった命”は私がなぜこんなことをしなければならぬかを教えてくれました。

この本を知ったきっかけは、原作であるドキュメンタリー“東海村臨界事故”を先生からおすすめされ、それについてもっと調べていたところ、ドキュメンタリーを背景に出た本が存在するというのを知ることになった。この本の内容は 1999 年 9 月 30 日に茨城県東海村にある核燃料加工施設‘JCO 東海事業所’で起きた臨界事故で被爆された大内久さんを治療する 83 日間の過程を中心に盛り込んだ本だ。83 日間東京大学病院で、当時にできた医療技術はもちろん、臨床実験中の薬や科学的根拠が不足な方法も全部利用して治療を行った。しかし、このような努力にも放射能に勝はできなかった。DNA が破壊され、細胞分裂は止まって肌はなくなりまた骨髄が壊れて免疫力が消えて出血は止まらなかった。そのような状況にも医療チームは骨髄移植で生まれた白血球や少しだが、再生した皮膚細胞を見て、希望を持って治療を継続して進んだ。治療が困難になりながら医師らも、看護師たちも果たしてこの治療が患者に有益なのか、苦痛だけを与えて治療が変わったわけではないかという希望が生まれた。私もここまで読んだ時同様だと思った。治療に対する結果は決まっておき、かえって死ぬのがもっと気楽なわけではないかと考えられていた。しかし、当時、彼の家族は最後まで諦めずに病院に訪れ、彼を応援した。81 日目になる日、医療チームは、心臓が停止した場合、蘇生措置をストップさせると家族に

知らしめた。家族たちは“分かりました”と答えて、質問はしなかった。83日目になる日に大内久さんは息を引き取った。臨界事件に対する責任は彼の華麗に付与され、各地方に被曝事故、医療対応について体系的な動きが見え始めた。

医者にとって患者の死亡は大きな不名誉です。それが不治病としても同じです。人は名誉のために殺人を犯したりする存在です。大内久氏はある医者が診療しても死が明確となり、それだけでなく、前に事例もなかった臨界事故でした。それにもかかわらず、医療チームは彼を向けて、彼の家族のために最善を尽くしました。彼らの姿が間接的に見、真の医師たちは、このような人ではないだろうかと思いました。私たちは生きてみて結果を予測して彼に従って行動します。しかし、この人たちのように結果ははじめから分かりきっても進む力が必要だと思います。医療チームは治療に臨み、結果は決まっていますが、彼のために最善を尽くしました。最善の結果に向けて動いたのではなく、大内久氏を向けて動きました。彼らを見て私はどんな人なのかも一度考えてみました。私の夢を成し遂げたという結果も重要だが、その過程も重要です。その医療チームが頑張ったことにはかならず価値があります。その価値は人間的で感性的なものです。この過程を私は忘れるわけにはならないと思いました。臨界事故以外の事件が大きいことも小さいこともこれから私が生きている世界に起こるだと思います。すでに起きた事故、今から起こる事件をなかったことにすることはできない。しかし、彼による、その経験による予防はできるはずです。私がドキュメンタリー監督になったとき、単に刺激的な映像で金を追う人がない臨界事故、医療チームのように人を向けて動く人になりたいと思いました。

感動させる映像を制作する時に重要なのは制作スキルだけでなく、広い思考力をもとにするアイデアと私の感性だと私は思います。すごい写真や映像撮影技術があったとしても、何を撮るか決めることができなければ無駄です。ソウル映像高校で写真や映像を取る方法、編集ツールの使用法など映像制作に対する基礎的なものを学びました。その次にスキルアップより様々な情報と感情を満たす勉強しなければならないと思います。私は、総合政策学部では色々な分野の勉強ができるからその強みを通じて考える力を育きたいです。1年生の夏休みに友達と自殺問題について断片映画を作りました。撮影を担当して先輩にスキルなどを身につける良い時間でした。2回生になったらメディア情報学科を選択して実習を通じて学ぶなら、十分に良い中身を得られて、未来に私が映像制作をする時にテーマ選定と接近方式に対する見方を広げることができるだろうと思います。また、韓国ではよく見られない学科に関係なく、他の学科の授業も聞くことができることがあってもし気に入る授業があったら聞きたいです。

このような夢を叶えるために、在学中のときからできるだけ多くの作品を作りたいです。高校生のときに撮った映像は、高校生ということで様々な制約があり、好きに作業することはできませんでした。例えば、車を運転することはできず、移動できる荷物の量を制限するとか、希望する場所を勝手に借りられないなどの制約がありました。大学生になって高校より自由な立場になり大学生の資格で受ける支援（断片映画支援など）、授業(アイディア面)で学んだ様々な技術などを使って作りたいです。卒業後は、就職について日本か韓国かはわからないけれど、映像関係の仕事に関わっていきたいです。最初に言ったフリープロデューサーを最優先として自分が選んだことに責任を持っていきたいです。仕事は別に一人で、または他の人と協力して芸術活動を通じて自己実現をしたいと考えています。私が芸術活動で作った作品が人を動かす、つまり力を持っている映像として社会に影響を与えられる人になり、社会問題の深刻性を知らせることが一番の目標です。

参考文献

朽ちていった命:被曝治療 83 日間の記録 (新潮文庫) 文庫 2006/10/1

NHK「東海村臨界事故」取材班(著)

授業について

日本語授業を受けながら他の留学生と仲良くなれる楽しい時間だったと思います。また、大学で学びたい、やってみたいことについて整理できるいい時間だったと考えます。本当に私がやりたいことをもう一度考え、具体的に実行できるその原動力になった時間で、それに他人の意見も聞いて見れることで私にとってもメリットある授業で、ありがとうございました。

差別問題の改善に力を入れたい

ヨウシイ

私は、将来メディアを通して社会に発信するジャーナリストになりたいと考えていますので、大学で一番やりたいのは、自分の日本語能力を上達して、二年次にメディア情報学科に所属して、メディアを通して現代社会で起こっている社会問題、特に差別の問題を解決する力を身に付けることです。

私は最初は LGBT に対する差別の問題しか関心を持っていませんでした。LGBT の差別の問題に関心を持つようになったきっかけは、私は好きなアメリカの俳優さん Lee Peace が出演した「Soldier' s Girl」という主人公がトランスジェンダーの映画でした。ある若いアメリカの兵士はトランスジェンダーである主人公と出会い、兵士は主人公に惹かれて、その後、2人は恋に落ちました。兵士のルームメートは、同性愛者が大嫌いな人で、主人公は元々男性であることを知って、兵士と何度も揉めました。最後に兵士のルームメートは新兵を酔っ払いにさせて、兵士を殺すことを暗示しました。結局、新兵は野球の棒で、熟睡の兵士を殴り殺しました。私のまとめる能力が本当に足りなくて、映画をすばらしいところを表せないです。主人公は兵士に追い求められるとき自分の完全に女になっていない体で生まれた不安と兵士に対する好きな気持ち、または兵士の訃報を知ったときの気持ちの描写と演出はとても良かったです。実は今まで LGBT を背景とする映画は多くの結末は悲劇です。それも今の社会の LGBT に対する不寛容な環境にとっても関係があると思います。その時は私はまだ小6で、トランスジェンダーまたは LGBT とは何かを知らなかったですが、中学校に入って自分の携帯を持つようになった後は、いろいろ調べて、LGBT に対する差別問題が存在していることを知りました。その時からずっとこの差別を出来るだけ小さくしたいと思いました。

中国の中学校を卒業して、小さいころから日本に憧れている私は、日本の高校に進学しました。そして、自分も実際に差別される経験をしました。学校の中で歩くと、

いつも「チャイニーズ、チャイニーズ」と笑われたり、食堂で並んでいるとき、割り込まれたりすることがありました。最初は気にしなかったのですが、二年生のときのあ
ることで、自分が差別されていることに気づきました。体育の授業で、グループを分
けて、試合をするとき、ある日本人の生徒は「チャイニーズ要らない」といって、体
育の先生は「確かに中国人と同じグループでかわいそう」と言いました。その時は苦
く笑うことしか出来ませんでした。その後から、私は安心感を得るために、毎日マ
スクをして学校に行くようになりました。そのときから、元々内気で、日本人の生徒と
話さない私は、さらに日本人の友達を作るのは無理だと思い込んで、卒業までも、
日本人の友達ができませんでした。自分の日本語力を高めるために日本人の友達を作
りたいわけではないですが、日本人の友達がいないと、自然の日本語を話すのはなか
なか難しいと思いますので、大学を新しい出発点として、日本人の友達を作りたいと
思います。今は、基礎演習の授業で同じグループの女の子とどんどん仲良くなってい
きました。そして、USJでのバイトもはじめましたので、バイト先でたくさんの元気な
と出会い、日本人とのコミュニケーションは多くなりました。そして、もっと多くの
漢字を正しく読めるように、漢検2級を取れるようにがんばります。

私の高校三年生のときの担任の先生は、社会学にとっても興味を持っている先生で、
よく授業で社会問題についての小論文を書かせました。そのとき、差別問題を書こう
と思ってしらべると、障害者の性に対する差別もあることを知りました。記事を見て
とても印象に残ったのは「一度でいいから好きな人に触れたい」という障害者カッ
プルかの願いです。確かに普通は障害者だから、性と恋愛はしなくてもいいじゃないか
と思っている人が少なくないでしょう。または障害者でも、性的欲求があることを気
付いてもないです。NHKの障害者の恋愛と性に関する番組で、車椅子を利用する障害
者はラブホテルに行きたいけど、ホテルに入るところに段差があって、入ることが出
来なかったシーンがありました。これは障害者たちの性的欲求は重視されていないこ
とを明らかにしました。調べたことと自分のつらい経験を通して、LGBTに対する差別

問題だけではなく、ほかの差別問題についても関心を持つようになりました。福祉に関する仕事をすればいいじゃないかと考えたこともありましたが、こういう差別だけではなく、ほかの差別問題とフェイクニュースにも関心を持っています。

フェイクニュースというのは、虚偽の情報で作られたニュースのことで、つまり真実ではないことを書いているニュースです。私はフェイクニュースに興味を持つようになったきっかけは、中国の医者と患者の関係の悪化の問題でした。私は中学校まで、医者であった母の影響で、ずっと医者になりたかったです。そのころから、中国の医者と患者の関係はとても陰悪になってしまいました。最初は確かに一部の徳のない医者のためですが、そのあと、真実より閲覧数と利益を優先されている医者を中傷するフェイクニュースがたくさん出てきて、患者の家族による医者を殺す事件も発生してしまい、医者と患者の関係はさらに悪化してきました。今中国では、医者になる人の数はどんどん減っています。私はこの悪化している関係の改善に何かをしたいとおもいました。その時は、真実を伝えるジャーナリストという職業の重要性を知って、ジャーナリストになりたいと考えるようになりました。良いジャーナリストになるために、メディアに関する知識と自分の思考力はもちろん必要ですが、社会学に関する知識も身に付けなければならないと思いますので、二年生になって、時間があったら、社会学部の授業も取りたいと思います。しかし、今の私は二年次に総合政策学科とメディア情報学科のどちらに所属するのかに悩んでいます。二つの学科はどちらでも、将来に役に立つ知識を学ぶことができますので、しっかり考えてから選びたいと私は思っています。

私はドキュメンタリー映像に興味を持って、将来できるなら、ドキュメンタリー映像を作りたいとかがていまして、夏休みに『社会の今を見つめて TV ドキュメンタリーを作る』という本を読みました。この本は実は高校の図書館の先生が薦めてくれました。あの時は受験でいろいろ忙しくて、読みませんでしたので、今年の夏休みにこの本を読みました。この本は主に著者自分が作ったドキュメンタリーを紹介し

ながら、日本の社会問題を反映しました。そして、ドキュメンタリーはどのようなものか、どうやって作ってるのかのも簡単に書きました。岩波ジュニア新書なので、言葉遣いもそんなに難しくなくて、わかりやすかったです。

この本には4つの社会問題を書きましたが、私にとってとても印象に残ったのは、「私の隣に」という名前の章節です。この章節では、著者は自分をはじめで作ったテレビドキュメンタリー「マリーサの場合」を紹介しました。マリーサは多くの日本で東南アジアから働きにくる女性たちの一人です。働いたお店で日本人の男性と知り合っ、結婚せずに子供を生みました。しかし、子供の父は自分の子供として認知してもらえず、子供は無国籍で、不法滞在になります。マリーサは低い収入でひとりで子供を扶養しなければなりません。国民健康保険に入らないので、病院にいくと医療費はとても高いです。日本の乳幼児に義務つけられている予防注射も打ってもらえません。マリーサ一人のことだったら、社会問題になりません。しかし、あの時は、日本でこのようなことは多く出てきました。最初に、マリーサは取材することに対して、拒絶の態度でした。「取材に協力したからって、娘に日本の国籍や滞在資格がもらえて、予防注射を打ってもらえるわけでもない。取材がもとで不法滞在がわかってしまったら、フィリピンに強制送還去されてしまう。番組が放送されて、オーバースティの子供たちの命や健康が危ない状態に置かれていることをたとえみんなが知っていても、私たちには何もない」とマリーサは著者に言いました。

マリーサの話聞いて、いろいろ考えました。ジャーナリストを志望している私にも考えさせました。確かに、こういう社会問題を記事にして、ドキュメンタリーにして、皆に知ってもらえたくても、当事者のためにも考えなくてはなりません。助けたい、何かをしてあげたいとしても、不適度だったら、逆に相手を傷付けるかもしれません。人間関係の改善に力を入れたいと考えている私にとって、メディアに関する知識だけでは足りないと考えます。その以外に必要なものは、大学で、探し出すながら、身に付けていきたいと考えています。

ジャーナリストになるにはもちろん難しいことがたくさんあります。たとえば、政治的な原因などで真実を言えないときが必ずあります。取材することによって自分自身の安全を確保できないこともきっとあります。その時は自分の初心をどうやってまもっていくのかはとても難しいことだと思います。しかし、私はずっとジャーナリストになって、差別問題の改善に力を入れたいと考えていますので、今の私は難しいであることを知っていますが、諦めることはまだ考えたことがないです。なので、わたしは大学で自分の日本語力を高めて、メディアを通して発信する能力を身につけて、ジャーナリストになれるようにがんばりたいと思います。

授業の感想

日本語の授業でレポートを書く能力を一定の程度身に付けました。そしてかかさんがいったように、毎回印刷することで紙を浪費することにもなるので、これから改善方法を考えたいと思います。実は私はほかの人の良くないところを指摘するのが苦手なひとでした、この授業でこの点も良くなりました。

人とつながる為の外国語

リミンジ

1. はじめに

世界には多くの国が存在しており、国連加盟国には193カ国が含まれている。また、国によって話す言語は異なり、複数の言語を用いる国もある。ギネス記録によると、世界で最も多くの言語を操る人は50カ国の言語を話せる。グローバル化が進んでいる現代社会においては、バイリンガルは少なくない。その一例が、私の姉である。姉は韓国語、日本語、英語を話すことができ、様々な国籍の友人を持っている。去年、大阪大学に留学をし、日本人だけでなく欧米人とも交友を深めた。帰国後も姉は日本で交友を深めた欧米人を韓国に招いて韓国の文化を教えたり、観光をしたりするなどして親交を深めた。外国人の友人と英語で話している姉の姿は普通の姉とは別人で、とても魅力的に見えるのである。

なぜ、姉は色々な言語を話し、学ぶのか。姉に外国語を学ぶ理由を聞いてみたところ、外国人とスムーズに話すためには外国語を勉強しなければならないため、英語を勉強し始めたという。外国人とコミュニケーションをとることが楽しくなり、かつ日本語は韓国語と語順が似ている為、日本語を学び始めたのである。阪大に半年間くらい通い、色々な外国語を学びたいと考え、今はベトナム語に挑戦したいという。ベトナムの市場には若者が多く、海外の企業が進出しているので、将来に産業が明るいと見え、ベトナム語を学びたいそうである。最初は外国人と早く話すために外国語を学ぼうと考えていたが、今は将来の為に外国語を学ぼうと思うようになったのである。

色々な言語を話すことで、人と繋がることは自分の中では素敵なことだと思う。全く違う環境で生まれてきた人と性格や文化など、今まで経験してきていないことを交流し、理解する事は素敵なことだと考える。こういうのは普段、簡単にできることではないので、自分にとっては素敵なことである。したがって、私は関西学院大学の4年の間に色々な外国語を学びたいと考えている。

2. 外国語を挑みたいと考えるようになったきっかけ

ただ、普段の日常生活からも言語の必要性を感じている。例えば、日本でアルバイトをする際に外国人のお客さんに接客する時である。様々な国籍のお客さんから商品について聞かれたり、外国語で質問されたりしたことがある。しかし、自分の言語力の不足により、お客様の対応をすることができなかったことが多数あった。その時、自分ができる韓国語や日本語だけでは様々な外国人とのコミュニケーションをとることは難しいと考え、外国語を学びたいと思うようになり、私が大学で外国語を勉強したくなったきっかけである。

まず、私は大学生の間に中国語や英語に力を入れたいと考えている。私は日本に來日してから韓国人の友達よりも中国や台湾、香港など、中国系の友達ができたのである。友人に中国語の会話を教えてもらい、中国語で話したりしたが、知っていなかった色々な中国の人と友達できた。その当時、外国語で知らない人と繋がることをわかったのである。色々な外国語の中で中国語を学びたいと思うようになった理由をいうと、やはり中国は私の母国である韓国と近い、似てるような価値観をもっているが、異なる文化について学びたいと考え、大学の間に中国語を学び、中国の人と繋がりが文化について知りたい。

その上に私にとって憧れである2人の親戚はアメリカで生まれ育ったため、英語や韓国語を話すことができる。2人の中では英語で話し、私との間では韓国語で話す姿を初めてみた瞬間、その2人は素敵であり、その印象はとても強かった。それ以降、親戚の2人と韓国語ではなく英語を話したいと強く思うようになった。

3. 私にとって日本語とは

そもそも、私の周りは色々な言語を使う環境で、その影響で外国語に興味を持つようになった。日本に住んでいる叔母が時々韓国に帰ってくる際に日本語は勉強すればするほど難しくなるが、韓国語と文法の語順が似ているので、楽しく学べると言われ、日本語を学び始めた。高校の時、第2外国語という授業で日本語を学んだことがある。教えてくれた日本語の先生は授業で日本語だけではなく、日本の文化や大阪に留学した経験の話もしてくれたが、日本という国に行き、勉強してみたいと思い、その思いが留学をすることまでになった。

日本にきてひらがなやカタカナからはじめ、漢字まで2年をかけて日本語を勉強してきた。NHKのラジオを聞いたり、新聞記事を読み、スクラップをしたりするなど、様々な方法を利用し、自ら言語を楽しみながら習得する方法を学んだ。言語の難しさや大変さではなく、楽しさを初めて知り、好きになった。

また、日本語で日本人と話すことができた瞬間から、自分が成長している新しさ、やり甲斐を感じ、これから多様な言語を使い、様々な国の人と交流したいと思っている。

4. これからの計画

じゃあ、どうすれば外国語を習得し、人と繋がることができるだろうか。関西学院大学の外国語の講義のスケジュールは、IからVIまでのレベルで、週2回の講義が行っている。それを機会として来年の春学期から中国語の講義を履修したいと考えている。日本語を学びながら習得した方法のように漢字や単語はもとより、中国のニュースや映画を鑑賞をしたり、中国人の留学生と交流をするのを中心として中国語を習得していきたいと考えている。また、英語は、今関西学院大学の留学生の寮に住んでいるが、外国人留学生と交流をし、会話を教えてもらいたい。また、言語を学ぶ際に単語が大事であることに気づいたので、単語を中心として学んでいきたいと考えている。それに加え、映画やドラマを観、聴き取る練習やどの場合にどんな表現方法を使えばいいかなど、駆使しながら覚えていきたい。来年の間までには、中国語や英語、どちらかの検定試験に受けたいと考えていて、検定試験の対策として中国語や英語を習得していきたいと考えている。

5. 「外国語を学ぶための言語学の考え方」について

外国語を習得するためにどの考え方を持ち、勉強すれば良いかと思い、夏休みの間に黒田龍之助著者の「外国語を学ぶための言語学の考え方」という本を読んだ。なぜ、この本を選んだかという私が大学でしたいことである外国語を習得することと関連があると思い、この本を選んだ。「外国語を学ぶための言語学の考え方」という本は私が外国語を勉強する上で、どのような考え方を持ってアプローチしていくのかについて参考になると考える。

この本は外国語を学ぶに際して語彙や文法を中心に習得するのではなく、言語学の観点から考える方法について書いてある。一つの話を紹介してみると、外国語の学習を料理に比喻している。料理と言語は人が生きる上で欠かせないもので、プロの人がいれば、そうではない人もいる。その人らが生活をするため、料理を作って食べたり、何かを話そうとする。その二つで、筆者は、言語と料理は似ていると言っている。言語を料理に比喻したように、外国語を学ぶ際に、自分が目指していることをはっきりし、それを楽しむことが大事である。その他に、男女によって異なる言語語彙や言語の変化、言語用語についての話など、言語学の観点からの内容もあった。

また、人と話す際に空気を読むのは当たり前である部分が一番印象に残ったのである。人間は日常生活の時も複雑な言語活動をしており、単なる挨拶だけでなく様々な表現を使い、会話をする。しかし、お互いが理解をしたり、相手が自分のメッセージをどのように受け止めるかを把握するのも重要であり、事前に以上のことを把握しているため、どんな曖昧な表現でも受け止め、会話をしている。今まで、自分が人と話している時を振り返って考えてみると、自分も一方的ではなく、お互いが理解するのを大事として人とコミュニケーションをとったのである。そればかりか自分が話したいことを理解しやすくするため、色々な例えをあげながら説明して

いたのに気づいた。

この本を読み、「外国語はただ 1 つだけではなく、複数の外国語を学び、触れながら母語と比較する必要がある。178p」という内容は、もともとはなぜ自分の母語と比較するのか、その必要性があれば、何に役に立つのかなど、疑問を持っていたが、これから言語をどのようなアプローチで習得していくのかと思っていた私に今後は役に立つかもしれない。

しかし、この本は、外国語を学び、それを使うことで、様々な人と繋がりたいと思っている私の考え方とは少し違う本であった。私は外国語を使い、そこで繋がった人とお互いの国に訪れ、文化交流をしたいという考え方に反し、この本は言語を学ぶための考え方よりも言語学の知識や外国語を活用する学習方法、言語学の考え方に触れながら外国語を楽しむような内容になっているので、人と繋がりたいため、外国語を勉強したいと考えている私とは違う本であった。

6. 結論

改めて自分にとって言語とは何かと考えてみた。まず、言語を習得する人の目的は様々だろう。例えば、自分の将来のために外国語を学ぶ人がいれば、グローバル化が進んでいる今の社会に生きていくために学ぶ人もいる。それだけでなく、外国語が義務教育になっているので、仕方なく日本の教育方針に従わなければならないという理由で外国語を学んでいる人もいる。その中で、私にとっての言語とは様々な人に出会い、つながるための一種の手段であり、憧れではないかと考える。色んな言語を使う環境にいたため、自然に外国語に興味を持ち始め、普段の日常生活で外国語は欠かせないものであり、外国語が人とコミュニケーションをとるための手段であることに気付いた。また、姉や 2 人の親戚のように色んな外国語を話し、国籍は関係なく、様々な人に出会いたい。人とつながることで、今まで自分が経験してきていなかったことを学ぶことは自分が成長している新しさを感じる。

今は、中国語や英語を習得するため、アルバイト先の中国の留学生に簡単な会話を教えてもらったり話したりしており、ユーチューブで英語の動画をみたりしている。まず、読みや書きができないため、一日に 10 個ずつ単語を覚えている。まだ勉強は進んではないけれど、冬休みを機会として中国語、英語の単語を覚え、現地の人らと話すことができるように会話練習をしたいと考えている。

日本でも色んな人と出会ってきたが、自分の人生において欠かせない存在やかけがえのない思い出ができたので、私と違う環境に住んでおり、文化が違う人とコミュニケーションをとり、新しい感覚や視野を広げていきたい。

授業感想

1 年間、日本語の授業を受け、私が感じたのは私がこれから何をしていくか、私にとって大学生活はなにかのように考えるようになる授業であった。また、いろんな留学生からコメントをもらい、自分が考えていなかったことを書き直したり、書き加えたりするなど、違う観点からのコメントをもらうことができると考える。しかし、毎回自分のレポートは紙に印刷しなければならないのが不便で、残念であった。

日本語を通して日本文化を楽しみたい

劉日華

大学生活の4年間に、私は日本の留学生活で日本文化を楽しみたいと思います。留学生活は学生にとって、大変貴重な経験なので、無駄にしたくないです。最初は日本語の勉強が大事だと思います。一年生のとき、授業や課題を通して、自分の読み書きの能力を高めます。そして、自分も日本語を勉強しているうちに、日本の文化や社会をより知る事ができます。

日本のことを好きになったきっかけは、小さい頃にテレビで見た日本のドラマや番組でした。ドラマに映っていた日本の下町の風景や商店街の風景を見て、みんなが仲良くて挨拶したり、日常話をしたりするだけで十分楽しんでいきます。そうした雰囲気は私にとって、すごく魅力的で、そこで興味をもちました。

あの頃から、自分が日本の大学に留学したいと思いました。そして、高校生になり、様々な日本語の教材を買って、日本語を独学で勉強し始めましたが、日本語の表現や文法が香港の広東語とはだいぶ違うので、日本語の勉強はかなり苦戦でした。日本語の勉強は確かに難しいですが、少しずつ日本の文化や社会を知るのは楽しかったです。これから関学の図書館を利用して、たくさんの本を読みたいです。例えば夏目漱石や芥川龍之介等の文豪の作品です。日本の社会や文化などを深く知りたいです。

日本の大学に入るために、前持って日本の日本語学校に1年間くらい留学した方がいいと親から勧められました。そして、日本語を独学で勉強していた頃、ネットで見っていた番組の人が大阪弁を使い、そのアクセントや言葉遣いが自分今まで読んでいた教科書とはだいぶ違うので、大阪弁にちょっと興味があって、大阪の日本語学校に留学した。日本に来たとき、初めて日本の生活を体験し、日本人と交流したあと、日本人に対するイメージがちょっと変わりました。前の日本人のイメージは無口で、静かな人多いが、実際情熱の人も結構多かったです。また、思いやりのある考え方と物や人に対して、常に感謝の気持ちを持つ日本人の文化に感銘を受けました。自分が今まで知っている日本はほんの一部でした。

また、大学の様々なボランティア活動に参加するつもりです。今、J-FUN というサークルに入りました。J-FUN とは、国際難民に関して活動するサークルです。先輩やスタッフなどと交流し、色んなイベントに協力し、自分のコミュニケーション

能力を高めたいと思います。実は私が香港にいる頃はボランティア活動に興味はなかったが、去年日本語学校にいるとき、先生たちに「ボランティア活動に参加したら、日本のことをもっと知ることができますよ。」と強く勧められ、実際参加したら、日本人の高校生たちと一緒に募金活動を行い、高校生たちと交流し、互いの文化を話していました。それは思った以上より楽しかったです。それから、ボランティア活動が好きになりました。それに、今まで自分中心で考えて行動してきたが、他の人のために何かをするのは思った以上に嬉しかったです。もちろん、時間の配分は大変ですが、そのバランスを取るのも1つの挑戦だと思います。

そして、時間があれば、この4年間で英語の勉強もしたいです。なぜなら、ボランティア活動は世界でのいろいろな人と交流するので、英語の重要性がますます大きくなります。また、世界はグローバル化に進み。私は将来海外で仕事したいですが、今自分の英語力では少し無理があると強く感じます。なので、英語の勉強も励みます。しかし、留学生はECを履修したら、スケジュールが大変になるので、履修しませんでした。夏休みに行われた英語の集中講義に参加しました。僅かな5日間の授業も大事にしたいです。そして、実際に参加してみたら、思った以上より面白かったです。他の学部の日本人の学生と交流ができ、英語でディスカッションをしたり、プレゼンテーションをしたりしました。また、グループプロジェクトのアンケートを通じて、日本の大学生のアルバイトの事情を知り、今時の日本の学生の生活にも触れました。思わぬ所に日本の文化を知り、とても充実の5日間でした。もし今後も機会があれば、またそうした集中講義に参加したいです。

この4年間で楽しい留学生活を送りながら、日本語と英語を勉強し、ボランティア活動に参加することによって、様々な経験を積み、将来社会人になるときに生かしたいです。夏休みに日本文化に関する本を読みました。そのタイトルは「お笑い日本語革命」、作者は松本修です。彼が様々なバラエティー番組を計画していて、テレビ娯楽部門最優秀賞を受賞していました。私は普段の生活で良くテレビを見ているので、番組の企画に参加するお笑い芸人たちが面白くて、だんだんお笑いのことを知りたくなりました。実際、この本はお笑いがどれくらい日本の言葉文化に影響を与えるのかを紹介するので、この一冊を選びました。

この本は5つの日本全国に広めている言葉で構成しています。序章の「どんくさい」を始め、最後の「おかん」で締めます。この本は今私たち使っている言葉が昔は流行っていないのに、あるきっかけで、大勢の人にもしくは全国に広まっていました。例えば「どんくさい」は80年代以前のテレビ番組で広まっていたが、「千と千尋の神隠し」という2001年の大人気映画にも出ていました。例文としては、「ま

た転んだか、どんくさいなあ！」ここ3、40年お笑い番組やお笑い芸人を通じて、様々な新しい言葉が誕生した。それが現代の日本語も変えてきました。第一章は「マジ」という言葉です。普段私たち使っているけど、この言葉は実は90年代以後一般的に使われています。それ以前はあんまりはやっていなかったです。お笑い芸人がこの言葉を使うことによって、世間に広めていました。やがて、今の若者の言葉に欠かせない言葉です。第二章は「みたいな」という言葉です。この言葉はもともとお笑い芸人が言葉の後につけて、笑を取るの目的でした。今は自分の言葉を断言しないために、「みたいな」を付けることが多いです。第三章は「キレル」という言葉です。この言葉は1990年代の若者言葉でした。しかし、週刊誌の記事に使うことによって、怒りを表現する言葉として、社会に広まっていた。最終章は「おかん」という言葉です。この言葉は一般的に大阪や関西のイメージでしたが、実際昔この言葉がお笑いのネタに使われていた。今はただ大阪のお母さんや大衆のお母さんの意味でした。

この本は80年代の番組を紹介し、実際データを整理し、言葉の誕生の年表が表示され、読者にわかりやすく伝えました。この本を読んだ後、日本の社会にもより知ることができました。日常会話はもちろん、本当の日本をより知るために、日本の番組や流行っているものに触れることも大切です。この本に印象に残った所は「マジ」という言葉です。日本のドラマを見る時や日本人と話す時もこの言葉はよく耳にします。しかし、実はこの言葉も由来があるとは知らなかったです。自分も日本語を勉強する時、日本のニュースや番組を見て、常にはやっていることをチェックします。例えば、毎年の流行語はその年で社会に大きな影響を与えた言葉です。その言葉を知ることによって、日本の社会や文化の勉強にもなります。自分は大学で1番やりたい事は日本語の勉強と日本の文化を知ることです。そうした勉強は異文化交流にも役に立つと思います。

そして、そうした言葉の由来が本当に面白いと思いました。日本語の文化は時代と共に、いつも新しいものが加わっています。そこに私は興味があって、もっと深く知りたいです。実際自分がそうした言葉の誕生はあまり意識していませんでした。なぜなら、日本語の教材の中にそうした言葉はなかったからです。しかし、そうした言葉が実際日本人の生活によく使われています。日本語は昔とは比べて、どんどん新しい言葉が出てきました。昔の番組で使われていた言葉が今でも世間に浸透しています。普段自分はそうした言葉をあまり使わないけど、こういう言葉を知ると、より日本語をネイティブに話すことができます。日本語は社会の変化と共に、言葉の変化も変わっていきます。自分もはじめに日本語を勉強するときには、そんなに言葉の意味を考えてなく、ただひたすら単語や例文を暗記するだけでした。大体の

意味は把握しているにもかかわらず、片言の日本語しか話せなかったです。もちろん勉強不足もありますが、たくさん勉強すれば、流暢に話せるというわけではないです。言葉の勉強は全面的に勉強しないとやはり足りないものがあります。日本の文化に興味を持ち、日本語を勉強するので、日本語勉強すればするほど、日本の文化にますます魅力を感じます。

私にとって日本語を勉強することは、単にスキルとして勉強するわけではなく、より日本の文化を知るための手段です。なので、日本に留学しにきました。また、本を読むと様々なことを教えてくれます。違うジャンルの本によって様々な勉強ができます。例えば、料理の本なら日本の食材を知り、地理の本なら日本の地方の歴史や変化などを知られます。そして、その過程の中で日本文化の奥が深さを強く感じます。文化の世界は幅広いので、日本に関しての本をたくさん読んで、市内のボランティア活動も参加し、日本語や日本の文化を勉強し、感じたいと思います。また、三田市で生活している半年間、最初はちょっと不安でしたが、実際に住んでみれば、すごく過ごしやすいです。なぜなら、三田市の周りが静かで、緑が豊かですから。今では、休日の朝に家の周りのところに散歩することが習慣になり、1人で周りの風景を見ながら、自分と向き合う時間が好きになりました。多忙な香港の生活と違い、自然が多い日本は過ごしやすいと思います。これからも様々な角度で日本文化を楽しんで、充実の大学生活を送ります。香港で感じられない雰囲気や生活を日本で存分に味わい、初心を忘れずに頑張りたいと思います。

この半年間の日本語授業では文章を書いたり、議論したりします。皆の意見やアドバイスを頂き、自分の考えや見方も変わりました。また、皆の文章を読んだ後、自分の意見をクラス全員で話し合います。そして、皆の質問に答え、自分の文章を良くするための意見を参考にし、いい勉強になりました。他にも、文章の討論は同じクラスの人だけではなく、交流授業では他のクラスの人と交流ができ、新たな発見もできました。しかし、そうした交流授業が2,3回しかないので、ちょっと残念だと思います。もしできれば、交流授業の回数を増えて欲しいです。来年の2回生の日本語授業はどんな勉強ができるのか、実に楽しみです。

参照文献

松本修. (2010). お笑い日本語革命. 新潮社.

目標を実現して行こう

－環境と経済が共に発展することを望む－

梁 宇軒

私は学生時代から毎日ニュースを気にしています。スマホとインターネットの普及に伴って、ニュースを受けることは便利になります。近年、環境保護と社会発展に関するニュースがだんだん多くなっています。なぜ近年環境保護を重視するのか、環境は私たちの生活にどの程度に繋がっているのか。それぞれの問題を考えていました。

私の故郷は以前ひどい環境汚染がある町でした。ある紙製造に関する工場を長江下流の近くで建てたことがあります。この工場は紙を製造する過程で大量の有毒物質を含んだ気体を排出し、廃水ルールを無視して直接に長江に流れてしまいました。そして、周りの人々は政府などの専門機構にこの工場のルール違反など悪影響について告発して、政府がいろいろな改善方法を打ち出しました。工場を人口が少ない郊外へ移して、汚染物質の排出ルールを強くし、有効に解決しました。そして、工場による水質汚染や空気汚染などを解決したおかげで、周りの住民は生活の質が高くなっていました。これは環境保護に関する成功した例ではないのでしょうか。このことから、私は環境保護にもっと力を入れたいと思います。

そして、中国での工業発展は先進国より遅かったのですが、今の中国は先進国との格差がますます狭くなり、環境保護は重要な問題になります。近年、中国の政府は環境問題を解決することにもっと力を入れています。但し、この問題を解決することは簡単ではなく、色々な領域に及びます。将来これに関する仕事や人材はもっと必要です。私にとってこのことは自分で勉強する知識を活用して、自国のために力を入れることができながら、後輩にいい生活環境を築いてあげられるかもしれません。

日本は環境保護が全世界で前列に並んでいます。ゴミの分別や喫煙所の設置など細かいことまで環境保護をポジティブに行ってきました。なぜ日本は環境を積極的に保護しているのか。1950年代から、「高度経済成長期」という飛躍的に成長を遂げた時期を迎えました。この時期に重工業を速く発展させることを目標としていろいろな工場を建てました。1968年日本のGDPは世界第二位になったが、「四大公害」という工場活動により排出された有害物質が、人々の健康に悪い影響を与えてしまいました。このことをはじめ、日本政府は環境保護に基づいて産業活動を行いました。これが、私が日本に留学する理由になりました。しかし、実際には環境問題を解決する前に、環境を考えるだけでなく、経済の発展や国家の利益も含めて考えなければならないので、どのような方法で環境を保護すると同時に、経済を最大に発展させるために勉強することが大学で一番したいことです。

一番したいことを達成するために、二つの目標を立てていました。

一つ目は、大学の授業を深く理解するために日本語を勉強することは一番重要だと思います。大学の授業にはいろいろな専門用語や外来語のような複雑な言葉があり、そして日本語の語順は中国語と全然違うので、特に先生が配布する資料や専門書の中の長い文を理解しにくいのです。したがって、日本語の勉強は大学で一番重要なことになりました。

二つ目は、環境に関する知識を十分に勉強することです。一年で環境に関する科目をたくさん選びました。例えば、「科学と社会」はデータを計算することを通じて、問題点を探して、どうすれば環境問題を解決するのかを考えるという科目です。「論理学」は問題点のなかでどのように因果関係を探せるのかを教える科目です。秋学期から専門科目が多く出ていました。例えば、「環境倫理」という科目は倫理学の視点から人間と環境との関係や自然の権利などの問題はどのように理解していくのかを分析しながら、学生と一緒に考えてレビューします。二年で総合政策学科の環境政策フィールドを選択して、幅広い知識を学びたいです。特に環境汚染の原因や環境と経済発展に関わる知識を勉強していきたいです。三年生から自分で学ぶ知識と自分の考えに繋がって、卒業論文を書くために準備して始めたいと思います。大学で環境に関する知識を勉強する一方で、専門書やレポートを読むことが必要だと思います。私は夏休みの間に『環境保全と公共政策』という専門書を読みました。

この本は「政府・企業・市民」という三つの重要なファクターを巡って、環境を保全するためにどのようにいい公共政策を制定するのかを紹介しました。私は大学で勉強したいテーマはどのような方法で環境を保護するかと同時に経済を最大に発展させることであるので、この本の中で「政府と企業」・「政府と市民」に関連する部分を丁寧に読みました。

「政府と企業」の部分で主なキーワードである規制、利害について、専門的な知識と具体的な事例を結びつけてとり上げられました。環境汚染による主な原因は企業がコストを下げる、いわゆる純便益を最大になるために、不正行為があって、公害健康被害や廃棄物問題などさまざまな環境問題を生み出してきました。このような問題を解決するために政府がいろいろな政策を制定しました。以下の文は自分で政策を制定する方法をまとめてきました。

まず、各主体の利害得失を考えながら、汚染活動の社会的最適水準を達成するために、環境政策の政策目標として多数決ルールで政治的に設定します。そして、政府はいろいろな規制手段で環境保護を促進します。例えば、もっとも直接な方法は環境税です。環境税の中で炭素税、温暖化対策税、自動車税など色々な要素を含みます。日本では1997年12月に京都市で第3回気候変動枠組条約締約国会議が開かれて、京都議定書を採択しました。CO2排出量削減の国際公約を実現させるために環境税などの税制を使用することが必要です。しかし、京都議定書の削減目標は2008年から2012年までの期間中に、先進国全体の温室効果ガス6種の合計排出量を1990年に比べて少なくとも5%削減することを定めましたが、実際には90年に比べて20%増加してしまいました。2012年に京都議定書の改正案が採択されて、2013年から2020年までの8年間を第二約束期間とすること、排出量を1990年の水準から少なくとも18%削減すること、新たに三フッ化窒素(NF3)が削減対象のガスに追加される

こと、約束期間の途中で数値目標の上乗せができることなどが盛り込まれました。しかし、一部の国は第二約束期間の目標を明確にしなかったため、この条約は実際の状況にバランスを取らない可能性もあります。したがって、各時期の経済発展状況は異なるので、税制を制定することだけではなく活用することが必要となります。最後には行財政システムという持続可能な社会を目指す政策体系に発展することが求められています。このシステムの中で直接的な手段、間接的な手段、基盤的な手段、公共機関自身による活動手段、原因者を誘導・制御する手段、契約や自発性に基づく手段という六つの環境政策類型があって、環境問題を細かくして、よく解決できます。（以上の内容は『環境保全と公共政策』の第1章 環境保全と公共選択、第3章 環境税、第4章 環境政策と行政システムを要約しました）

この本を読んで、事例につなげて考えると、現在の環境問題・環境政策は単なる行政的な課題を超え、政治・経済はもちろん関連します。環境政策は自国の実際状況に基づいて合理的に詳しく制定すべきです。つまり、以前の政策基準は現在に対して適用しないかもしれませんので、政策は実況により絶えず修正すべきです。そして、環境問題を解決するには国（政府・政党）・企業・市民・NGO/NPOなどのアクターがお互いに連携すべきであり、この中から私は政府と市民によく注目しています。何故かという、政府は様々な政策や法律を制定する機関であり、制定したことは直接に実施者に繋がっていくので、政策の有効性とか実効性などいろいろなディテールを重視しなければならない。そして、市民は政策システムで政策に応じていく役であるので、政策にどのような程度に応えるか、あるいは制定された目標をなり遂げるか。このような問題は市民の姿に決定されているから、政府は市民に主体的、あるいは主観的に行動していくことを導いたほうがいいと思います。

以上の目標に努力すると同時に、大学の授業以外の時間を豊かにすることも重要だと思っています。大学に入って、自由時間が多くなります。それぞれの時間はどのように有効的、十分に利用できるかをよく考えます。秋学期から、私は通学時間や寝るまえなど暇な時、ライトノベルやノンフィクションなど様々な分野の書籍をよく読みます。何の本を読んで、自分にとって本から何をもらった、大学の勉強に対して何の役に立つ、それぞれの問題はよく自問します。

専門書のように概念や結論など理論的な知識を明確に教えない本がたくさんあり、このような本は一般的に多くの物語から構成されているので、何の物事に対する見方・考え方を自分で理解する必要があります。どのような本でも、自分の思考力を磨くことができるし、自分に合う方法を選ぶこともできると思います。自分が大学で勉強したいことに対して、もちろん専門書を読む必要があって、暇な時に読む本は自分が直面する専門的な問題に理論的な知識を提供することはできないかもしれませんが、多方面から問題を考えることや問題で重要なポイントを早く見つけ出すなど専門知識以外の能力を提供できると思います。

例えば、最近私は『看见』という中国の作家が書いた中国の社会問題に関わる本を読みまして、本の中で中国のある町の小学校での教育問題を紹介された章によく注目しました。簡単に言うと、この学校では学生さんが服毒自殺した事件が一週間に三回起こってしまいました。原因は学生の間での友情のためやほかの学生が性的暴

行をしたなどです。しかし、自殺した学生は平均年齢が10歳なので、このような問題に直面する時、自分がどうすればいいのかわかりません、あるいは正しい解決方法を判断できませんということがわかります。そもそも、この事件は誰の責任ですかをよく考えます。やっぱり両親の責任が一番重いの、小学校そしてこの地域の生活環境も悪影響を与える恐れがあります。この例は、私が大学で学びたいことに関係がないかもしれませんが、いろいろな問題を分析する時、先に述べたような思考力が高められると思います。ですから、専門書以外の書籍を読むことも重要です。

そして、自分で故郷の環境保護に関する過程や現状をテーマとしてドキュメンタリーを作りたいです。私はスマホで1分間以内の日本の風景や面白いことに関する短い動画を時々作ります。撮影の設備やビデオ制作方法などの専門能力が不足なので、ドキュメンタリーを作ることはずっと私の夢でした。そして、このことは自分の故郷を宣伝できるだけでなく、故郷は環境保護する過程で何をしたのかを経験として、ほかの汚染がある地方にも解決方法を提案できると思います。

環境問題は国家の責任だけではなく、私たちにも責任があるはずだと思います。環境を守れることは我々から始まらなければならないと思います。したがって、大学で環境に関わる授業を受けること、色々な本から得た知識、ドキュメンタリーを勉強したり作ること、それぞれの自分でしたいことを通じて、環境と経済が共に発展できることを望みます。

授業についての感想：

日本語ⅠとⅡの授業は、私たちの日本語能力、そしてコミュニケーション能力を高めることをはっきり感じました。特に、学生さんの間に相手の書いた文を読んで、アドバイスを相互に話すことはすごくいいだと思いました。でも、この授業についてアドバイスが二つあります。一つ目は紙の節約です。発表者は発表する前に人数分のレポートを印刷する必要があるので、一般的に少なくとも一人で2-3枚、クラス全部は20-30枚が必要ですので、ちょっと紙を無駄にしたいと思います。紙に代わってパソコンやiPadなどを使ったほうがいいと思います。二つ目は学生の発言する頻度を高めます。各発表者に全員が自分の意見やアドバイスをして、全員の積極性を上げたほうがいいと思います。

2 クラス

担当 横野 さゆる

大学でやりたいこと

オウシエン

大学では学習もちろん、自分の能力を伸ばして、自分の視野を広げることも大事だと考えます。この4年間後悔しないように、やりたいことは主に二つがあります。

一つ目は、短期あるいは長期留学することです。留学したいと思ったきっかけは、2年前に旅行の時です。川を隔てたミャンマーから来た難民の様子を見て、なぜこの地域の発展が母国の他の市町村に比べ、なかなか進まないのだろうか、一体どんな問題が生じたのかという疑問が生じてきました。私はこの時、国際協力開発を勉強したいと思いました。ミャンマーのような発展途上国についての課題や国際協力など、経済発展の条件や貧富の格差の問題を実践的に学びたいです。また、私は国際開発や援助など多角的な視点から問題を分析し、考えるようになりたいです。そのためには大学で幅広い知識を学ぶだけではなく、実際に留学で体験し、違った価値観を持つ人と意見を交換する方がいいと思います。

今考えているのはドイツに留学することです。日本に来て以来、中国やアジアなど行ったことがある国と違う雰囲気を感じていて、最も感じたのは地域格差の方面です。日本地域格差がありますが、そんなに大きくないと感じました。都市と田舎も自分もベースがあります。一方、他の国も異なると思い、現地に行ってみたいと思いました。外国人として、福祉や生活の便利なところ、不便なところを感じて思ったのは、そんなに近い地域でも、文化や生活が違う事が分かったので、ヨーロッパなどの国は歴史は中国、日本より短くが、近代発展によって、医療、教育、福祉など方面が完備し、また違う感覚だと思い、このようなところに行き、当地で生活を体験したら、政治や文化などの違いを感じられると思います。特に、留学するとき、生活の違いを感じつつ、物事の見方、考え方も多角的になると思います。実際に体験することで、視野も広げられるし、より良い自分も発見することができます。

留学できるために、この1年間に、段々大学生活に慣れて、授業のペースにも遅れないように頑張りました。自分自身できちんと考えて、ドイツ語の授業も

受けています。これから学校で留学の情報を集めて、両親と相談して、留学することをいち早く準備したいと思います。

二つ目は、自己管理能力を身に付けることです。なぜなら、大学では、自主性が大切で、学習のみならず、生活方面もきちんと管理することが必要であるからです。自主性が大切だと感じたのは、日本に来て以来2年間を振り返ると、気づいてないうちに、間違ったことがたくさんあったからです。例えば、スケジュールを書いていなくて、大学の面接の日も忘れてしまいました。一人暮らしなので、夜遅くまでドラマをみて、授業に遅刻してしまいました。大学に入る前から、自己管理できるようになりたいと思っています。特に、大学に入ると、単に時間を守るだけではなく、高校より倍長い授業で、どれだけ授業の内容を理解できるのか、どれだけ効率よく動けるか、自分自身がそれを意識して、自主的にしないとイケないです。私は留学生として、しっかり勉強して専門用語の意味を理解するとともに、知識も把握できるようになりたいです。

また、生活習慣も自己管理に関わっているので、食生活や適度な運動を良くして、体調のバランスをよくしたいと思います。健康と体調も維持すれば、学習するもよくなると思います。そして、目標をもつことも大切です。適切な目標を作れば、自分のモチベーションが維持できる上に、達成感も得られるし、それを積み重ねれば、学習意欲も上がると思います。今学期はドイツ語の授業を取っていますが、初めての時から目先の小さな目標を設定して、毎日勉強した内容を復習し、このように段々進めていくと、毎日そんなに疲れないし、期末の時良い成績がとれると思います。

三つ目は、読書することです。大学入学してまもなく一年間となり、知識足りないが凄く感じて、真剣に考えているのことは徐々に本を読むべきだと思いました。春学期で、以前勉強したこと、政治、経済、歴史なども試験のかけでまだ覚えていました。秋学期になると、日本経済論という授業で基礎の経済知識も思い出なくて、驚いて、そこまでもないと自己満足しすぎでした。子供の頃、お父さんある言葉「読書は人間の進歩の段階である」を教えてくださいました。あの時、自分で本を買って、一人が部屋で読んでいて、寝る前にも時間かけてしっかりと読んでいました。今は、必要がある時読んでいます。

読書で、まず自分の視野を広げられ、前に思い出せない知識も復習でき、今まで知らない知識も得られます。そして、読書で、自分自身しか考えがありません

す。ロボットの発展できる、人間の職位が奪われて、最後には、日本語と中国語の本を読むことができ、こうすると、選択範囲が広がっていきます。読書すること多角的な視点から見ることができます。自分自身にも役に立つと思います。

この夏休み中「ロボットの脅威 人の仕事なくなる日」(著者はマーティン・フォード 出版社は日本経済新聞種版車出版社であります。) という本を読みました。最近中国で大学生が卒業後にすぐ失業になり、何百万人はお金がもらえなくなり、こうすると、所得格差がかなり大きくなりました。AIも人たちに目に入った、これが問題の一つなのかなあとって、この本を読みました。

この本はまず人の仕事を代わりに機械がやるようになり、特に人工知能やロボットの発展によって、製造業の機械、農業はロボットを使いはじめ、雇用が根本的に失われ、格差が大きくなり、経済方面は消費者が減るほど、社会全体に影響を与えた。

そして、著者は、データの方面から分析し、どこまでテクノロジーが人の仕事が奪っているのを示しています。例えば、情報テクノロジー、ホワイトカラー、教育、医療、自動運転車などを、詳しく説明しています。

最後は、人工知能やロボットが普及すると、発展中の国家や先進国の未来の発展がどうなるか、経済や人の仕事がどうなるか、政策がどうなるかを示しました。

私が最も印象に残ったのは、「中国などの途上国経済における個人需要」であります。なぜなら、今中国、インドやベトナムの工場はすでに、ロボットや自動化機械の導入を積極に進めています、一方、当地の雇用が減る上に、アメリカなどの人工費用が高い国の抵抗デモも進行しています。特に、私は中国人として感じたのは、昔一人っ子政策のおかげで、高速人口増長が止まりました。しかし、今も高齢化人口が急激に増え、年金や医療の方面も問題となり、公務員などの職は退職年齢も伸びて、卒業した人は就職難しくなり、工場などの職場も職位が減りました。こうすると、ロボットの発展もさらに重視しつつ、職位が奪うのが事実であります。

著者によると、このような途上国ロボットの普及により仕事がなくなり、富裕層と中産階級間に、所得格差が広がって、消費は更に低迷し経済成長が止ま

るということに警鐘を鳴らした、中産階級、資本家階級が需要を維持しなければ、経済発展の条件や貧富の格差の問題も大きくなるだろうと書いてました。私はこの本を読んで思ったのは、過去現在未来に経済は、政府または社会貢献機関、ボランティアなどを、社会全体に詳しく理解して、分析して政策をつくっています。また、社会主義国家である中国、資本主義国家であるアメリカ、インドなども現地に観察しないと、政策を作ることができません。つまり、AI時代で、違う国に対し、違う政策が必要であります。

AI時代進みとともに、発展中の国家は色々な問題があり、しかし、貧しい人たちが貧困から脱出することが必要となり、所得格差を小さくするが必要であります。私は大学で国際協力に関する内容を学びだけではなく、時代を変化するとともに、勉強したいと思っています。

本から得たものを考えて、自分が大学でしたいことはつきりとなっています。自分自身が納得できる自分を作り、東南アジアように発展する地域を固体な知識から文化の違いに至るまでを見て、実際の問題を見つかり、考えるようになりたいと思います。また、欧米に留学ことから、考え方の違いをわかり、物事に対する意識していきたいです。この4年間で、後悔しないようになりたいです。

この一学年を通して、授業の内容をわかるようになって、自分自身の足りない部分も意識し、自分のペースで改善してきました。特に春学期の定期試験の時、怠らずに勉強してしていました。毎日食生活を大切にして、週末によく友達と遊びに行ってきました。秋学期にも学校のイベントに参加しました、今後も生き甲斐がある生活を過ごしたいです。

私にとって、大学は自分が興味のあることに関して勉強できるところで、またその関心を持っている人たちが集まり、先生たちの指導に従って、専門知識を勉強し、意見交換するところです。ここで学習だけではなく、サークル活動やボランティア活動などを積極的に参加して、各国の学生と仲良くなり、コミュニティを広げられことも期待しています。夏休みや冬休みに、世界の色々なとことに旅行したいと思います。学校で知識勉強しながら、休みの間に経験を重ねて、アルバイトも時間があればやって、色々な仕事を体験したいです。大学で4年間充実した時間をすごしたいと思っています。

日本語授業の感想についてです。

一年間通して、日本語の能力(文書と会話力)は確かに伸びています。特に、授業中お互いにレポートに関する評価することで、相手が質問する、答えることで、日本語能力がだんだん伸びました。しかし、最後レポートは一学期でお互いに読むので、何回もプリントアウトして、もったいないと思いました。また、何度も書き加えたり、やり直したり、文章はあまりにもバラバラに見えます。レポートの練習として、一気に書き込んだ方がいいかなあと思いました。

新たな私

王澤琰

大学は四年あるが、時間は花火のようにパッと去って行く。私はこの四年間の時間をちゃんと利用して、建築学や統計学などの今まで知らなかった新しい知識と体験したことのない友達との旅行やスキーなどを体験したいと思う。留学というのは新たな自分を見つけて、自分をもっと上に上げるということだ。私はできる限りの時間の中で、学生として後悔することのないように学生時代を過ごしたいと思う。人生の正しい選択をして、楽しい思い出を残すため、私は新しい自分を見つけた。

私は建築士になりたい。きっかけになったのは中国にいた頃は時間の流れにつれて、近所たちがどんどん家をリフォームしたり一軒家を建てたりすることがあった。私はそういうのを見て、どうしたら今までの中国式建築と違った「モダニズム建築」¹のような建物が建てられるのか思わず考えていた。その時からだんだん興味を持ち始めた。ネットで調べると、新しい世界に入ったように、見たことのない建物や室内装飾がいっぱい出てきた。それからはずっと興味津々だったが、建築士になりたいと思わなかった。決めたのは日本に来て、ずっと日本人から将来何を勉強したいとか何になりたいとかいっぱい質問されて、成人にも近いし、ちゃんとした目標を見つけて、自分を動かさないとダメ人間になると思って、興味がある建築に決めた。

夢を実現するには三つの目標がある。一つ目はいろいろな友達を作りたいと思う。日本人だけではなく、違う国の留学生たちとも仲良くなりたい。理由としては内気な性格を変えたいとずっと思っていたからだ。私は人に声をかける時とか返事をする時、顔と耳が赤くなって非常に臆病というか恥ずかしくなってしまうのがその一つで、もう一つは中国と違う文化習慣を知ることができる。教科書で学ぶよりコミュニケーションのほうがもっと記憶に残ると思う。自分が今まで知らなかったことや思い違ったことなどが分かってくる、視野が広がると思うからだ。視野を広げれば、普段の生活が変わらなくても、生活に対する考え方や過ごし方なども豊かに変わってくるでしょう。生活というのは建築のミュージックだと思う。

二つ目は二年生の建築プログラムを取りたいと思う。そのため、今学期は設計製図演習の授業を取り、スケッチを勉強し始めている。授業外でも時間をかけていっぱい練習したいと思っている。建築士になるにはスケッチは不可欠である。授業で初めてほかの学生の

¹ モダニズム建築：モダニズム建築または近代建築は、機能的、合理的な造形理念に基づく建築である。



絵を見て建築に対する熱情を感じ、自分は建築士への道がどれだけ遠いかがわかった。自分に向いているかどうか躊躇っている一方、続けたいという思いも強くある。また、暇な日に安藤忠雄さんが神戸と大阪で建てられた建物を見に行きたいと思う。プロの安藤さんが建てた建物はどういうインパクトを与えてくれるのかとても楽しみだ。安藤さんを知ったきっかけは前のバイト先の近くにいる中国語の先生が私が建築に興味があるということを知り、私に安藤さんが建てた建物に関する本を貸してくれたことだ。安藤さんが独自に学び、そして今世界中で知られた建築士になったことにすごく感心した。独自に勉強するのみならず、その上世間の人々を驚かせるような建物をいっぱい建てて、建築界では神のような存在そのものだと思った。この方の存在は私の建築道を進む原動力である。

三つ目は個人の趣味として運動と宝塚歌劇団を観劇に行くことだ。普段あまり運動してないため、免疫力が下がっている。建築を学ぶには何もかも時間がかかる。スケッチだけではなく、もし建築プログラムを取れたら、模型を作ったり、製図を作ったりするのも時間だ。学校に泊まったり夜更かしをしたりするのも珍しくない。普段でも建築のためにも丈夫な体を持たないといけない。健康は何より大事なことだ。そして宝塚歌劇は自分のリラックスタイムとして自分へのご褒美だ。宝塚を知ったきっかけは高校の時偶然天海祐希さんがトップだった時代の画像を見て、男役の凛々しさと女役の美しさに私は引かれ、舞台の上で真剣に物語を演じていた姿とその歌声に衝撃を受け、鳥肌も立った。タカラジェンヌたちが輝いている姿が私の憧れになり、私も彼女たちのように自分を輝かせたいと思った。その後はずっと天海祐希さんの作品を探して見ていた。宝塚を接触しているうちに、建築にも繋がりがああることに気づいた。宝塚歌劇はいろいろな物語をミュージカルの形で演出する。物語の時代感を感じるのは主に衣装と背景から花瓶やグラスなどの細かいところとタカラジェンヌたちの仕草だ。観客もまるでその場に身をおいているような感じになる。そういうところも建築に役に立つと思う。学生なのでいろいろなところに見学に行くには限りがあるが、しかし宝塚歌劇はドラマや資料と違って、感じられる場だ。一番イメージを与える外壁は見えないが、細かいところと内面的なものから感じられる。建物は外壁という殻だけではなく、中身も重要だ。宝塚歌劇は私にとってただの趣味だけではなく、いろいろな国の特徴と文化習慣と歴史を知ることができるいい場所で、一石二鳥ということだろう。

しかし、多様な文化がある歌劇だけでも、間接的な接触であり、やはり何と言っても本などで基礎からベテランまでの知識を直接得られるのが一番で、着実である。初心者なので、知識や視野など全然足りていないため、自分を補充しつつ、一步でも近づけるように、『「建築学」の教科書』という本を夏休みの間に読んだ。

この本のコンセプトは「建築」に興味を持った人やこれから学ぶ人に「建築」がどんなものなのかをいろいろな視点から見せるという本だ。「教科書」とは言うものの、普段見ている教科書みたいに試験問題を解く教科書ではない。建築に関わる14名の専門家が様々な視点で「建築」について語っている。正解が一つしかないというものが建築ではないということを知ってもらうための教科書だ。本の最初に安藤忠雄さんが言っていた。

建築とは、ある計画概念のもと、さまざまな段階で、全体と部分とのあいだで応答を繰り返し、一つ一つ決定を与えていく作業だと私は考えている。そのとき、まず当初のコンセプトを最後まで貫くのが、難しい。諸条件を整理していくなかで概念との矛盾、曖昧さが、必ずどこかに現れてしまう。

—安藤忠雄 (21 ページ)

巨匠だからといって適当に設計することができるわけではなく、建築を独学して学校で勉強してこなかったのが、共に学ぶ仲間というものがないため、常に一人で考えることが多かった安藤忠雄さん。そして最初にコンセプトを決めても、それを貫いていくとともに必ずしも最初と一貫しているとは限らないことがわかる。その過程の中で出てくる難問に迷い、錯誤を繰り返して限界まで考え抜いて、回答を見つけ出すことができるかもしれない。

建築学を学ぶということは、著名な建築になって、奇妙奇天烈な建築をわれわれの住む生活環境のなかにつくり出し、華やかに脚光を浴びながら、芸術家を気取ることをめざすことではない。われわれの日々生活している環境がどうあるべきか、そのために何を考えるべきか、何をすべきか、なさざるべきか、深く思索する能力を身につけ、そして実践に移す。これこそが建築学を学ぶ基本的な目的にほかならない。

—山岸常人 (226 ページ)

山岸常人さんは建築学を学ぶには既成概念や定まった理論・定説を疑うことはすべての学問で必要な態度だと思われる。疑いを有効にするためには、確かな根拠が必要になる。論拠がないとただの仮説にすぎないし他人や社会を説得できない。確実に有効な論拠を持つには他人の評論や社会の風潮に流されないことと現実の社会、建築、都市を観察し、深く理解する姿勢がかかせない

この本の中の二つを取り上げてみたが、一番印象に残ったのは安藤忠雄さんの文章に書いた「正解は一つだけじゃなく、考えるたびに新しいものが生み出されてくる」という解説だ。私はこの世のすべてがこれに当てはまると思う。生きている限りいつも新しいものや人と出会っている。いろいろな影響を与えてくれて、新しいものや自分が作り出せる。それがいい方向に向かうか悪い方向に向かうかはすべて本人次第だ。しかし、悪い方向だとしても間違いとは言えない。他人から見れば正解ではないが、もしかしたら誰かにとって、それは一番の正解かもしれない。

最後に、この本を通して最も感じたことは三つある。

- 建築は一つのもので考えるものではなく、環境や社会的つながりなども考慮したうえで考えるべきもの。
- 芸術的観点だけではなく「用・強・美」三つを評価する必要がある。
- 作り出すだけではなく、「直す」という観点を必要とすること

私は建築プログラムを取って、生活の中に出会ったいろいろな国の人と接触して、そしてコミュニケーションをして自分の視野を広げたうえで、得たものを活用していきたいと思う。また、感じたことや思いついたことなどを自分のものにし、そして、自分の目で見えた有名な実物建築、もしくは心を響かせる偶然見つけた建築やまた宝塚の観劇で間接的得たものなどを「用・強・美」三つの評価を加えた上で、参考として自分にふさわしい自分の建築を見つけたいと思う。そして、いつか資格を取って最初から最後まで自分の手で自分の図を設計して、自分にも驚かせる第一番目の建物を建てたいという理想を必ず実現させたい。

だから、大学にいる僅か四年の時間をしっかり利用して無駄せず、授業で学んだ知識や

授業で学べない先生や先輩からのアドバイス、経験を頭に入れてそして生かして、建築士を目指す新たな自分の背中を押して、これからも人生で戦い続ける最大な敵——「怠惰な私」を倒すためにも、今までの欠点またこれから気づく不足な点を改善することと長所を伸ばすことを日々の習慣にして、最善、最高な自分を作ろうと思う。もちろん自分が目指す目標そして初心を忘れず頑張り続けることを心に銘じる。

この一年間この授業を受けて、文章の書き方が主になっていて、文章の構成やきっかけが大事ということがすごく分かった。また、クラス内また交流授業でもらった意見がすごく有意義だった。文章は自分で書いて納得できるものではなく、読み手を考えながら書くのがとても重要であることがわかった。そして、他人の文章を読むことで、文章のいいところを参考として、自分の文章をよりよくすることもできる。その上、書き手がどんな人かがわかってくる。入学ばかりだった私たちが仲良くなったきっかけでもあった。最後、先生が丁寧に読んでくれて、修正してくれたことで私たちは不足な点がまだまだたくさんあることを気づいてくれる。いい文章を書く大事な一点でもあり、この授業で得たものをしっかり覚えて、活用していきたいと思う。

引用文献

安藤忠雄等.(2008). 彰国社.

コミュニケーション能力を身につけよう

カンセラピナ

私はカンセラピナです。私は大学生活をしながらコミュニケーション能力を身に付けたいです。なので、まず、多くの人たちと付き合いたいです。私は留学を決めたときから、たくさん日本人の友達と付き合いたいと思っていました。なので、この大学生活をきっかけにサークルやボランティアなど、他の人との交流があるいろいろな活動を通して、大学にいる日本人の友達だけでなく、様々な国の留学生とも友達になって、私が目指している目標を達成したいと思います。今はまだ日本語が上達していませんが、日本人の友達と話し合ったり、日本語資格の勉強をもう一度やりながら、日本人と会話するときに聞き取れないことがないくらい、日本語の実力を上げていきたいと思います。

コミュニケーション能力を身に付けるために、日本語の勉強はもちろん、外国語の勉強もやっていきたいです。日本語の勉強を始める前には、言語ということは身に付けることが難しい勉強だと思っていまらなかったのですが、日本語の勉強をすればするほど、どんどんいろいろな言語も学びたくなりました。だいたい人は、英語の勉強が一番やりたいと思うかもしれませんが、私は中国語やドイツ語の勉強が一番やりたいです。私が中国語の勉強がやりたいと思った理由は、最近英語とともに中国語の資格を求める会社が多くなったからです。そして、この大学に入学してから中国人の友達もできましたので、もっと中国語の勉強がやりたくなりました。また、ドイツ語の勉強は私の親戚がオーストリアに住んでいますので、幼いときから興味を持っていました。また、ヨーロッパの中でいずれかの国の言語が学びたいと思いましたので、その中で、幼い時から、聞きながら育てた国の言語を選びました。なので、日本語が上達してから、ドイツ語の勉強もやってみたいです。英語の勉強もやらなければならないと思いますが、英語はみんなが上達したいと思う言語ですが、私は英語より他の言語にもっと挑戦してみたいと思いました。日本語以外、ほかの言語も話せるようになったら、言語勉強に自信を持てるようになると思います。また、翻訳機なしで自分の言葉で会話が出来たら私の感情を直接に伝えるようになるので私が目指しているコミュニケーション能力の上達ができるようになると思います。なので、これから、時間の余裕があるときに少しずつ中国語やドイツ語の勉強をやっていきたいです。

私は、日本に留学していますが、日本のことに限らず、日本にいる他の国の外国人から、その国の言語を教えてもらったり、文化を感じたりしていきたいと思っています。このように文化や言語を教えてもらいながら、様々な国の人とコミュニケーションをしたいです。

そして、バイトや会社のインターンシップなど、いろいろな活動を通して、広い視野を持って、様々な経験を積み重ねていきたいです。私は、大学生活の

中で勉強はもちろん、人間関係をだんだん広げていきたいです。私が人間関係を重要だと思う理由は、社会生活など、家族や知り合い以外の人たちに会う機会が非常に多いと思いますので、そのときお互いに助け合えることができると思うからです。

また、大学生活の中で、総合政策という私の専攻の勉強もちゃんとしていながら、福祉や心理学の勉強もやっていきたいと思っています。前から、福祉の勉強をやっていきたいと思っていましたが、その理由は幼い頃から祖父母と多い時間を過ごしたもので、お年寄りと触り合う機会が多かったです。そのため、自然に老人問題に関して考えるようになりました。そして、老人問題だけではなく、障害者に対する福祉勉強もやっていきたいと思いました。私の祖父母が障害者なので、祖父母がもっと楽な生活をしてほしいと思いましたので、障害者の福祉にも関心を持つようになりました。なので、この勉強のため都市政策学科に進学したいです。また、心理学の勉強をしたと思った理由は、最初には知り合いが心理学の勉強をやっていることを見て面白そうだと思いました。私がコミュニケーションを重要視するので、心理学の勉強したら、もっと多くの人々のタイプに対して対応することができるようになると思います。なので、全ての状況に対応することは無理かもしれませんが、だいたいの場合には対応が可能になると思います。心理学と老人問題とは関係がないと思うかもしれませんが、私は人に関する問題は、援助が必要な人の気持ちや考えをしっかりと理解することが重要だと思いますので、心理学の勉強も一緒にすればもっといい結果を出せると思います。

また、私がやりたいと思うことは、三田キャンパスだけではなく、上ヶ原キャンパスにも行って、いろいろな授業や活動をやることです。受けた授業は先に話したように、福祉と心理学の勉強です。三田キャンパスにも福祉と心理学の授業はありますが、わざわざ上ヶ原キャンパスに行きたいと思った理由は、三田キャンパスの授業しか受けていないと、多くの人と付き合うことが難しいと思ったからです。私は、三田キャンパスの人だけではなく、ほかのキャンパスの人とも友達になっていろいろな試験や人間関係などに関する情報を共有したいと思っています。もちろん、三田キャンパスですべて勉強しても役に立つ試験などに情報などはけっこうあると思いますが、私はコミュニケーション能力を上達させていきたいからです。また、私が将来にどんな仕事をするようになるかもまだわからないので、できる限り様々な情報を得て、いい方向に進んでいきたいです。また、上ヶ原キャンパスには福祉と心理学の学部や学科があるので、授業が三田キャンパスより多いと思うから上ヶ原キャンパスの授業がとりたいたいです。授業が多いと、シラバスを見たり、知り合いの話などを聞いて自分に合う授業を探すことができると思います。

私が夏休みに読みたいと思った本は「コミュニケーション力」、「脳が求める外国語勉強法」、「心理学ってどんなもの」この3冊でした。この中で私が選んだ本は、岩波新書で出版された斎藤孝の「コミュニケーション力」という本です。私が3冊の中でこの本を選んだ理由は一番やりたいことがコミュニケーシ

ョン能力の上達することだからです。この本の中には、初めに、コミュニケーションの定義などについて書いてあります。そしてコミュニケーションを4つの種類に分けて説明していますし、その4つの種類がどんな関係に適当なのかに関しても書いてありました。文脈力についても詳しく書いてあります。そして、著者は、会話するときにメモを取りながら、会話をしてほしいと書きました。どのようにメモをとれば、効率的なのかについても述べています。そして、マッピング・コミュニケーションという全く知らなかったコミュニケーション方法を紹介しています。また、当たり前なことかもしれないけれど、家族間のコミュニケーションの重要さも強調しています。そして、コミュニケーションの基本原則の4つである「目を見る、微笑む、頷く、相槌を打つ」についても書いてあります。また、外国語学習に関しても書いてあります。コミュニケーションとは思ってなかった沈黙に関しても書いてありました。また、要約力と再生方式のことも書いてあります。著者は、コミュニケーション力の重要な枝として、言い換え方もあると述べています。同じ話や言葉でも、自分の言葉に言い換えるということです。自分の言葉に言い換えると自分の感情などがほかの言い方より伝えやすいと思います。

この本を読みながら、新しい単語や定義をわかるようになりましたが、印象に残ったことは、沈黙もコミュニケーションの一つだということでした。沈黙もコミュニケーションの中の一つであることはこの本を読んでからわかりました。今までは、コミュニケーションといえば、言い続けることだと思いました。なので、私が今までコミュニケーションをやるために、なんでも言わなきゃと思っていたのですが、この本を読んで会話をする中に沈黙があることも必要だと感じられました。なので、これから、無駄な話を言い続けて会話の中で問題が起こらないようにしていきたいと思いました。また、マッピング・コミュニケーションということも印象に残っています。この本を読む前には全然知らなかった言葉でした。マッピング・コミュニケーションという言葉は、例として二人で会話するときに二人の間に一枚紙を置いて話していることを書き込みながら会話をするということです。このコミュニケーション方法は私にとって斬新な会話方法だったので印象に残りました。今回は、コミュニケーションに関した本を読みましたが、今度は、今回と違う主題の本も読んでみたいです。夏休みの前に選んだ残り2冊の本をはじめとして様々な本を読みたいです。本を読むことは私にとって少しつらいことですが、知識やいろいろな情報を得ることもできるし、日本語の実力も上達できるのでこれから暇なときに少しずつ読んでいきたいです。

一年間この日本語の授業を取りながら、様々なことを感じました。一人でやったら全然思いつかないことも話し合いながら思いつきました。そして、様々な人の意見を聞くことができ自分の考え方にも影響を及ぼしました。韓国人だけでなく、ほかの国の人たちの考えなども聞く機会が多かったので私にとって役に立つ一年になったと思います。また、この授業を通して私が目指しているコミュニケーション能力を身に付けることが少しずつできるようになってい

ると思います。また、二年生になって同じ学科にいけなくなっても今のクラスの友達といい関係を続けていきたいです。また、三年生まで日本語の授業がありますので、その時、授業に充実しながら私のコミュニケーション能力をだんだん上達させていきたいです。

人生の楽しみは体験や発見にある

饒哲銘

私は中国江西省から来た饒哲銘と申します。大学の四年間で自分がしたいことをしてながら面白い人になりたいです。

人生は一度だから自分が思うように生きたいです。

大学の四年間、まず自分がどんな人になりたいのかはっきり考えていきたいです。

誰でも青春の時迷うことがあるはずです。大学で何かやりたいの前に、わたしは自分がどのような人になりたいのかを明確に考え、計画を立てて、そして目標を実現するために努力していきたいです。

私はこれから科学者になることはできないし、医者にもなりません。面白い人になりたいと思っています。一人一人が面白い定義によって違いが、わたしも面白い人の定義に対して同じように広く定義されています。

今の私にとって面白い人はきっとプラスエネルギーに満ちていて、周りの人にプラスエネルギーに感染させられ、この人と接触するのが楽しいと思う人です。

また、生活に情熱を満ちし、物事に対して大きな好奇心を抱いて、試してみたいと思って人です。この好奇心は必ずしも大きいとは限らない、例えば新しいレストランに入って、食べたことがない料理を食べること、やったことない運動項目をやってみることや行ったことのない町や国へ旅行に行ってみることなど。このような人と触れ合うと世界が大きく感じられるので、いろいろ珍しいことをしてみたいになります。その次に、面白い人は生活に対して楽観的で、自分に自信を持っている、楽しみを存分に楽しむ、失敗に落ち込まないや人に対して包容力がある人です。そして、面白い人は決して無知な人ではないと思います。知識が豊富で、見たことが多い、知っていることが多い人です。最後は夢があって、生活には常に新しい追求があって、自分の趣味を持っていて、自分自身に楽しみを与えることができる人です。

この前に、偶然ネットでスケッチの生放送を見ました、すごいだと思って、もし自分が絵を描くことできたら、偶然美しい景色または人を会った時に写真より、スケッチするなら記憶に残りやすいじゃないですか。このような気持ちに私はスケッチの勉強が始まりました。これらの趣味はマイナスの感情を脱する良者であり、自分の自己投資の一部でもあるだと思います。これらは自分が面白い人になるの一步だと思います。

入学の一ヶ月前、私はもうすぐ大学に入り、大学生になると、自分が何かを変えたいだと思って、何かは今できることを考えると、ダイエットを思いつかない。大学合格したから、突然目標がなくなり、むちゃくちゃな生活が始まり、体の調子がわるくなるし、太っていきまただから、ダイエットを始めました。今でも、トレーニングジムに通うことを続けてしました。ダイエットをすることで体重が減り良い体を得るだけでなく、運動の習慣をつける事と健康な食生活も身につけました。ダイエットを成功することはたぶん私初めて一つのことを長く続けて、そして成功しましたことです。自分がもともと根気ある人だと発見しました。毎回体重計に立て、どんどん減っていく数字を見るとの楽しい気持ちと達成感を忘れません。この一つのことを長く続けて、そして成功しましたの達成感 fascinatin 魅惑的なの感じに好きになりました。これからも、あることを成し遂げたことによって得られる満足感を探してい

きたいです。また、ただの痩せることは今の私にとっては挑戦にならないので、もと挑戦になることを挑戦したいですので、これまで筋肉トレーニングの計画を立てました。

また、大学の4年間は知識を得る良い時間だと思います。この4年間で自分の知識を増やす、視野を広げ、充実な大学生活を送りたいです。充実な大学生活を送るために、良い成績が必要です。各科目に合格して、卒業必要の単位を取るが今私の目標です。良いGPAが私の将来にとって大切だと思います。今はまた大学を卒業した後何をするか決めていません。日本で就職するか、日本の大学院に進学するか、外国の大学院に進学するか、中国に帰るか。どんな道でも私の将来に大きな変化をするから、慎重に考えべきだと思います。

この4年間で自分が生活に対して楽観的に情熱を満ちし、物事に対して大きな好奇心を抱いて、自信や幅広い知識を持って、夢がある面白い人になるために努力するつもりです。

書評

この夏休みの間は私は「メディア不信」という本をじっくり読みました。本書の著者は林 香里 (はやし かおり)、林 香里さんは情報学者であり、東京大学大学院の情報学環教授や東京大学新聞社の理事長でもあります。GCN (Gender and Communication Network)の代表として、世界の新聞・メディアの分野で研究をしています。

私はこの本を選んだ理由は身近く出版社で務めている人の口から「出版社の業績がどんどん不振になる、ある新聞社は倒産に近く」などの話が聞きましたので、この話が私の好奇心が突き動かされた。なんで最近の伝統的なマイメディア産業が衰退になってという質問があるので、この本を選んだ。

本書は、ドイツ、イギリス、米国、日本のメディア不信の現況を報告しつつ、各国に共通して、商業主義の主流化、及び、ポピュリズムの台頭がみられると指摘し、前者の商業主義の主流化は、特に米国・イギリスで市民のメディアに対する信頼を損なっており、後者のポピュリズムの台頭は、その背景にこれまでマスメディアが奉じてきた「リベラル民主主義」への反発があり、「リベラルな民主主義」は偽善ないし独善であるとの見方が、書名にもある「メディア不信」につながっていると論じています。本を読んだ後自分でも世界中“メディア不信”のことを調べました。

去年、読売新聞が加計学園の問題で驚くような記事を掲載して、いかにも「マスゴミ」らしい仕事をしたのは記憶に新しいです。文部科学省の前事務次官、前川喜平氏が「出会い系バー」に通っていたという、あの記事でありました。

霞が関界隈の記者に話を聞くと、読売新聞記者でも直前までこの記事の掲載を知らなかった者が多かったようで、しかも地方版のすべてで記事が統一されていたことから、政権につながる「上層部」からの指示だったのだろうとのことでした。事実なら、読売が日本の「マスゴミ」全体のイメージに与えた悪影響は小さくないです。公益財団法人の新聞通信調査会が行なった調査によると、2016年、新聞を全般的に見て満足であると答えているのは全体の51.8%。前年から2.1ポイント減少した。メディアの誤りや偏向などが議論され、メディアのイメージが悪くなりつつある背景には、間違いなくインターネットの存在があります。日本だけではなく、実は海外でも、メディアの信頼性は落ちていました。英国もメディアの信頼度低下が報告されています。英調査会社YouGovが行なった、英国で一番真実を語っていると思うメディアはどれか、との調査に衝撃的な結果が出ていました。なんと、1位になったのは「Wikipediaの

執筆者たち」で、回答者の64%がWikipediaを挙げたのです。英国人は既存メディアよりも、ネット上にある“百科事典”を信頼していることになる。2位に入ったのは「(英公共放送の)BBCの記者」で、回答者の61%が真実を語っているだろうと答えた。英ガーディアン紙などの一般紙の記者に対しては、45%が信じられると答えていました。また英国の別の調査によると、メディアを信頼できるとした英国人は24%で、2016年の36%から大きく下落しました。英国の場合、2016年のブレグジット(EU離脱)の国民投票で、メディアの事前予測に反して離脱が決定したり、同年にほとんどのメディアの予想に反してトランプ大統領が誕生したことなどが、メディア不信につながっていると見られています。

ネットの普及は、世界的にメディアの信用低下を助長しているようだ。また米国や英国の調査によると、メディアに不信感をもっているのは、特に若い世代が多いです。というのも、若い世代はネットを年配者よりも活用している傾向にあるからです。ネットをより使うことで、既存メディアだけに依存しなくなり、幅広い情報にアクセスでき、自分たちでそれを取捨選択できます。

私が関心あるキーワードは“ネット”、“新聞の信頼度がネットよりも低い”“若い世代が多い”です。データを見ると、伝統的なマスメディアが衰退して、新たなマスメディアが興隆になっています。(新たなメディアは、コンピュータやネットワークなどの新しい科学技術を利用し、伝統的なメディアの形式、内容、タイプによって生じる質的な変化を起こす。)私はこれからの新たなメディア発展の波に乗って、将来は新メディアに関するの仕事するのはいい選択だと考えています。

多くの方は、大学生は目標を明確にして、自分が何が欲しいかを知っておくべきと仰っています。でも、自分にとってこれは間違いだと思いますと言いたいです。自分が何が欲しいのかを知っていてもいいですが、しかし、本当に多くの人が若い頃に、自分のこれからの人生の目標を決めているのでしょうか？

大学生活もまもなく1年を過ぎています。この間の時間に、自分が色々なことをやりました。例えば、宝塚の歌劇を見に行く、筋トレの始まり、四川に旅行を行った、画像処理のソフトウェアの勉強を始まりなど色々なことをやりました。今の私は何でもやってみたいです。自分は何が欲しいのか知っていますか。私は知りません。しかし、これらの知識または経験は最後に本当に役に立ちますか？役に立ちだと思いません。

目の前の生活に満足する選べる時、生活に対する体験も制限されています。他人から” どうやって大学生活を過ごしたいですか？”と聞かれる時、答えは大学のうちに、色々なことを体験や発見をしながら過ごしてみたいです。

“人生は旅だ。何度も輪廻転生して、やっと旅立ちすることができた。だけど、この旅はいかにも短い。だから、恐れずに行動してみるといい。勇気を持って誰かを愛し、山頂に登り、夢を叶えてみるといい……”

—「大魚・海棠」

この一年間の日本語の授業を通して、日本語能力が高めることだけでなく、様々な人とのコミュニケーションが体験しました。この授業のおかげで、ほかの国から来た留学生と友達になって、いい思い出がいっぱいありました。

授業中、色々な共同作業を通して、中国人だけではなく、ほかの国の人の考え方を知り、異文化理解することには私にとってこの日本語授業の中で一番重要な収穫だと

思います。

大学生のうちにやりたいこと

包旨名

中国からの留学生だ。今の関学に入学してこれから大学の四年間は自分の輝く大切な時間だと考える。そして、前の二年間の日本語学校と違って、大学での勉強の知識はもっと専門的な新しい旅だと考える。機会は一回しかないから大学の時間を無駄に遣わないように、だからできれば多くの本を読みたい。

実は自分は本を読むことが好きな人だと思う。なぜならばそれは高校時代の時、毎週水曜日に行っていた読書会のおかげだ。高校時代の学業の負担が重くてその読書会は私にとってリラックスの時間だった。読書会では小説から新聞記事まで様々な本を読んでいて、特にアメリカの市民の哀歓を描き出した小説家オー・ヘンリーの小説は一番印象に残った。オー・ヘンリーの作品風格は確実の社会問題を風刺し、しかもユーモアがある。笑いながら社会の不平等について思考させる。忙しい高校時代にテキストより社会観に影響を与えてくれた作者だと思う。中国の大学に入学して、高校より自由な時間が増えてきた。その時PCゲームが好きになって、特にヨーロッパの歴史と関連あるゲームをよくやっていた。歴史が分かるように時間がある時大学の図書館で読書に没頭した。ヨーロッパの歴史を始めとして、神話とか小説などの本を読んだ。確かに、周りは学部と関連ある本とか将来のために「成功学」に関連ある本を読んでいる人がばかりだった。それと比べて自分はただ無用な本を読んでばかりの怪人たっただろう。実は試験の前に試験に対応するため本を読んで試験が終わったらどこか捨てるか将来億万長者になりたいため成功士の聖言を拝読する人が少なくない。正しいかどうかといわず、読書の意義はなんだろう。私にとってはやはり興味が原動力だと考える。今まで読んだ本のおかげで本から知らない歴史の変遷とか、歴史事件の意義とか社会観などのことが分かってきた。大多数の本はいいか悪いか見分けがつかない。人にとって相応しい本がある。皆がこの本を読んでるから自分も読むより、その人にとって相応しい本を探すのが大切だと考える。これは高校の読書会から分かってきたことだ。

現在日本に来た三年目である。アルバイトをしているから中国の大学のように毎日十分な時間で好きな本を読むことができない。だから、本だけじゃなくてその代わりにスマホでドキュメンタリーとか映画とかニュースを見る。リラックスは一方で世界の様々な国の文化を知る。特にFacebook、twitterを使って外国に行かなくても世界のトピックニュースがすぐ分かる。そして他の国の人と友達を作ることが可能になって、以前知らなかった国の文化とか風習を知るようになった。日本に来る前に出国したことがなかったのはもちろん、中国に実家から遠い場所さえ行ったことがない、だから本とかドキュメンタリーなどのおかげで二年前の自分と比べて自分の視野は前より広がったと思う。

それから社会の貧富の格差、スポーツ界のドーピングスキャンダルなどの社会現状を反映する本、ドキュメンタリーも自分の価値観の養成のために役に立つと思う。なぜならば文章を読む時ただの読んだままだけじゃなく、文章が反映しようとしている問題は何か、これは本当なのか、この問題を形成する原因は何か、同じ問題は二度を起ささないようにする防止対策は何か…本を読んだ後何も学ばないなら意味がないから思考しながら本を読むことは当たり前だと考える。それから作者は本当の話をすべきで、うそを話してはならないという信念が私にとって感動した。本を読むから独立思考、本音を言うべきという価値観は影響を与えられた。だから将来メディア関係仕事をしたいです、なぜならば社会の

良心メディアもそうだ、1904年 Alice Seeley Harris はベルギーのコンゴの植民地で撮られた座っている男性、仕事のノルマが達成できなかったことから罰として娘の足と腕を切断されて、その手足を眺めている写真は世界がコンゴの人権に注目されたことからメディアの社会問題を暴く効果を現れた。

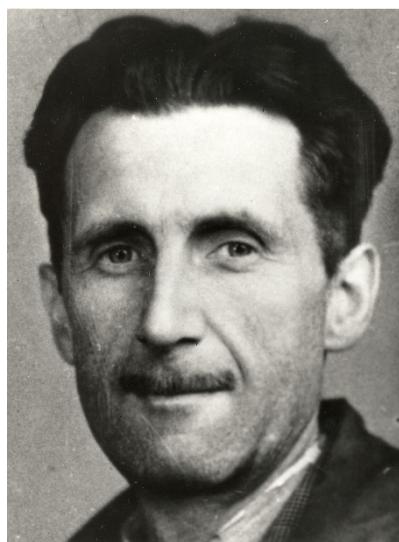


確かに取材調査から出版まで社会から様々なストレスを受けて全く安全と述べている人もいるが、本当の話を言い、社会の問題を披露し、助ける必要の人のために声を出すという正義感は私尊敬でメディアの仕事にしたいの理由だ。

今は関西学院大学に入って本を読む習慣を続けたい、それからもしできれば将来メディア情報学科に入りたいです。でも、今の自分は日本語がまだ上達していない。だから日本語のレベルは上がるように頑張るしかない。また、もしできたら同じ読書に興味がある人と友達を作って日本語を練習しながら読書の体感はお互いに分かち合える。そして、大量の本は外国語だけでまだ中国語か日本語に通訳していない本があるから。ただ日本語がわかるのは足りないと実感しました。もしこれから時間が余裕な場合は外国語を勉強したい。これからも続いて社会のニュースに関心し、多く本を読んで独立思考がある人になるようにメディア関係の仕事に役立つだと考える。

以上が大学四年間のやりたいことだ。充実した大学生活を過ごせるように頑張る。

今回は、大学生活でやりたいことを考えるために『1984年』を読んだ。なぜこの本を読んだ理由は実は『1984年』は前の大学に初読でその時は本に描いた内容の会得はまだ深くない、今は日本に住んでいる日本と中国生活のさまざまな方面の違いが感じてきて、今回は『1984年』を再読み、日本語の練習は一方で新しい感想があることだ。



先ず本の内容を紹介しよう。『1984年』の作者ジョージ・オーウェルはイギリスの左翼作家スペイン内戦の時共産党党員が粛清され、スペイン共和国軍内部分裂になることを経歴してから本を書いた。「ビッグ・ブラザーがあなたを見ている」これは今回私読んだ『1984年』の名言の一つだ。本書では、1950年代世界民衆は監視される一党独裁の全体主義国家を分割統治されている背景をもとに書いたフィクション小説だ。主人公ウィンストン・スミスは事実を歪曲する仕事に抵触し、党の方針に疑問を抱き、ジュリア・オブライエンに接近し二重思考(相反し合う二つの意見を同時に持ち、それが矛盾し合うのを承知しながら双方ともに信奉すること)の批判とオセアニアが成立前の歴史を探すなどの行為が始まり、真実が言える未

来へのために日記を記録していた。実際にオブライエンは思想警察であり最後ウィンストンが逮捕されて拷問された。ウィンストンは思想から党の追随者に改造になってビッグ・ブラザーを愛しているままで処刑されたという反全体主義国家の小説である。

『1984年』を読んでから感想がたくさんある特にメディアについての感想がある。今から自分の感想を紹介する。『1984年』を読んでそれから透明な社会を築くべきだと考えている。

a. メディアの独立性は健全な社会で不可欠のことそして政府はメディアをコントロールするデメリット

今まで自分の国に生活の経験から見れば本に描いたオセアニアの言論弾圧、愚民政策、一党独裁、秘密警察などの共通点があると考ええる。特に本に書いて言論統制と弁護士、メディアにコントロールは共感がある。元々非透明な社会で政府と民衆の力が非対称である。政府はこの国の全ての財力、権力そして発言権を持っている。もし民衆は自分の権威を政府に侵犯される時に自分の権益を擁護しにくい、マスコミとか弁護士などは政府の権威で真実の声が出てこないから公理を擁護しにくい。それに政府はメディアにコントロールなのでメディアから放送した情報は全部で検閲されている。では今こういう問題を形成した。この社会の透明性が欠如だから政府は自分に対する有利だけの情報を放送し、自分に対する不利な情報をシールドした。同じ事件に対する中国国内と海外を報道したニュース完全に違う場合もある。ネットを使用しても同じ中国はFacebook、twitterが使えないけど代替りのWeChat、QQを使用すれば、通信の情報はすべて自動的に政府の管理ところへバックアップということはマスコミに暴かれた。恐ろしいことはネットでビッグ・ブラザーがあなたは何をしているのが見える。

b. メディアの独立性がない社会で民衆に影響を及ぼすこと

『1984年』は主人公ウィンストンが「二分間憎悪」に行くという冒頭から始まる。「二分間憎悪」はオセアニアの日課として党と人民の敵に憎悪を表現する活動である。前と言った通り中国は非透明で言論統制の社会だからマスコミの独立性ない、マスコミから放送したのはすべて検閲され、切り取るリーディング・クエスチョンのニュースでしょう。こういう社会で生まれた人は欧米文明と普遍的な価値 (universal value) に偏見を満たすことは何回も感じた。一番印象に残ったことは小学校のことだ。その日、政治を教えてくれる先生はカンカンに怒っていて教室に入った。「アメリカ人または中国の人権を批判した！これは反中のことだ！」中国に住んでいる時に何回もテレビとか他人から意味の近い話を耳にしたから、だからその時先生に聴いた「アメリカ人は何を言ったの？」「知らない！必要がない！」と返事された。中国の人権問題に批判する国家にガンガンするけど、批判の内容は全然関心しない。私にとって不可解の恨みよりその批判の内容の方が重要だと思う。もしその中に道理か価値いくつがあるなら、改正して、そこまで簡単なことだと思う。歴史は現実の鏡だから、錯誤を発見すれば、同じことを繰り返さないように改正し、これは国家にとって進歩だ、大袈裟に言えばこれは文明だと考える。

元々底層の民衆は財力、権力そして発言権が弱い、幸いなのは少数人が危険を冒して、盗まれた権力を取り戻すために抗争している。だが、閉鎖と無知は偏見と恨みを生む、逆に偏見と恨みは閉鎖と無知の温床である。「二分間憎悪」の教育背景で悲しいのはこの少数人の行為は無知の民衆の不可解な恨みを起こてきて、少数人に石を投げるということだろう。だからビッグ・ブラザーがいない透明な社会を築くべきことは『1984年』を読んだ後の感想である。中国に住んでいる時に、正確の外国情報を受けられない、民主社会はどのような世界のが分からないから、自分住んでいるところと区別できない。ただ住んでいる社会は怪しいと分かる、だがところが怪しいのは分からない、ただ『1984年』の主人公たちの状況は同情の気持ちが多い。二年間の日本に生活して『1984年』を再読してこれから独立思考な人になることが確信してきた。全体主義国家に情報閉鎖は普遍の現象であるから独立思考の重要性が現れる。今の日常生活も同じです、たとえある情報を受ける時

でもよく「これは本当かどうか、合理ですか？」自分が自分に聞く。人の話の受け売りをせず、自分が情報を確認してからの見解は重要だと考える。

最後は「1984年」の話をもとめると。自由とは二足す二が四であると言える自由である。その自由が認められるならば、他の自由は全て後からついてくる。つまり、自分の言葉を言うとメディアは独立性を失う前提で中立、客観的な情報を民衆に伝えるべきだ。特にメディアに関心する私にとってメディアの独立性がある、そして言論自由があって、ビッグ・ブラザーがないことは透明な社会を築く基本的な条件だと考える。もちろん独立思考で、真実を言う嘘をつかないことは自分の人生観の一つになるべきだと考える。大学の時間まだ三年強がある、できれば多くの本を読んで今後の人生観を積極的な影響を及ぼすようにする。そしてメディアに関心する私は中国語のニュースと日本語のニュースを見て、世界トップニュースを注目し、よく思考する。それからメディア情報学科に入るために頑張る。以上は大学のうちにやりたいことだ。

一年間感想：やはり日本語のレベルはこの一年間に書いた文章を通じて上がった。今の日本語のレベルはまだ不足だけど文章を書くうちにいろいろな資料を調べて、分からない言葉をたくさん調べて分かってきた。そして本を読むおかげで夏休みの時間はちゃんと利用した。本を読んでからいろいろなことだと考えて自分の思考能力が上がった。これは自分今後の人生観に役立つだと考える。だから意義がある一年間だと思う。

昨日死んだかのように生きろ！そして永遠に生きることに学べ

ミンギョンジン

人間は誰もが持っている夢があります。その夢がどんなことであっても大切だと思えます。その夢の中には自分の願いと未来もあり、そして、その夢を向けた人生の道があります。

夢を向けて努力してきたのはまだ不十分で、全力を尽くしてなかったです。しかし、慌てずに一步一步進もうと思えます。これまでの経験が将来の夢のための土台になると思えます。しかし、今は大学生活をどのように送らなければならないか漠然としています。そして、今は大学生活をどのように立てなければならないか少しは戸惑っていますが、実現できる計画を立てて大学生活をもっとやりがいのあるように送りたいです。そのために大学4年が本当に重要だと思えます。全ての活動と経験が社会の生活に役に立つだろうし、4年後の自分にも大きな影響を及ぼすでしょう。『どうすれば少しでも多くの経験をもっと学ぶことができるか』と考え、一つ一つ丁寧に計画を立ててみました。

まず、私は、学期中は勉強に励み、良い成績を取りたいです。サークルはバトミントンのサークルに入って、多くの日本人の友達と交流し、韓国とはどのような違いがあるのかを見極めて行きたいです。また、長期休みの時は、大阪にある「テレビ番組制作会社」などでインターンシップを経験したいです。留学生の壁を超え日本人の学生とコミュニケーションを取りながら友達を作りお互いに協力する事ができるようになる事を目標にしていました。今はミリネという韓国語教室をしながら日本人学生とたくさん交流をしています。他国で学ぶだけではなく母国の言語を教えることができるとてもいい経験をしています。この秋学期には韓国の文化や伝統遊びを日本人学生に体験をさせるような交流会などをしました。韓国の文化だけではなくこのように互いに経験することができるとても、貴重な経験をすることができました。これからは言語だけではなく韓国の文化も共有しながら日本人学生とコミュニケーションをとって行きたいです。

私が5才の時、父が日本の支部で働くことになったので、岡山で1年間、また新潟で1年過ごしました。幼い時の友達と今も連絡していることもあり、たびたび日本を観光しました。新潟で過ごした小学校2年生の時、両親とつりにいったことや、やっと日本語がしゃべれるようになったため、新しい友達がたくさんできたので、なつかしく思えます。日本の保育園に通っていた時は日本語が全然できなく、毎日泣くばかりでした。小学2年生のころから本格的に習いはじめました。軍隊にいるとき、父と日本に留学している兄から勧められ、日本留学を決めました。

学業の方ですが私は、昔からニュースで見た国際情勢などを友達に説明することが好きで、情報通として通っていました。デジタル時代の今、だれもが簡単に情報に接し、また発信できるようになりました。あふれる情報の中で映像

の領域は益々拡大し、影響力は非常に大きいです。社会の動きをいかに判断するかが最も重要に思い、私は角谷和俊教授の研究テーマや講義に興味を持ちました。今の時代は、だれもが簡単に情報に接し、また発信できるようになりました。しい量の情報の中で、自分のほしい情報をどのようにし手に入れ、得られた情報をどのように上手く使いこなせるのか、そのの判別能力、どう発信するのかといった「情報リテラシー」を身に付けるべきだと思います。「正しい情報の提供」をその役目とする、マスコミの影響力はさらに高くなっていくはずで、私はドキュメンタリープロデューサーを目指しているので、社会の動きを正確に判断し、伝える力が必要だと考え、メディアや色々な媒体の構成の方法を学ぶことができることからメディアが社会にどのような影響をあたえるかその影響力を認知することができると思いました。日本は国際社会の中心であり、国際情勢をいち早く得ることができる上に、多彩な報道に接することができます。日本での活動を通じて国際舞台で通用できる資質を養い、将来は国際社会の問題について発信していきたいです。

このようにニュースや国際情勢を友達に伝える事が好きでした。私はジャーナリストの中でもドキュメンタリー監督が将来の夢です。切っ掛けはケビン・カーターの写真と記事を見てからでした。内争中の村で餓えている少女が死ぬのを待っているハゲワシの写真でした。ケビン・カーターはこの写真でピューリッツァ賞を受賞したが非難を受けました。非道徳的、非人間的と非難を受けましたが私が思うにはその状況で彼がやったことはジャーナリストとしての役割を立派にやりとけたと思います。もし彼が写真を撮らずにその少女を助けたらこの村の悲惨な現状を世界の多くの人に伝えることが出来たことに勇気ある行動だと感じました。非難を受けながらも自分の役割を忠実に臨むジャーナリストは現代社会のヒーロです。私もジャーナリスト「ドキュメンタリー監督」になってこのような確たる信念と確信を持って事実を伝えることができるプロになることを目指しています。

今回の長期休みの間、私は将来の夢に近づけるためメディアに関連する本を読みました。マーシャル・メックルハン 『メディアの理解』1967年出版した本で日本では1987年に栗原裕さんが翻訳して出版された本です。この本を選んだ理由はメディアから送られる情報を正しく理解した上で発信できるようになりたいからです。溢れる情報の中、本当なのか嘘なのかの見分けかたが必要だと感じ、この本を選びました。またこの本の副題である『人間の拡張』は技術の発展で新しい媒体ができることを予測していたからです。

人間に必要なものが何かと子供たちに聞くと、子供たちは空気と答えると思います。私たちが意識しなくても息をするのは、空気が私たちに必ず必要だからです。それなら、媒体、つまりメディアはどのようなのか、現代時代のメディアは私たちが意識しなくても、『私たちの目と耳を通じて私たちの感覚器官と疎通しています。』バスで聞くラジオ、毎朝見る新聞、そして現代、不可欠な媒体になってしまったインターネット、私たちはこのように媒体と離すことを考えられない時代を生きています。メディアが私たちの価値観に大なり小なり影響を与えていることは事実です。しかし、このようなメディアの影響力にもかかわらず、これまで人々はこのような

メディアについて無知なままメディアが送るメッセージを受容するだけに徹してきました。

私たちの日常の中から多くのメディアと接していながらもメディアが我々に与える影響力について見過ごしています。私もこの本を読む前まではメディアが与える影響について深く考えることがありませんでした。みんながそうであるように、様々なメディアが、我々の周辺に数え切れないほど存在しますが、それが私たちの生活にあまりにも深く馴染んでいて、自覚していなかったからです。この本を通じて、著者のマーシャル・マクルーハンのメディアに対する考え方を知るようになり、メディアについて自覚できる機会となりました。その中でも本の副題である人間の拡張の意味を理解して、共感することによって、メディアの意味をマクルーハンの観点からして理解することができました。

現在の我々の生活ではなくてはならないコンピューターの登場とインターネットの発達、ひいては携帯電話や衛星の発達は、私たちの空間的制限や時間的制限をさらに緩和させました。このように制限された感覚が本、ラジオ、テレビ、そして現在のインターネットのようなサイバー空間へと次第に拡大されています。これがまさにマクルーハンが予言した『フィートバック』、『時間の飛ばし』です。

メディアは、メディアの中のメッセージとした私たちに送られるにあたって多くの操作が行われ、歪曲されたりして私たちに支配されながら、影響を受けていることは事実です。にもかかわらず、現代を生きるほとんどの人たちはメディアから伝わることについてそれを自分が直接経験したかのように何の違和感を持たずに受け入れています。私たちが何の疑いなしで受容を続けるようになると、メディアは一種の無限権力になってしまうだろうと思います。

私たちは今もメディアと疎通しています。私たちが使用する言葉と文字から始めて今のマクルーハンが言った『フィートバック』、『時間の飛ばし』すなわち、インターネット時代まで発展してきました。これからは今よりさらに早いテンポで発展していくと思います。過去にはメディアを人間の拡張の欲求で誕生させ、発展させてきました。

インターネットとともに、多くの新しいメディアが我々の意識や無意識の中に入り込んで、私たちの感覚の一部になってしまったいま、今まで持っていたメディアに対する受動的に収容することにだけ汲々とした姿から変わる時になったと思います。今はメディアに対する新たな自覚と深度ある考察が必要な時です。メディアに対する自覚と考察を通じて今よりもっと能動的な収容者になり、私たちがメディアの、真の主人にならざるを得ないことを『メディアの理解』を通じて思いしることができました。また、この本について内容をまだ完全に把握していない状態かもしれないので、本の意図通りに理解できなかったかも知れないと思いました。もう少し時間をかけて何回も読まなければならない本だと思います。

まとめ

今回の日本語の授業でのレポート『アイディアメモ』をきっかけに、これからの秋学期や残りの大学生活をどのように送らなければならないか、振り返ることができました。大学生活の花とも言える1年生が重要と思われる今、この時期にはやりた

いことや良い思い出もたくさん作りたがるそんな時期ではないかという気がします。まだ将来のことを考える時間がある一年生であるため、今の時期色々チャレンジ精神を持って、新たなことに挑戦し経験を将来に繋げたいです。

理想の自分へ

私はヨン ジャカン 総合政策所属の一年生である。大学に在学するこの4年間、自分の理想に向けて一生懸命勉強したいと思う。

本文に入る前に、まずは自分が日本に留学することになった動機と理由を説明しようと思う。一言で言うと、その理由は「アニメ」だ。私は中学校2年からアニメにハマって、抜け出せなくなるほどになったのだ。あの時からずっとアニメ、ゲームと歌を楽しんでいた。幻想の世界に浸って、まるで新しい世界で冒険するような感じが私の最大の楽しみだ。ここで一つ大好きな作品を紹介しよう。そのアニメのタイトルは「とある科学の超電磁砲(レールガン)」という。物語の舞台は「学園都市」と言われ、今よりずっと先進的な時代であり、科学による強化で人々は超能力を獲得できる大都市である。そして超能力のほかに魔法も存在する世界である。主人公は女子高校に通う御坂美琴と彼女の三人の仲間だ。超能力開発を目的とする学園都市には、日々他の勢力の攻撃に備えることが必要である。主人公たちは学園警備隊の一員として、街での犯罪を解決することが日常茶飯事みたいなことだ。彼女の能力は電磁力を操ることで、電流で敵を倒す以外、最も代表的な技は物凄く強い電磁場を作り、コインを加速して砲弾のように発射すること。その姿はまるでレールガンのようで、間もなく彼女は「レールガン」と名付けられた。ついでにタイトル名もこの由縁である。時には悪勢力と戦い、時には女子高生たちのじゃれ合いを描くことがこの作品の最大の魅力だ。熱いバトルシーンと女の子たちのきゃびきゃびな日常を兼ねて、加えてキャラの性格も鮮明で可愛いことで、私が見た数多くのアニメの中でも傑作と言えるほど優秀な作品だ。ちなみに、この作品の主題歌である「only my railgun」は、聞くだけで心を滾らせることで、落ち込んだ自分を何回も立ち直らせてくれたのだ。

自分はどうしてそこまでアニメを好きになったかというと、最初は多分、ただの現実逃避だと思う。あの時の自分は、センチメンタルで自信を持たず、学校での人間関係もうまく行けなかった。クラスメイトとあまり溶け込めなくて、いつも一人ぼっちの時期であった。このようなつまらない生活は長い間に続いたけど、私がアニメの世界に身を置いた瞬間で終わった。たとえ自分が孤独でも、アニメを見るたび一時的に物語の中に隠れて、現実の自分が味わえない喜怒哀楽を体験することができたのだ。それからずっとアニメを見て、自分の価値観さえ変えていた。以前より前向きようになったことを実感した。「たとえ他人に認められなくても、己の意思を貫くのだ」というセリフから、ほかの人の目線を気にせず、ありのままの自分を受け入れ、胸を張ってあらゆることを直面できるようになった。

そして、いつの間にか、僅かだけど日本語が分かるようになったのだ。最初は字幕を見て会話を理解していたけれど、時間が経つと見なくても分かるようになった。この小さな発見が全ての始まりと言っても過言ではない。その発見は、新たな言語を学ぶ原動力となり、私はその頃から日本語を独学し始めた。高校生になった時、ようやく日本に留学したいという決意を両親に打ち明け、承認されたのだ。

自分は高校の頃理系だったが、数学が苦手で実際辛かった。一方、アニメを通じて少しずつ日本語を習得していたことを気づき、もしかして自分の長所は言語学かもしれないと、閃いた。自分の特性に合わせて、翻訳という分野に進むのは自分にとって最善の道だと思う。そう、私が目指しているのは、将来「翻訳者」になることである。具体的にはアニメ産業の

作品、例えばアニメ、ゲーム、歌、小説などの翻訳者である。この仕事を通してたくさんの素敵な作品を多言語に翻訳することでより多くの人々に楽しませ、その感動を世界中に広めるのが私の目標だ。昔の自分が「救われた」「導かれた」ように、今度は私自身の力で二次元の素晴らしさを伝える番だ。

この究極的な理想を成し遂げるのに、最初やらなければならないことは大学で様々な知識を身に着けることである。翻訳の仕事に携わりたい場合、無論語学力が何よりも優先すべきことだが、ほかの分野の勉強も怠れないのだ。例えば、政治学と経済学は社会人にとって不可欠のスキルであり、世界を洞察するのに重要な知識なので、きちんと勉強する必要がある。異文化交流のコツを身に着け、異なる文化間のコミュニケーションをより円滑に進めるような能力も大事だと思う。つまり、語学力とコミュニケーション力を重点に養うのが私の大学生活の課題である。語学力向上のために、私は総合政策の言語学ゼミに参加したいと思う。集中してゼミで専門分野の知識を習うのは、一番効率的だろう。

勉強以外には、新しい人と出会い、たくさん友達作るのも大事だと思う。それは自分の視野を広げるのにやく立つからだ。ほかの人と意見を交わすことで、自分の考えも少しずつ柔軟になり、より多角的物事が見えるようになるのだ。今のところはゼミの人と全員仲良くなっていないが、これからグループ活動を通じてお互いの関係を深めたいと思う。この間中国の先輩たちと一緒に学園祭で出店して、台湾の食べ物を作った。本当に疲れたけど、いい思い出になることは違いないのだ。

また、海外で留学するために高額の学費と生活費が必要なので、今まで支えてくれた両親に重い経済負担を負わせた。それを軽減するのに、暇な時間を使ってアルバイトしたい。言うまでもなく、アルバイトしたいといっても学業優先だ。今の段階は大学の勉強仕方を馴染んで、ペースに追いつけるようになってからバイトのことを考える。昔は焼肉屋でバイトした経験があるが、それはものすごく体力の消耗が激しい仕事なので、勉強の支障になるから今度はしない。一番理想的なのは家庭教師、あるいは翻訳の仕事だと思う。人に教えるのは自分にとっても楽しいことだから、機会あればやりたい。

この夏休みの間、私は「翻訳スキルハンドブック」という本をじっくり読んだ。本書の著者は駒宮俊友（こまみや しゅんすけ）、彼は翻訳者であり、ランブル大学ジャパンキャンパスの翻訳講座講師でもある。日本翻訳連盟（JTF）及び翻訳学ヨーロッパ学会の会員として、ビジネス、法律、旅行など様々な分野で翻訳業務に従事している。現在は主に大学で翻訳コースを開講している。

その本を選んだ理由は、将来携わりたい仕事に密接関わっているからだ。英日翻訳を中心に、様々な翻訳スキルや手順、そして大事な心得などを、詳しく書いた優秀な作品である。内容の詳細については以下に述べよう。

翻訳の定義から話そう。著者によると、「翻訳はテキストの解釈を巡る科学、技術、そして美学である。」創作とは異なり、翻訳はゼロから生み出すのではなく、既に存在する概念を新たな媒体、いわば言語に置き換えることを指す。「翻訳は一種の技術でもある。技術であることで、後天的に学べる手段や方法で、バイリンガルや帰国子女しかできない仕事ではない。」と著者が述べている。

質のいい翻訳を行うには、規定のプロセスに従い進めることが大事だ。英日翻訳の基本プロセスは「原文分析」「リサーチ」「ストラテジー」「翻訳」と「校正」の5つのステップがある。「原文分析」とは、原文テキストを確実に理解し、翻訳の実作業に備えるためのコツ

とテクニック。無論、原文さえ完璧に把握できなければ、その翻訳もデタラメになりかねない。次の「リサーチ」とは、辞書やオンライン検索、ショートカットなどの活用法を指す。リサーチによって、原文で分からなかった単語の意味と定訳(一般的に使われている訳語)、自然な言語など、翻訳に必要な情報を効率的に見つけるのだ。3つ目の「ストラテジー」とは、ざっくりというと「自分がどのように翻訳するかを決める”戦略”」だという。具体的に言うと、「誰に向けて翻訳するか」「どのようなメディアに掲載するか」「文体のスタイルは(固い/柔らかい)」などを決めることだ。4つ目は文字通り、どのように上手く翻訳するテクニックである。例としてはたとえば、「英文が長文の場合、日本語訳を二分に分ける方法」と「読みやすい日本語を簡単につくる技術」など。そして最後の校正は、長すぎる文章の再編集と訳抜けの選出など、小さな誤りを排除したりして文書を読みやすくするステップである。

この本に書かれている要領はあまりにも多過ぎるため、実作業のプロセスに関して長く説明できないが、ほかに役立つアドバイスと心得もたくさん載っている。例えば、翻訳者として語学力は重要だが、自分の限界を超えて無謀な挑戦をするのは効率的でなく、むしろ勉学の邪魔になる。ゆえに、情熱を維持しつつ個人の歩幅に合わせて勉強するほうが良い。「翻訳者には美しい修辞に溢れた文章などは不要で、求められるのは相手の知りたい情報を見極め、簡潔に伝えることのみである。」と著者は主張している。当たり前なことだと思われるかもしれないが、華麗さを求め本業を廃れるのは、翻訳者として不合格だ。この発想で私の考え方が一変した。確かに、難しい言葉を使うより、明確で分かりやすく伝えることこそ重要だ。特に将来自分がやりたいアニメ作品の翻訳には、時々特殊用語が湧いてくるので、いかにそれらを簡潔に翻訳することを常に意識しなければならない。

「翻訳されたものは何があると思う?」と聞かれたら、最初に思いつくのはドラマや小説だろう。実際、我々の周りで翻訳作業が施されたものがたくさん存在している。輸入品の説明書とラベル、海外の学術論文、ネットに掲載する記事、レストランのメニュー、携帯アプリなど、すべては翻訳されて私たちの生活に登場するのだ。翻訳されたものはあまりにも日常生活に浸透していて、人々に意識されていないのは殆どの場合である。仮に翻訳のない世界だとしたら、今と全く違う光景になるだろう。異なる文化をつなげる橋がなくなると、少々退屈な世界になるかもしれない。

私は、アニメの世界を通じて同じ考え、同じ感動を共有することの楽しさを初めて知ったのだ。アニメの世界には国境がなく、あるのはみんなが素敵未来への憧れと希望のみ。アニメを世界中に広げるのに翻訳作業は決して欠かせない一環である。世界は、翻訳をはじめに繋がっていると言っても過言ではないと思う。これから自分がやりたいことは人と人の繋がりにある「言葉」を自らの剣にして、自分ならではの未来を切り開くことである。文化、言語、人種を超えて、全人類の交流のために自分の力を振り絞る。世界平和とか偉いことを達成するためとは言わないが、人が分かり合えばもっと素晴らしい世の中になるのではないかと私は時々思う。

感想

この一年を通して、この授業で日本語を上げることだけでなく、大学生らしく同級生と話し合ったりレポート書いたりして、色々なことを学んできたと思う。最初は1000字程度の文書だけが、毎回振り返って書き直すと新たな発想が次々と現れてくる。自分の本当のやりたいことも段々明瞭になってきた、それはとても有意義なことだと思う。大学に入ってばかりで目標はまだはっきりしない私たち一年生にとっての第一歩というべきだろう。このような友達と一緒に討論して、作業を進む経験はきっとこれから役に立つのだ。この一年が楽しく、充実に過ごせるのは先生のおかげだ。ありがとう、先生。最後に、もう遅くなったけど、あけましておめでとう、先生！

3 クラス

担当 勝部 三奈子

今までの自分、そして今から

I. 過去の、そして現在でも変わらぬ考え方

幼い頃に手に入れたいものはたくさんある。大人になった今にも変わらない。親に要求すれば、何でも獲得できるわけではないと意識した現在、その思いを実現するに一番簡単なのは自分がお金持ちになることだと思っている。当然、お金ではすべてのもの手に入れるわけではない、一番大事なものはお金ではないとよく人々が言っている。しかし、お金に余裕をもっていないなら、生活に精一杯の人はいったい、本当に周りの素晴らしいものに気付けるのだろうか。ならば、先の話はただの現実逃避にすぎないと私は思っている。

また、ある理論はこう言っていた。富めるものはますます富み、奪われるものはますます奪われるという。これはマタイによる福音書から出てくるもので、マタイ効果と呼ばれている。つまり、お金があればあるほど、もっとお金を手に入れることができる。世の中に大勢の人が良い生活を送りたいためには必死に努力している。そして、その良い生活の良さは大体人がどのぐらいのお金を持っていることに関わる。既に幸福がお金とほぼ同じと人々に認識されている今、お金持ちは一般人より幸せな生活を送りやすく、未来が絶望に墜ちる可能性も一般人より低くなるに違いない。そして、誰に聞いてもお金の重要性を否定できるものはいないだろう。お金がどうしても必要としたら、当然、多ければ多いほど良いだろう。

II. 実際的な行動に移った結果

上記のような考えを抱えている私は高校卒業後、マレー人至上主義のマレーシアで仕事をすれば成功することに期待を持っていない同時に、自分は視野を広げ、もっと優れた自分に鍛えるため、私は先進国の日本へ留学することを決めた。そして、留學生の定番の一つとしてやらなければならないのは当然、アルバイトである。ハローワークという雑誌を通じて、幸運な私は直ぐに報酬が悪くないアルバイト先を見つけて、そして順調にその店に入った。しかし、そのころの私は何度もおかしい光景を目にした。それは上司のことは嫌にもかかわらず、笑顔をしながら会話する職員の姿だ。そして、「将来の自分もそうしなければならぬのか」という疑問も心の中に生じた。何度も考え直した結果、やはり私はそのようなことを嫌っている。したがって、大学に入った後、嫌な人に向かわず、好きな時間帯にお金を稼ぎスキルを身につけることを決意した。

III. 今から自分の出来事

そして、私はインターネットなど、様々な手段で自分が何かできるのかを調べてみると、思ったより多くの情報が目に映った。私はそのなかから「これはいけそう」と思ったものをいくつ選んだ。最初に取りくみたいのはFX（正式的には「外国為替証拠金取引」といい、一般的には Foreign Exchange の英語略 FX という）のこと。

FXは株式投資と似ているものであり、一つの国の通貨と他の国の通貨（例えば豪ドルと日本円、ユーロとドルなど）との取引をする時、違う国の通貨の値段差によってお金を手に入れるものである。そして、株式投資と違い、月曜日から金曜日まで、24時間内いつでもできることと、少数の資金（4500円）で始められるのでリスクを抑えることができること、FXにはこの二つのメリットがあるという。したがってこれは初心者でも簡単にできるものである。当然、これで多くのお金を稼ぐにはまた知識を深めたり、取引の技術を磨いたりするがある。それに、これがいつでも安定に稼げる手段ではないという自覚は私がつけているため、次に注目しているのはプログラミングのことである。

インターネットが不可欠になった今、有効的、効率的にインターネット上の情報を読み取り、再編成すること重要性も軽視できない。人口爆発の今、それに社会の発展が早すぎる今、情報を先に得る者は先に勝つ。プログラミングのスキルを習得することで、人に広告を乗らせるウェブサイト作ったり、あるいは新しいソフトウェアやアプリケーションを開発したり

するだけではなく、もっと効率的にインターネットの情報を収集や管理できるアルゴリズム（コンピューターがデータを管理する方法のこと）を開発することも可能なのだ。そうだったら、世界を自分の手に把握していると言ってもおかしいはないと思っている。したがって、この四年間の大学生活でできるだけこのスキルを把握していきたいと思っている。具体的にはまず、インターネットや関連書籍を通じてプログラミング言語（例えばC言語、Pythonなど）を学習していくと思っている。

IV. ある本と出会った

こうして、私は自分なりのお金の稼ぎ方を二つぐらい見つけた。しかし、方法というのはやはり多ければ多いほど強いと思っているので、こと後も自分なりの稼ぎ方法を探すことをやまない。そして、ある日またその方法を調べているときだった。偶然のことに私は「お金持ちにはなぜ、お金が集まっているのか」というタイトルの本を見つけた。そして、ある課題を完成しなければならないことを機会に私は読者から好評を得たこの本を手にした。

この本の著者である鳥居裕一さんは本来普通のサラリーマンだったが、その堅苦しい生活にも耐えられない彼は思い切って安定な仕事をやめた。そして、七転び八起きの精神で苦勞していた日々乗り越えた彼はつい「成幸者」——成功し幸福な生活を送っている人——になった。今の彼は執筆・講演会の傍ら、個人面談を中心にしたサクセスカレッジを主宰している。

そのような筆者が、日米の多くの億万長者との交流と、自分が米国の成幸哲学者から学んできた理論を実施した経験をもとに、自分がどのように「成幸者」なったのかをこの本に書いていた。鳥居さんは呼吸することから、お金の使い方も「うまくだせば、うまく入る」という自然の摂理に従うべきだと主張している。つまり、お金は本来一ヶ所だけに止まらず、世界に回すものだから、お金の支出はどうしても避けられないこと。そうしたら、私たちが考えるべきなのはお金をどのように、どこで使うことのだと筆者は言っている。

そして、お金の使い方一番肝心なのは自分への投資である。ここでの投資というのは自分の将来を考え、お金を使うことを通じて自分の健康を保つ、能力を向上させる、人との出会いの機会を作る、ビジネスチャンスを掴むことだ。そうすれば、きっと出したよりも多くのお金は戻ってくると筆者は言っている。

最初に私は実際、この本に対してあまり期待を持っていなかった。その原因は今の市場では中身が実質的、充實的ではない作品が段々蔓延している。そのため良い作品を探すのも難しいことになった。また、それがベストセラーであり、多くの読者に好評を得たとしても、その内容必ずしも自分と合わない。幸いにそんなことはなかった。

V. その本からわかったこと

この本を読んだことで、いくつの成幸者に備えるべきテクニックを学んだ。例の一つとしてあげられるのは、どうすれば成幸者と知り合う機会を作ることだ。それは成幸者が主催する講演会に参加し、その前に自分がどのくらいその講演会を期待しているのかをメールで相手に伝える。そして、その講演会が終了した後、あの講演者と名刺を交換するとき、あの人は「あ、この人がこの前、自分にメールを送った」と自分のことを印象に残り、好感を持つようになる。そうすれば、相手と何らかの話を進めたい時も楽になる。また、この本を通じて、私はさらに資金管理の重要性を意識した。それは虚栄心をもっている人を除く、一般的にお金持ちでもお金を無駄にしないとこの本に書いていたからだ。したがって、機会があればこの大学での四年間でも資金管理のコースや授業などを積極的に取り込みたいと思っている。そして、資金管理に関して現在の自分がどのような行動ができるのかを考えてみると、まず頭に浮かんだのは自分が習った簿記をもっと研いだり、会計を書籍で自学したりすることである。簿記と会計はそれぞれ違う方面から資金の流向を把握するスキルなので、それを学習したら、将来の自分がお金持ちになると、上記の本に書いてあった「お金持ちでもお金を無駄にしない」のように行動できると思う。また、簿記や会計は会社などの大きな組織でしか使えないと思っている人がいるかもしれないが、実際にその中でも自分一人の生活に役

に立つものもあると昔の簿記の先生に教えてくださった。したがって、上記のスキルを学ぶのは決して無駄にならないと思う。

VI. まとめ

マレーシアに生まれて、日本に留学しようと思って、そして今まで生きてきた私は、この長くとは言えない20年での経験を通じて、自分が将来どのような人になりたいのかをやっとわかった。それはお金持ちになることだ。当然、この世に他の自分がすべきことや使命があるかもしれない、しかしやはりその時が来ない限りわからないだろう。そうだったら、今の自分ができることはどのような問題にあっても解決できる準備を整えるだけだと思う。そして、その「準備」の中で、一番簡単なのはお金持ちになることだと思っている。どのようにすればその思いが実現できるのは、このレポートに書いてあったように、FXをやることとプログラミングを学習することと、簿記や会計のスキルを把握することだと思う。そして、自分がお金持ちになるため、まず四年間で一か月に百万円ぐらい稼ぐように努力していきたいと思う。今はまた目標との距離があるが、続けてやれば必ずそこへ辿り着けると思っている。

VII. 最後に

凡人である私たちはどのような未来が待っているのを知らない。ならば、そのときに直面しなければならない問題への対策を早めに準備したほうが良いと私はそう考えている。また、せつかくの人生だから、お金のために自分の時間や自由さえ人に左右されるのはあまりにも退屈すぎるだろう。したがって、一度しか生きられない人生は自由自在に過ごしたいと思っている。

授業の感想：

先生も皆もレポートの不足なところを指摘くれました。他の自分が気づいてないこともそうでした。そして、先生の説明もとても分かりやすかったです。そのおかげでこの授業はとても簡単だと思っています。

大学での学び

ジャーナリストになるため必要な力

2018年12月17日

王清

● ジャーナリストになりたい理由

私は大学四年間を通して事実を伝えられるジャーナリストになりたい。ジャーナリストになるために、いろいろな知識、幅広く視野、物事を客観的に見ることなど必要があると思う。また、文章の倫理的内容を正確に把握できるようにこととその内容について自分の思考能力を高め、さらに重要なことは自分の考えを他人に的確に伝えられる能力と正しい情報源が確保できるようになる能力を身につける必要があると考えている。

● ジャーナリストになりたい理由

ジャーナリストになりたいと思ったきっかけは二つがある。一つは2008年5月12日に中国の四川でマグニチュード8の大地震であった。まだ中学生の私は、被災者として、血と涙の記憶が残っている。中国のテレビには人々を救われた感動の報道を重視している。それに対して、2011年に日本で震度7の東日本大地震が発生した時、日本のテレビでは迅速で正確な災害情報を人々に伝えられ、冷静で素早く事実を言う方面を重視していた。ここでは日本の報道の仕方との比較よりは災害時、東日本大震災の時の、日本の報道のように、冷静な事実を伝えるのではなく、感動的な側面のみを報道をしている、中国の報道の仕方に疑問を持った。

二つは、2008年に中国の四川で地震があった一週間後に漸く両親と連絡を取り、両親が私と姉を連れ、バスを乗ったあの町を離れる時にスマートフォンとカメラを持ち出しは禁止された。「自分のスマートフォンとカメラなのに、なんで持ち出しは禁止なの？この町の災害写真をバレたら、ダメなの？」と母に尋ねていたが、母はただ黙っていて、窓の外の風景を眺めていた。そして、実家に帰り、テレビに流された地震の死亡人数、行方不明の人数が実際の人数とは異なっていた。両親と連絡を取れず、ずっと待っていた一週間、毎日これからどうすればいいか、この世界には私と姉だけ残され、周りの人たちに外れ絶望感の恐ろしさは今でも覚えている。その時から、テレビに流された情報は必ず正確とは限らず、一面においてのみ報道する可能性もあるということに気が付いた。また、私のような被害者達も本当の事を知る権利があるはず、そのような人たちに全力を尽くし、応援したいと思っている。

だから、私は大学四年間を通して中国、隠された事実を日本人だけではなく、外国人にも伝えられるジャーナリストになると覚悟を決めた。

● 本を読む理由と本の内容

現在世界がグローバル化し、各地域の間の移動が活発化しており、それによって様々な問題が起きている。その解決策としてメディアが重要な役割を果たすと考える。それに、私は日本に留学してきた1年目の時、友達からエンパワメント（社会的弱者や被差別者が、自分自身の置かれている差別構造や抑圧されている要因に気づき、その状況を変革していく方法や自信、自己決定力を回復・強化できるように援助すること。またはその理念。『護』や「救済」ではなく、本来の権利や人格を保つために力を付与する（エンパワー）という考え方に沿って、教育や支援を行うという意味を指す）の問題を聞いた。エンパワメント（中国人技能実習生の現状）に対する興味を持ったきっかけがあるといいかもかもしれません。友達からフレイレが書いた『被抑圧者の教育学』という本を進めてくれた。それに、私もちょうど被抑圧者（貧しく待遇の悪い階級の人々のこと）、エンパワメントなどの問題に興味を持ち、フレイレの『被抑圧者の教育学』という本を読むことにした。この本は第1章において、フレイレは、自由とは、人間が完成を目指して行う冒険のために欠かすことのできない条件であると述べている。それは、被抑圧者はもうこのような環境を慣れているから。さらに、危険を防ぐため、自由を求める行動もやめる。だから、自由は、知識を伴った行動である「実践」、それを獲得するために、理論と行動のどちらも欠けてはならないということだった。

第2章では、「銀行型教育」とは、教師は空の銀行口座のような生徒に、まるで預金を繰り返していくように知識の伝達を行う教育形態であると述べている。フレイレは、この銀行型教育に反対だった。なぜならば、この教育を通じて、学生たちが学校のルールを守ることを要求され、学生たちの自由な創造力と判断力も許されず、今の社会の現実を慣れるまで強制される。その代わりに、フレイレによれば、「真の」教育では、人々が己の不完全性に気づき、より完全な人間となることに励むことが求められる。教育を個人や社会の意識的な形成のための手段として用いる試みは、「意識化」と呼ばれる。

第3章では、「自由の実践としての教育の本質」である「対話」が何よりも大事である。対話による問題解決型教育は、人と人との対等な対話に基づき、「銀行型教育」のような預金を繰り返していくように知識の伝達を行う教育形態を破れる。したがって、教えるか教えられるは相互的で、教育と意識化とは同時的に進行する。フレイレによれば、真の教育とは、教師と生徒の間の対話を必要とし、より大きな世界の状況を通じて行われねばならないということだった。

第4章では、「対話的行動理論」について、人間を解放するために団結、組織などが必要であると述べている。

● 本を読んだ感想、注目している問題とその問題について自分の考え方

この本を読んだ後、今まで知っている教育形態と違い、それは平等と正義に関して、被抑圧者の権利を守る本だと思った。中でも、一番印象的なのは「真の」教育では、人々が

自分の不完全性に気づき、より完全な人間となる。それに、教育を個人や社会の意識的な形成のため「意識化」が欠かさないものであるということだった。なぜその部分が印象的だったかを書くといいのではエンパワーメントの問題とつなげられると感じている。「異質なものを排除しよう」とする差別で、外来者が透明化され、ディスエンパワメントの状態に陥ることがある。他地域コミュニティに移動するニューカマー達（20世紀80年代に新しくやってきた人という意味を指す）がこれからどうすればいいかわからない、誰かを助けて欲しい気持ちという点が当時の四川地震災害を受けた当時の私のように思える。だから、このような現状を改善するために、「対話」が重要だと考えられる。しかし、自分の生きづらさを言葉にするのはなかなか難しいし、声をあげる「場」も多くないのが現状だ例えば、中国からの研修生たちが日本の工場に働き、残酷な仕打ちを受けている。しかし、彼らが五十音しかできないから、自分の状況を周りの人に伝えることもできないし、どこに自分の声を伝えればいいのかも分からない。被抑圧者（貧しく待遇の悪い階級の人々のこと）と中国からの研修生たちの立場に似ている。中国の研修生たちが日本の工場に働き、残酷な仕打ちを受けている。彼らが自分の状況がよくないことを意識し、もしちゃんと日本語を話せば、工場の管理者と対話できると、そんな酷い目を合わないかもしれない。また、「会話」は社会・人間の問題を解決していく大事な手段であると考えられる。差別され、抑圧されなど自分の生きづらさを口から出し、被抑圧者・抑圧者としての自己の発見ができ、自分の存在が承認される。

そして、その時、私が研修生たちと同じ目を合わせ、同じ経験がある共感を持ち、理論と現実のバランスを把握し、フィールドワークを通じて、言語と文化などを習う。しかし、実際には日本語を上手に話せる研修生は少なく、誰かが代わりに伝える必要がある。そこで、彼らが言えない言葉を代言できるようなジャーナリストが必要と思う。それはエンパワーメントは研修生の問題だけではなく、教育の問題なども含まれている。こ本を読んだ結果、ジャーナリストになりたい気持ちを新たにした。

● 大学でジャーナリストになるための準備

ジャーナリストになるために、いろいろな知識、幅広く視野、物事を客観的に見ることなど必要と思う。大学1年次の春学期時に、倫理学の授業を通して、倫理的なトレーニングを受け、文章の倫理的内容を正確に把握できるようにこととその内容について自分の思考能力を高めること、さらに重要なことは自分の考えを他人に的確に伝えられる能力と正しい情報源が確保できるようになる能力を身につけることである。また、一年次の秋学期から「社会探究入門」の授業を通じて、現代社会を理解・探究するための知的基礎体力を身につけたいと思う。それは、社会をなして生きている私たちにとって、現代社会は複雑化し、不確実性が増し、「見えにくく」「わかりにくく」なっているように見えるから、「わかりにくく」社会をまずは精確に「理解」するためのチカラが必要と考えている。そして、その「社会探究入門」から学んだ知識を生かして、2年次に学校の学び特□であるフ

フィールドワークを積極的に参加し、メディアに関する専門知識を身につけることも必要だと考えている。フィールドワークは現地の一員として体験し、当事者と共感を持って信頼関係を築ける。そして生活の隅々の観察を通して、実際に現場に訪れないとわからない情報を集め、その情報を分析する眼を養う。さらに、メディアやいろいろな媒体の構成の方法を学ぶことができることからメディアが社会にどのような影響を与えるかその影響力を認知することができるから、社会の動きを正確に判断し、伝える力が必要だと考えている。3、4年次にゼミに入り、Web コンテンツ、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)、デジタル放送など様々なメディアを利用した社会情報基盤とそのアクセス環境を実現するための社会情報サービスの構築手法、およびその要素技術を研究する。積極的にインターンシップに参加し、新聞社に務めたいと考えている。

● 結論

これらのことはジャーナリストにとって、非常に大切な能力だと考えている。1 年次に勉強した基礎科学の知識と結合して、現象に隠された本質を見抜く力を養いたい。2 年次から学んだ知識を活かして、積極的にフィールドワークとゼミに参加し、自分の考えを他人に的確に伝えられるように頑張る。3、4年次にゼミに入り、より社会の動きを正確に判断し、伝える力を発揮し、積極的にインターンシップに参加する。卒業後、日本の新聞社に入り、ジャーナリストとして中国、隠された事実を日本人だけではなく、外国人にも伝えられる努力したいと思う。

授業の感想：

春学期に初めて月曜日の日本語の授業を受け、大学四年間に何をやりたいを聞かれた時に頭に浮かんでくるのはジャーナリストしかない。しかし、ジャーナリストになれるかどうかは今も疑問を持っている。疑問と言うより、恐怖の方が相応しい。夢を実現するかどうかは怖い。この授業のおかげで、これらの計画を立った。みんなとコミュニケーションをして、自分の文法的な問題、論理性の問題など発見し、そこから何度もやり直すも大変でした。そこに、みんなに感謝という言葉をししか言えないと思う。これから、夢を実現できるかどうかを考えずに計画に行動し、4年生になったら答案を分かるかもしれない。

4年間の「人間関係」 (Feat.自分が4年間叶えたいこと)

キムドンハ

私は関西学院大学に留学している間、大学生活を通して自分自身が叶えたいことがある。全体的な内容をまとめてみると「より良い人間関係を作ること」、つまり、人々とのやり取りをなるべく多く、それに加えてよりうまく行うことである。もちろん、大学に進学している以上、勉強することが大事であると思う人がいるかもしれない。しかし、私は昔から、親に「人間関係を作ること、そしてその人間関係をうまく整えることこそ、人生の財産の一部であり」とよく言われながら育てられた。実際、学生時代の思い出や経験などから映してみると友達がいれば様々なことに力を合わせるができる。例えば、勉強や運動も一緒にすることでお互いに助け合いながら、そして、お互いに競争しながらお互いのモチベーションの向上が図れる。さらに、ゲームなども一緒にすることでより楽しく遊ぶことができる。私はこういう人間関係をより厚く、より真剣に行いたいと考えている。そして、上で書いたこと以外にも、自分が人間関係を良く行いたい理由をいくつか紹介したいと思う。

まず、我々が良い人間関係が築けた場合、お互いが様々な頼りになり、留学生の立場である私にとってはより良い影響を及ぼすこともできると考えている。確かに、一人で留学している以上、自分のことは自分でやるべきであると思う人がいるかもしれない。しかし、その意見に関して、私は自分とより親しい、より頼りになる友人がいる場合、自分にとっては身も心も、それ以外の様々なことにより力になると考えている。なぜかという、たとえば、他地ではなく、他国から一人で勉強をしに来た私にとっては、一人では解決できない悩みや問題、そして相談など（一人暮らしのこと、日本での生き方、学校の授業など）に関して悩んでいて、その話を聞いてくれることだけでも自分にとってはより力になれると思うからである。

そして、上で掲げた「モチベーション向上」ということは自分自身のことをうまくレベルアップすることに繋がるかもしれないということの意味している。つまり、いろいろの友達との付き合いの中で自分の印象やきれいな姿のことだけを意味する「スタイル」を示していることではない。常に、人々に向けて「誠実な姿勢や態度」など、そういうことまでも自分ひとりだけではなく、友達との付き合いの中で、そして、その友達のことを見ながら自分も勉強し、身に付けていくことを意味している。これらのことで友達を見ながら人々に向けての謙虚さまで学ぶ「自己開発」の良い機会になると考えている。

例えば、自分の場合も実際、大学に入学してから、少しずつ人間関係に対してのことを一生懸命励んでいる。まず、自分の身体を良く管理している友達を見ながらどうやって管理するのかについて聞いたり、どのような生活を行っているのかについても聞きながら自分も飲食の調節や運動をしながら健康とか痩せることなどを行っている。しかし、前者のような「スタイル」面以外にも、常に、勉強のやり方や授業でのやり方などを他の友達を見ながら自分の勉強の仕方も身に付けている。それに加えて、様々な友達との学校生活の中で、友達なりの人の接するやり方を見ながら相手に対する気持ちを理解する、「配慮」する姿勢まで身に着くように頑張っている。

次は、人を助け合うことでの人間関係のなかで「自分の生きがい」が生じるからである。普段からの私は周りの人々だけ人間関係を厚くすることが自分にとって「生きがい」であると思っていたのである。しかし、幼い頃、教会に通いながら、海外ボランティアや高齢者福祉関係、練炭配達等といった様々なボランティア活動に参加し、大切なことを気づいたのである。それは、このようなボランティアに参加しながら困っている人々への助けになったことで、人間関係を厚くすることにおいて生じるやりがいまで感じたのである。より具体的に説明すると、ボ

ランティアをしながら人々を助けた後の嬉しさや「ありがとう」という言葉を聞いた時、まるで、対価を望んでいないままやっているボランティアなのに対価をもらったような気持ちになれることを意味する。自分はこのようなことを気づいた後、その人間関係をよりうまく行ったことで生じたやりがいまでも含めて「生きがい」であると定義している。それに加えて、自分はこれからも多くのボランティア活動に参加することで、人々に対する「生きがい」を多く満喫したいと思う。

したがって、「より良い人間関係」という言葉は自分自身の自己管理や自己開発だけではなく、自分自身以外の人々との円満なやりとりの中で一緒に前に進むことまでも含めていると考えている。つまり、これから学校生活で行うサークル活動、様々なボランティアなどの人々とのやり取りに一生懸命励むことで社会から役に立つ人、より助け合いのわかる人になりたいと思う。そして、自分の4年間の大学生活は充実さに満ち溢れるようにさせたいと思う。

次は、自分がこの夏休みをきっかけとして、王様文庫図書の本である「時間忘れるほど面白い！人間心理の不思議」を読んだ感想について書く。最初に、私がこの本を選んだ理由に関して話したいと思う。まず、私の中間レポートを参考すると全体的な内容としては「人間関係」がキーワードである。その「人間関係」をよりうまく行うためには人間の心理も重要なことだと考える。なぜかという、相手の心をよく理解するなど、人と人との関係の中ではその「心理」がよく作用すると思うからである。そして、その「心理」をうまく使えば、人間関係を作るときに状況対応がしやすくなると思うからである。この本を選んだ次の理由としては、すべてのものを「心理学」として解説している点である。「人間関係」を形成することにおいて、すべての状況や場合を心理学の用語で説明していることが魅力的な点だと思ったからである。そして、その事例を挙げて説明していることも読む立場である私にとって読みやすい構成になっている点も素晴らしい部分だと思う。

この本は全体的に「人間関係」を「心理的」な視点で話を展開している本である。また本の構成はパート別に短く分けられている形式の「オムニバス形式」である。（オムニバスとは一つのテーマを中心に幾つかの短い話を前後考慮せず、繋いだ形式を意味する）例えば、「人間関係」がこの本のテーマである場合、その「人間関係」を基に生じる幾つかの短い話をする「パート」で分けられて「ストーリー」を続ける。（恋愛問題、家族問題、職場や学校での問題など）この形式は様々な場合、もしくは状況を興味深く展開する長所を持っている。その構成を基にして私はこの本を読みながら印象が残った部分（パート）を幾つか紹介したいと思う。

まず、「相手にホンネ（本音）を言わせる心理テクニック」のパートである。このパートを選んだ理由は、普段から、相手の本当の心を理解することはすごく難しい。しかし、人間関係に関してのお互いのホンネ（本音）を話し合うことができる人こそが円満な人間関係を作ることができると思ったからである。この本で紹介されている「相手のホンネ」を言わせる方法は「あなたはどう思う？」のような「相手」のことを直接に話すことではなく、他人に投影させた形で質問をする方法が効果的であると述べている。このようなテクニックを心理学では「コントロールクエスチョン」と述べられている。

次のパートは、「苦手な相手との交渉は行きつけの店で」を紹介したいと思う。（行きつけの店は自分がよく行ってるお店のことを意味する）自分が会っている人々との人間関係において、相手と自分の心がうまく合う人がある。しかし、その人々の全員が自分と合う確率は非常に低いと書いてある。その「自分と意見があってない人」つまり、「自分がうまくコントロールできない（苦手）人」をうまく合うようにする方法も重要だと思う。その理由としては、自分が相手に説得することは相手との共感を及ぼす重要なカテゴリーであり、いずれかの時において自分の見方になれると思ったからである。その方法としては、この本は相手を自分のプレイス（place）で交渉を行うことである。その方法を心理学では「ホームグラウンド効果」と述べている。この「ホームグラウンド効果」の良いところは自分が安心できる場所で話をすることである。自分の気持ちがよく落ち着いていれば、相手との話合いについての論理的な発言が

可能である研究結果をもとにしているからである。

このように、この本はある状況における対応方法がある根拠を挙げてよく述べられている。そして、その心理学用語をより理解しやすく説明している点も素晴らしいと思う。私もいずれかの家族や恋愛、などの様々な「人間関係」における心理テクニックを身に着けたいと思う。それで、どのような場合でも、どのような人間のグループでもよく「馴染む」人になりたいと考えている。

したがって、自分がこのレポートで話したいことは「人間関係」ということに対して、私はどうやって行動すべきであり、相手のことをどうやって理解しながら接しあうべきか。そして、その人々に対する「心理」というものを勉強し、自分との関係はどう進むべきかについてのことが書いてある。その中でも、私が話したいことは「人間関係」をうまく行うことで自分にはどのような影響を及ぼすかを話している。より力になり、お互いのモチベーションが向上するなどの影響で自分のことを変える「自己発展」、誰かを助けながら（ボランティア活動を行いながら）生じる「いきがい」などの影響を受けて、自分のことをより人々に対しての謙虚さや礼儀を持ちたいと思う。それに加えて、真剣に前に進める人として成長したいと考えている。

将来のための大学4年計画

人生の課題について、大学で実現したいこと

日本に来る前のこと

私は大学に通う四年間をかけて、自分に対する人間関係をうまくする方法を身に付けたい。

私は中国にいた時、専門学校に通った三年間は勉強せず、遊んでばかりで卒業を迎えた。さらに高度な教育を受けたことはなく、あまり得意なことや自慢できる技能などもないままに就職した。その時自分にとって唯一の得意技は人間関係が良かったことである。しかし、会社に入ってから、自分よりかなり年上の人と一緒に仕事をしたので、その人達との年齢の溝かつ経験や思想などの差に段々気づいて、自分の弱さを感じられるようになった。もちろん、人生の経験が多く、博学な先輩たちに知識や人間関係などの問題について積極的に質問をして、たくさんのアドバイスをもらったが、いくら他人の方法を真似してもうまくいかなかった。その時自分の頭の中に考えていること一つしかなかった。それは、自分はいかなる方法を使えば、先輩たちの様な高いコミュニケーション力を持つ人間関係の達人になれるか。どこまで成長したら、先輩達の様な魅力的かつ成熟な男になれるかということだった。自分もこの人達のように他人に愉快的な気持ちを与えながら魅力的な発言をしたい。この願望を持ち、先輩達から貴重なアドバイスをたくさん頂いた自分はたくさんの本を読み、方法を訪ねた。が、知識的面は乏しく、精神的面も大人のような成熟さはない自分はこの人たちの世界のことがわからなかった。また、先輩が教えてくれたアドバイスの中によく強調されているのが知識と人間関係の重要性である。私はこの二つのことを心の奥までおいて、将来の自分は必ず先輩達より強い人まで成長して見せることを誓った。私は、この願望を実現するため、今まで止まっている快適な環境から離れ、チャレンジのある環境に身を置き、各分野様々な知識や経験を身に付け、違う価値観を持つ人とどんどん出会いに行くことを決めた。そして金銭面かつ友人関係を考慮した上でその場所を日本に決めた。

日本に来て以来、自分の知らないことをたくさん知った。例えば、社交マナーの正しい使い方や自分を助けた人に感謝の気持ちを持つことの重要性など。それ以外にも、自分と違う性格、習慣、趣味、価値観を持つ人と付き合う場合、相手の気持ちを尊敬することなど。また、会話による各分野の知識の運用も頻繁に要求されていることも気づいた。学問分野の知識は頻繁になることというのは、例えば、相手との専攻分野の違いにより、話す内容も多様になることである。

私は日本に来て以来、この多元化の社会で生活し、様々な人と出会ったことにより、人間関係の面においてよく鍛錬できた。このお陰で自分の思想は以前より少し進化できたと思う。ただし、私は人間関係に関わることや様々な分野の知識の勉強はまだまだこれからだと思う。この度、せつかく大学で勉強する機会を手に入れたので、自分はまずこの大学の四年間をできるかぎり数多くの専門知識を少しアプローチしたいと思い、自分と違う価値観を持つ、違う専門分野の知識を勉強する人達との交流を積極的に行いたい。そのために私はまずコミュニケーション能力が必要とされている。さらに、今までの経験をまとめて、自分にとって、良い人間関係を作るために、コミュニケーション能力だけでなく、他にも、外的スキル、内的スキルなどという要素も不可欠だと思っている。以下、この3要素を詳しく説明する。

1—1 コミュニケーション

コミュニケーションとは、相手と繋がるための第一歩であると思っている。なぜなら、自分と相手との会話が始まって、互いに自分のことを言ってあげて、情報交換をすることで、互いの印象が形成される。つまり、コミュニケーションにより、私はこの人のことを知っているという記憶が脳に存在しているので、これから、様々な展開が始まると思っているからである。

コミュニケーションについて、他人から知識やいろんなアイデアなどをもらえる、また、お互い助け合ったりすることにより、互酬性をよく理解できる様になると私が考えている。例えば、まず、私は他人との会話中で、まずお互いの基本情報が知り、そして、自ら相手にどんな助けを差し上げるのかを考えて、相手が求める場合に積極的に提供し、一緒に行動するうちに、他人のいいところを勉強できると考える。さらに、愉快的な会話が進まればお互いに喜ばせることができると思う。大学生活で、この様な関係を一杯作れば、過ごしやすく、ともに成長できると思う。しかし、気を配らなければならないことは互いに尊敬し合い気持ちを持ち、対等関係になることだと私が思っている。

自分にとって、コミュニケーションは相手の世界の門を開くための不可欠な鍵だと思う。なぜなら、人と繋げるために相手を見たままではなく、口を開かないと互いに感情を乗せて、気持ちやメッセージなどを交換することはできないと思うからだ。よって、コミュニケーションは良い人間関係を作るための大前提だと思っている。もちろん、相手との繋がりが重要であるが、良い関係になるために、様々なスキルも必要であると思っている。

1—2 外的スキル

外的スキルとは、相手と交流するとき、相手に良い印象を残すために必要な会話スキルである。つまり、俺は変な奴じゃねえー、ただお前と友達になりたいだけだ、ということはどうやって相手に伝えるかのことである(笑)。

方法や、スキルなど、歴史上に様々な交流の達人が自分の経験や理論など山ほど残っているので、この人たちの本を読んで、自分のニーズに合わせて、ふさわしいアイデアやアドバイスなどを集めて作れば良いと思う。後は積極的に試錯しに行くことだと私が思っている。私は具体的にはどんなスキルがあるのかを知るため、アメリカの作家で教師にして、自己啓発、セールス、企業トレーニング、スピーチおよび対人スキルに関する各種コースの開発者であるD・カーネギーが著した『人を動かす』を真面目に読もうと決めた。

まず、私はなぜこの本を選んだのかというと、本の中に述べられているコミュニケーションのスキルは、私が今、自身に存在する問題を改善に導けると信じているからである。一方、社交学の父と呼ばれる人物が著した本はどれほどの価値があるのかも知りたいからである。

本の内容では、様々な道理や対人スキルなどが述べられている。例えば人に愉快的な気持ちをもたらすコツやいい印象を与えることなどについてだ。さらに構成を見ると、本は四つの部分に分けられ、また各部分には幾つかの原則に分けられる。中の一つ一つの原則は、最初物語の形式で、道理を導き、また、少しの人間性の話にも含まれる。すごく読みやすいし、良い自己啓発の読み物であると思っている。

私にとって、この本の中に一番勉強に当たる原則は三つあった。一つ目は「ひとの立場に身を置く」。普段この一言を聞けば、普通や当然のことだ。などの感想が出てくるかもしれないが、深く考えてみれば、これはかなり難しいものだと思ふ。そこで、筆者の考えについて、「この原則をうまく運用するために、まず、話す相手が今どんな気分かを考えないといけない、人は誰でも自分と関係あることに興味を持つ、だから、相手に良い印象を与えるため、まず相手のことを考える」と筆者がこういう風書いている。私はこの原則に関わる内容を読んだ後、この一言の難しさをはっきり感じられた。なぜなら、人は他人のことより自分のことのほうにもっと注意を配る人間性がある。これを変えて、自分のことより他人のことにもっと気を配ろうと試してみればかなり難しくなるからだ。それは今の自分ができないことであり、これから人と交流する上で気付かなければならないことだと思つた。

二つ目は「名前を覚える」である。筆者が「初対面の人に必ず相手の基本情報を聞く」と書いている。確かに、日常の中、誰かと仲良くなりたいと思っている時、相手の名前さえ覚えないと仲良くなれない。相手の職、趣味、名前などを聞き、会話する時も相手に対して好きな話をし、愉快的な雰囲気を作る。この原則に関して、まず、私は、人との繋がりを作るためにコミュニケーション能力が必要であることのように、相手のことを知るために相手の名前をまず覚えなければならぬということだと思つている。そして、一つ目の原則を含めば、相手はいい気分なるかもしれない。自分は今までこのようなことに全然気づいてなかった。相手に良い気分をさせるため、このスキルを覚えるのが良いと考えた

三つ目は「顔を潰さない」筆者が「自分の気持ちを通すために、他人の感情を踏みにじっていく。相手の自尊心などは全く考えないなどのことはだめだ」と書いている。確かに人は、誰でも面子がある。相手が尊敬されている感覚を与えるためにこの原則を覚えなければならぬと思ふ。もちろん自分は全然できていない。例えば、授業中で自分は偉そうに馬鹿正直で相手の言うことを批判したい放題に批判し、よく相手に悪い気分をもたらした。この点は自分の一番慚愧に絶えないことである。

もちろん本の中の金言はそれだけではない、自分は大学の四年間をかけて、この本の中に述べられている原則を身につけるまで、頑張りたい。そのために、これからは、まず以上の三点について行動したい。まとめると外的なスキルというのはコミュニケーションの相手と関係し、自分の感情を大事にするより、まず相手のことを考えることである。誰でも、嫌なやつと友になりたくないだろう。外的スキルを勉強するのは、相手とどう仲良くなるのかを検討するためではないかと自分はそう考えている。

最後この本を読んで、今まで知っていないコミュニケーションのスキルを学べた。相手とコミュニケーションをするなら、まず相手の気持ちを考えなければならない。そして、相手の気持ちを考えようとしたらどうすれば良いのかは、いきなりヒントが来ないかもしれないが、この本の中に書いている原則を読んだ後、コミュニケーションをするとき少し相手の気持ちを考えるようになった。

1—3 内的スキル

相手とコミュニケーションする場合愉快的な雰囲気を作るなどの外的スキルとは違い内的スキルとは相手のことを主に考えることではなく、自分のことについて、よく考えることだと私が思う。私が主に3つのことについて考えている。

1. 自学
2. 感情のコントロール
3. 反省

1. 1—3—1 自学について

自学というのは、簡単で、自ら知識を望んで、積極的に好奇心を持ち、色んな知識を勉強することである。

最初、日本に来た時の感想を紹介した通り、違う価値観、違う分野で勉強している人と会話をする時、自分の知らないことが段々出てくる様に、知識もそうです。例えば、国際学部に所属している友人と会話するとき感じたのは、相手の視野が私よりかなり広いであること。私は相手と少子化問題をめぐって弁論するとき、私はいつも中国の現状を言っている、相手は私と違い、いつも世界を背景としてこの問題を論じている。このような普段ごく普通の会話中に私は相手との差を感じた。共に気づいたのは、様々な知識を勉強する重要性のことだ。このような会話をいつもするので、私は段々相手と会話した後、知らないことを分かるようにするため、相手が言った観点を自分でもう一度分析することをやっている。相手から勉強した知識を自分で、もっと詳しく調べる。この様に、一つ一つ勉強し、長い時間をかければ、自分の知識面を広げられる。

「どの分野の知識も繋がっている」といのは、前の専門学校の先生がよく教えてくれた一言である。たとえ、自分が一番研究したい分野の知識が一つしかないとしても、他の分野の知識の勉強について、使える場合はないとは言えない。コミュニケーションする際に、相手が喋ることが少しわかり、もっと聞きたくなると会話は愉快に続けるかもしれない。つまり、単一方に相手から知識を勉強するだけでは足りないのので、自ら勉強することも重要だと私が思っている。

1—3—2 感情のコントロールについて

感情のコントロールとは、意味はそのまま、自分の感情をコントロールすることである。今日、自分はどんな気分で学校に行くのかのように、知らない人と話しかける場合、喜んで話しかけたいとか、面倒臭いと考えているのかは、どんな気持ちでそれをするのかは自分で決めよ！ということだ。敏感な人であれば、よく周りの人から影響を受け、自分の感情は簡単に変化させられる。そうすると、もし良い気分であれば、1日も楽しんで過ごせるし、もし、悪い気分であれば、この気分はいつまで解消できるのかは、わからない。だから、逆に考えようよということだ。自分の感情の変化は色々な要因に左右される、要因というのは他人からの影響や自分はどんな気分になりたいのかなどのようなものである。例えば陰気な顔で、不愉快な気分を持つ人と会話するのはどうだろうか、私は嫌である。逆に考えると自分がそんなそふりをすれば、相手も嫌だろうと思う。この

ように道理が分かるから、積極的に生活したいという意識をもち自分の気持ちは自分でコントロールということは重要なことだ。

決して簡単なことではないと思うが、もし身につけられると自分の気持ちは自分で決めるようになると私は思っている。

1-3-3 反省について

自分はこの1日で何をした、良いこと悪いことを思い出して、自分を分析する。また一ヶ月、半年を経て自分はどの変化が起きたのかを分析する。さらに反省によって自分の価値を考えるとや自分の欠点を自己認識する事などのことが私にとっての反省だと思う。例えば、自分の欠点は、無神経、共感力が低いということだ。知識面も足りないと思う。EQもかなり低い。自分の感情をコントロールする能力も低いなど、たくさんある。それが原因で、自分はよく最初に会った人に悪いイメージを与える気がする。自分は欠点だけである。自分は一体どんな価値があるのだろうか。以上の様なことは反省によって自己分析をする。相手と仲良くしたいなら、まず自分はどんな人かを分析し、自分の情報を把握しないといけないと思っている。

内的スキルと言うのは、以上の3点をうまく行うために必要な方法やスキルなどだと思う。また本を読んで自分が良いと思う部分を取るか、教授の様な偉い人からアドバイスをもらうか、方法はたくさんある。どの様な方法がいいと思うのか自分次第でやれば良いと私が考えている。せめて、私は以上書いている二つの方法をやっている。

まとめ

人間関係というのは経済学のように莫大な知識体系がある。私の価値観では人間関係は、まず、人と会話するから始まるコミュニケーション。そして、相手のことを考える外的スキル。さらに、自分を分析する内的スキル。からなるものだと私が思う。

最後、何故私が人間関係にそんなに重要視しているかについて言いたい。ひとつめの理由として、大学で何をするやどんなことを勉強するなどについて、人と交流する場合は必ずある。二つ目の理由として、自分は開放型人格なので、人とコミュニケーションすることが大好き。どの分野でも、人の表現力、交渉力、対応力が要求されていると私が思う。人間関係によって、この三つの能力を鍛錬できると私が思う。三つの理由として、私は大学四年間をかけて、多くの人々と話し合い、もっと自分の価値観と違う人とコミュニケーションしたい、人とコミュニケーションすることによって、自分が以上のように述べているスキルを注意して鍛錬したいと思う。

私は具体的にどうするのかについて、まず入学したから今までの一年間の大学生活の中にゼミ発表やチームワークなどを経験した、このようなチーム作業をするうちに、人とコミュニケーションするチャンスは、私が大学に入る前より、かなり増えた。これから二年生になったら、このようなコミュニケーションするチャンスはもっと増えると思う。だから私はこのチャンスを利用して、今までまとめたスキルをやってみたい。人と愉快的な気分でコミュニケーションできるようにがんばりたい。

そして、大学では社会に貢献した偉大な方が多くいるので、わたしはこの人達とのコミュニケーションも積極的に行いたいと思っている、そのうちに私は自分のスキルを検証しながら、またたくさんのアドバイスをもらえるとと思っている、これからの大学生活で、もっといい人間関係を作りたい。

参考文献

著者 D・カーネギー 訳者 山口 博「人を動かす」文庫版2018-5-20 第一版第十二刷発行

Alfred Adler 「Understanding Human Nature」1998-05-01 北京理工大学出版社(中国語版)

日本語授業の感想

入学から今まで、日本語授業で様々なことを勉強できた。具体的に言えば、日本語授業を取って、良かったと思った点は3つある。日本語以外、先生に感謝することは2つ、不満足な点は2つある。

まず良かったと思った点について、一つ、日本語学校の授業と比べて見れば、大学の日本語授業の方が有意義と私は思っている。理由として、大学の日本語授業では、普段、我々が勉強している、日常会話でよく使う日本語より、もっと専門的な日本語を勉強した、例えば外来語。二つ、授業で、メンバーたちのそれぞれの計画文を読みながら、互いに意見や設問などを交換した、そのおかげで、私は自分の日本語の表現力は以前より上手くできた。三つ、私は好奇心の強い人なので、授業中でよく喋り、先生に質問している。毎回先生の答えを聞いて、反省することより、私は自分の日本語や学問的な貧弱さをよく分かった。このおかげで、私はほぼ毎日モチベーションが高まっている。

そして、日本語以外、私は勉強したことについて、一つ、日本語の専門家、また、博士の2名の先生方にたくさんのことを勉強した、例えば、日本語の超達人になるため日本語の勉強法を勝部先生に教わった。一方、私は長坂先生とよく弁論したことで、長坂先生の問題を把握するスキルや、問題分析のロジテックを勉強した。二つ、互いの文を分析して意見を交換する授業で、先生は私の発言を聞いて、全体的に評価してくれた時、私は先生の話聞いて、自分の元々の過激的な言い方を完全でき、柔軟な話し方を習得できた。長坂先生の授業で、私はチームワークの難しさと複雑性を十分味わって、メンバー間の調和法を勉強できた。

さらに、不満足な点について、一つ、クラス交換発表のような作業は面白かったと思う、

しかし、交換発表の数が少ないだと思ったので、ちょっと増やせて欲しい。二つ、私たちは外国人なので、日本語は上達とわ言えないと思っている。話しているときよく言葉遣いが間違っている。過ごし訂正して頂ければ有り難く、思っておる。全てではなくでもいいであるが、皆さんよく間違った言葉遣いを訂正して欲しい。

最後、先生方達に感謝する、二回生の日本語授業を楽しく期待しておる。

子供は我々の希望

——難民を支援すること

ショウテンウ

● 将来やりたいこと

私の将来の夢は中東地域、あるいはヨーロッパに行って、難民を支援する事です。この夢を達成するために、大学四年間の中で、必要な知識や技術を身に付けたいです。具体的なことは以下で説明します。

● やりたいことのきっかけ

難民を支援したいと思ったきっかけは二、三年前、テレビでとても驚いた一件のニュースを観たことです。ニュースの内容はシリアの3歳子供アイラン君が家族と一緒に戦火から逃（のが）れるため、ギリシアまで密入国するとつもりでしたが、乗った難民船が途中で沈黙し、彼の遺体が海岸に打ち上げられました。事件の後、調査により、アイラン君を含む12名の人が死亡したと報道されました。しかも、中の5名はまだアイラン君みたいな幼い子供でした。この悲惨な事は世界にクローズアップされて、本当にショックを受けました。難民船と言っても、実は違法で、密入国のある手段です。現在のシリアでは激化する空爆で街は破壊され、多くの地域が政府軍や反体制派に包囲されて住民が閉じ込められています。水や電気の供給も制限され、人口の半数以上が厳しい貧困にあえいでいます。多くの子どもたちは学校に通えず、悲惨な光景を目にしたり家族を亡くすなどの過酷な経験をし、心の傷や健康の問題を抱えています。食糧と物資の不足も深刻で、幼い子どもが飢えて亡くなるなど危機的な状況です。このような状況を見ると、私は心から彼らを助けたくなりました。

なぜ子供を支援するのか

まず、私は子どもが好きなので、この世の中で、一番純粹な、まだ何も体験したことがない子供が、何も知らないまま亡くなるのは非常に悲しいや不公平だと思っています。

次、彼らは生まれた後、正真正銘の教育を受ける機会がないので、自分なりの意思がなくて、ずっとおもちゃみたいに左右され、親に従って、生きていきます。論理学でいうと、人はあらかじめ自分の行為に死の危険があることを知っているならば、最後は70~80%がこの行為をやめてしまいます。もしちゃんとした教育があれば、自分の意思を持っている限り、大人になった後、かならずこういうリスク高い船に乗らないでしょう。だから、今亡くなった子供はもうどうにもならないですが、でも教えられる子供たちに知識とかを教えることができるなら、彼らは大人になった後、危険を分析能力も持つことが予想できるし、ちゃんと自己意識を持っていて、また自分の子供や他人にこういう行動が潜んでいるリスクも教えられます。こう見れば、密入国で亡くなる人数も減るでしょう。従い、知識を受けることが難しい大人に対して、直接子供に教えてみると、もっと効くと思います。今は子供を支援して、効果はそんなに顕著ではないかもしれないですが、しかし。子供は必ずある日大人、子供をもつ親になるから、その時、子供の時で教育を受けたメリットも出てくるでしょう。

● 何の手段で支援するのか、または理由

私は子供が独立の思考方法がないからとあって、いまの考えは主に子供向けの教育支援で、その地域の教育が不足だと思っているので、芸術や言語を教えてあげたいで

す。

なぜこの二つのことかということ、まず私は小さい頃からずっと絵を描いており、しかもいちょう美術大学に合格したんで、以前も絵画クラスのサポート役として、生徒を教えた経験があります。しかも、専門家によると、「絵描は絵が上達するだけでなく、子どもの成長にさまざまなメリットがあります。絵描は、子どもが生まれてはじめて挑戦する、創造性を伴った自己表現で、子どもたちは、自分の限られた言葉では表現しきれない想いを、絵描をとおして伝えます。創造力や発想力は、絵描と共に養われていきます。さらに、絵を描くということは自分自身の内面と向き合うことだといえます。自分の本当の感情に触れたり、心にたまっていた感情をすべて吐き出したことで心の安定がもたらされます。」それは子供にとって、大切なポイントだと思います。

二つ目は言語です、これも私が大学4年間で主に勉強したいものです。彼らが母語を十分に使えるようになった後、英語などの第二言語も教えてあげたいです。中国人の英語は常にアジアの他国の人に上手だと思われてる理由は、中国の場合、小学校さらに幼稚園の時から英語の教育はもう始まっているからです。つまり、このような時期は言語の養成に役に立つということです。なぜ言語を教えたいかということ、この世界ではコミュニケーション能力がなければ、生きることすらできないからです。英語は世界共通語として、とても重要だと思います。私が今アルバイトしているところも欧米の客が多くて、時々わからない言葉があって、だから、まずは英語を身につけることを決心しました。彼らとコミュニケーションする時、英語以外の言語も使っている率が高いと予想します。インターネットで調べたところ、中東地域で使っている言語がほとんどアラビア語だったので、時間や精力が余ったら、アラビア語の勉強も大切だと思います。一人一人はかならずしも英語を喋れるわけではないです。また、一人でこんなことをやるのはもちろん大変なので、自分と同じ考えを持って人を見つけて、団体的にやろうと思っています。関学にも難民に関するサークルがあって、一度調べてみたいです。

- 母国は難民支援することに対する状況

振り返ると、自分の国、中国は人口が本当に多くて、又途上開発している状態で、貧困な人もかなりいます。政府側は難民に力をあまり注いでおらず、代わりに形式的で資源支援しか行ってないようです。ほとんど現場支援を行っているのが民間的な組織 NGO や NPO で、自分はやはり実際的にやろうと、もっと当地のことを知ることができて、私はそう思います。

- 日本の場合

日本はアジア初の元国連難民高等弁務官緒方貞子さんをはじめ、難民教育基金さらに日本で大きな難民を支援する組織日本 UNHCR 協会（国連難民高等弁務官事務所の日本での公式支援窓口）が設立されて、今でもいろんな現場支援をやっています。夏休みの時、緒方貞子一現場支援の現場からという本を読みました。なぜこの本を選ぶか、理由は私も将来現場支援やりたいので、この本から実際に現場が起きていること、とかたくさん学べると思うので、選びました。

- やりたいことのため、読んだ本

この本は緒方さんが難民高等弁務官に就任している際に、活動したことを記録したものです。まずは、早々に緒方さんのことを紹介します。

緒方貞子さん、90歳、彼女は“小さな巨人”と称えられ、彼女の行動力と決断力が、今も世界の尊敬を集めています。1991年から10年に渡って国連の難民救

済機関 UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のトップを務め、“戦争が生み出した弱者”である難民を救うため、世界を駆け回りました。ある時は防弾チョッキを身につけて紛争地に自ら足を運ぶなど、徹底した現場主義を貫いた緒方さんは難民一人一人の声に耳を傾け、一人でも多くの命を救うために、前例にとられない決断を次々と下していきました。彼女自身も宗教の差別を気にせずで、自分は日本人と意識せずに、宗教が違う人たちに支援してます。人道支援の歴史を変えたとも言われる、大胆かつ勇気ある行動と決断力がある人です。

9 この本を読んだ後、一番印象強いのは緒方貞子さんが国連難民高等弁務官に就任した後、トルコに入国拒否されたイラク北部のクルド人を支援したことです。

実は、緒方さんが就任するまでに、国連難民署が支援した対象は国境を越えた避難民で、つまり我々が呼んでる難民です。しかし、こうすれば、たとえ何万人、何億人の難民を支援しても、根本的な問題は解決できません。国内避難民（国境を越えない避難民）は相変わらずどんどん増えてきます。だから、緒方さんも国境を越えたら支援する、国境を越えないなら支援しない、ということでは目の前のクルド問題は解決できませんという発言をしました。これは歴史上誰でもやったことないので、しかも一人の女はそんなインパクトのある発言をするのは本当に尊敬しています。

緒方さんの発言は国連で議論を重ねた結果、難民署は国内避難民（国境を越えない避難民）にも支援を行うという大きな方針転換を行いました。これは歴史上大きな決断だと思う。また、緒方さんを代表する国連難民署は国連の他機関と協力して、国内避難民のコミュニティを政治的・経済的により良くする、さらに難民の発生を防止するという、本来は難民署の仕事ではなかった領域にも踏み込むことになりました。私はこの前代未聞な決断は難民を支援することに大きな役割を果たしたと思います。

● 本を読んだ後の考え

私も問題を解決するときは表面的な問題だけではなくて、根源を改善すべきだと思います。他国にいる難民をどんな支援しても、元の国にいる国内難民の数を減らすことはできなくて、人の生育により、数はあんまり変わらないです。まずは国内避難民を支援して、根源の問題を改善して初めて、難民の増加を抑えることができると思います。だから、将来は難民が生える場所に行きたいですが、例えばナイジェリアなどのより安全な国家です。シリア、イラクとか戦争まだ続いていて、不安定の国はやはりあとに回します。

● 自分がやりたいことについて もっと詳しく説明する

たくさんの人は多分知らないと思いますが、日本はすでに難民を受け入れることになりました。だが、今はまだ留学生として、受け入れています。2017年の中に、日本政府はシリアからの150名の難民を学生の形で、受け入れました。あまり多いとは言えませんが、他の国と比べて、いい始めだと思います。そして、国連活動が積極的に行っている関西学院大学も2006年に「難民」学生向けの入学制度を開設し、さらに去年まで計17名の難民学生を受け入れて、学費や授業料を全額免除して、彼らの必要の生活費を負担して、身につけなくてはならない知識を教えました。さらに、関学で独特なフィールドワーク項目があり、直接外国の現場の生活を触れることができ、私も参加したいと考えています。二年生になったら、国際政策学科に入るので、国際社会に関わってる授業を積極的に取りたいです。一応難民を支援する第一歩になり、将来にも役立つと思います。こういうたくさんの点において、やはり日本は中国より随分前に進んでいるので、この国のこの大学に来ました。ですから、今難民を支援している人のように、自分の力を貢献し、一回でもいいですが、ボランティアとし

て、難民を助けたいです。また、難民支援する現場では、必ず1つの支援するグループだけではなくて、世界各地からたくさんのボランティアが集まって、彼らは当地の食物とテントをいっぱい使って、避難を受けた人は食べるものが足りなくて、住むところがないという状況も予想すると思います。それは逆に迷惑をかけましたと思うので、もし将来海外の現場に行ったら、それは一番考えなければならないことであると思います。しかも、海外の現場は都市とは違って、宗教の違いまたは伝染病が流行っているかもしれないので、確かに他人を助けるために、行きますが、自分の命と安全を第一にするべきであると思います。

以上のように、私が大学の4年間でやりたいことはまず言語を勉強することで、子供向けの支援なので、時間が許す限り、子供とどうやって付き合うことについての本、または難民を支援する書籍など読みたいと思います。また、インターネットで現在の状況を常に調べるべきだと思います。野望ですが、生きてるうちに、難民がないの世界を見たいです。これからも、頑張らなければならないです。

4653字

- 参考文献

平野友紀子 「絵の上達だけじゃない！お絵かきのメリットとは？」 2016.6.28

集英社新書 緒方貞子—難民支援の現場から 2003.6

授業感想

少人数のクラス、誰でも自分の考え方や意見を言えるようになりました。高校の時、私は本当に一言も喋らない人なので、たとえ自分の意見があっても、先生に呼ばれるまで、自分から言わないです。日本語のクラスで、どんどん自分から言うようになりました。会話力も昔より、上がっていました。また、クラスメートと交流する上で、一度社会に出た友達はことに対する考え方は本当に大人っぽくて、初めて自分が足りないところを知りました。大学はまだ始まりなので、残りの3年間、立派な大人になるため、頑張ります。

良い年を――

これからの私

シンヤンジュ

私が4年間の大学生活でやりたいことは今ここに住んでいる日本について知ることである。先になぜ日本について知りたいかに対する問いに答えをすれば韓国と日本は遠くも近い国であり、歴史的にも地理的にも離れられない関係だと思っているからだ。その国の文化をよく理解するためには、その国の言葉勉強するのは欠かせない部分だと思う。そのため4年間の大学生活でできるだけたくさん日本語の本を読みたい。また言葉が文化を表す表現の手段としたら食べ物はその国を代表する象徴の表し方だと思う。食べ物は単に食べること以上の意味がある。それなりの価値、特色、含まれている意味、物語があるからだ。

これが私の一番大きな目標である。その国の言語でかいてある本を読むとその国の文化をもっとよく理解することができると思う。単に言語を学ぶことにだけ留まらず、その言語を通じて、歴史、文学、地理、科学、食べ物、美術、ジャンルを問わず社会全般に関することを読みたい。実際に多くの人たちと出会って直接的経験をするのも良いのだが、本を通じて間接的な経験をするのも一つの方法で本は本なりの価値があり文章で出会うのも一つの醍醐味だと思う。総合政策学部の特性上、さまざまな分野の勉強をするので多様な分野の本を読むことは、将来の私にも確かに役立つだろう。それによって豊かな日本語の表現力を身に付けられる。その中で私は日本の文学作品に関心がある。川端康成の「雪国」を韓国語で読んでからこの本を日本語で読みたいと思って日本語に興味を持ちようになり、それがきっかけで日本語の勉強をはじめた。「雪国」の初文章は名文章として知られている。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」という文章は日本語が持っている独特な韻律が目立つ作品だと思う。読み手にとってはまるで小説の主人公と同じように長いトンネルを抜け出した感じがした。そのような高いレベルの表現力を身に付けたい。日本語の表現力を学びたいのはこれからの4年間の大学生活に役立つと思うからだ。大学で求められる一定以上のレベルを身に付けるためには様々な分野の本を読むことが役に立つだろう。

本を選んだ理由

まず、この本について紹介する前に、この本を選んだ理由について話したい。

日本語をどのように勉強すればよいかを考えた後に探して選んだ本である。本を読む前には単純に日本語の勉強に役立つかと思って読み始めた。

本のタイトルに書かれている通り「やさしい日本語は何を目指す」かが気になり、気軽に読み始めたがところが思った通りではなかった。読んでいる間に気づいたのはこの本は外国人向けだけでなく、日本人に対しても勉強になれる本だと思った。

最初に読んだ後は簡単どころか、難しい本だという気がした。読んでいる間はぜひぶん勉強になったが、軽く読む本ではない。この本はただ日本語教育に関することではない。今、日本では外国人労働者に対する処遇問題が話題になっている。そういう問題を目にする。日本が直面している状況に基づいてこの本は役に立つだろう。

日本語がうまくできていない外国人労働者に対する日本語教育に力を入れるべき。これこそ真の多文化共生社会を作れる方法である。

本の内容

この本の構成は全部三つに分かれている。第1章は日本語の実態について、第2章は日本語の語彙、文法、文章の理解など、ことば使いのいろんなところについて書いている。最後の第3章は日本語について考える。特にこの第3章では、これから解くべき課題として日本語表記と表現について扱っている。

「やさしい日本語は何を目指すか」という本は多文化共生社会を実現するための本である。この本は外国人に対するどうすれば日本語教育。なぜ多文化共生社会を遂げるには日本語教育が必要とするのか。今日本の現実が反映されている。著者はこのような背景には現在、日本の社会状況によるものだと語っている。そこで、日本の政府は多文化共生の推進に関する研究会を設置し、“地域における多文化共生推進プラン”を策定した。各都道府県に地域特性に応じた指針や計画を促進する公文書を送った。それなら多文化共生というものはどのようなものか、この本では「国籍や民族などの異なる人々がお互いに文化的違いを認め、対等

な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」という定義する。なぜ日本政府は、このような文書を作成し、日本語教育に力を入れるのか、その理由は小子高齢化と生産年齢人口の減少にある。社会の現状に合わせた政府の指針である。こういう状況で外国人を受け入れるしかない。日本に住んでいる外国人の数はますます増えている。グローバル化が進んでいる時点で、外国人を受け入れる日本人は多文化共生のために先にすべきことはただの国語を学ぶことだ。これは私のような外国人にも当てはまる。この本は日本語の制約のある外国人を対象に作られた。外国人が日本語を母国語のような言葉を使えるように たくさんの工夫を凝らした。

著者は「やさしい日本語」は外国人のためだけではなく、日本人にもとても役立つ本だと言っている。この本の最後には日本語のバリアフリーについて書いている。耳や目が不自由な人に対することである。

例えばテレビ放送を見る時リモコンのボタンをおせば日本語字幕が表示して来ることがある。視覚や聴覚に障害がある人々に役に立つことを言う。

“耳できいてわかる日本語”がある。これは漢字を確認しなくても理解できる日本語ということであると書いている。確かに漢字の表記がないとわかりにくい場合がある。

まずこの本には外国語の学習に関することと情報伝達の目的がある。この本が書かれた理由として阪神淡路大災害の時、日本語を十分にわからない外国人に必要な情報を正確に伝えるため作られたのが印象的だった。

2011 年東日本大震災の原発事故による生死に関わる情報が外国人に伝わりにくかったという意見もこの本で語っている。2011 年に東日本大地震を契機に政府や地方自治体が「やさしい日本語」への関心も増えたのもある。多文化共生に向けた住みやすい地域社会を作るためには政府の支援は欠かせない部分だと考える。

外国人、特に非漢字の人が日本語を学ぶことに対する難しさについて述べている。例えば、市役所や区役所が提供する公的文書の内容は、非漢字圏である人には難しい。また、病院での診察を受ける時、専門用語の使用は外国人には特に理解しがたい問題である。外国人と外国人の中で生じる日本語能力の格差は単純に学習問題だけでなく社会格差にもつながられる。日本語がわからない外国人の再就職が大きな社会問題になったことも明らかである。“ことばの壁”を少しでも低くしようとする試みの一つがやさしい日本語であると著者は言っている。

日本語表記には黙字と点字がある。皆の理解しやすく列をあげる。これは本の内容の一部である。

「墨字の場合は太郎は、あの人のことを知らない。」

「点字の場合はたろーわ、あの ひとの ことを しらない。」という例がある。またこの章では文章をわかりやすく書く方法も整理されている。以下には本に書かれていることをいくつかを紹介する。

- 難しい言葉はわかりやすい言葉に変える。
- 常と語（ある場面にいつも決まって使われる言葉）はそのまま用いる。
- カタカナや英語はひらがなでルビを振る。
- わかちがきにする。というなどなどがある。

感想

私がこの本を選んだことについて話したいと思う。選んだ理由は2つがある。1つ目は今、日本に来てから半年くらい過ぎたがなかなか日本語が伸びてない状態である。なぜ実力が伸びてないのかを真面目に考える必要があると思った。身で直接感じる言語の壁は実に高い。これが単に言葉の壁なのか文化の障壁なのかは、これからの自分自身にかかっている。

2つ目は私は外国人として、また現在日本の大学に通っている留学生として日本語はどのようなものなのか、一国の言語を学ぶことは単にコミュニケーションの手段としての役割をしているのかに対する問いに始めた。

一応、私はその国の言語表現には文化も含まれていると思う。

この本を読んで印象的だったのは「やさしい日本語」を作ったきっかけである。日本は自然災害が絶えずに起こる。この自然災害の時、日本語がうまくできない外国人のために正しい情報を伝えるために作られたのは驚きだった。これは私だけでなく、日本に住んでいる全ての外国人に当たるものだろう。このような支援こ

そ真の多文化共生社会を作れる。政府が先立ってそのような指針を作ることは本当に好ましい現象だと思っている。この本を読んで文章を書く時に伝えやすい、わかりやすい書く練習になるかもしれない。人は自分が知っている単語ほど世界を見えると思う。そういう意味で、私は自分の世界をもっと広げたい。

したかって私はこれから大学4年間でたくさんの日本語の本を読むつもりである。もちろん関連学科に関するのも良いと思っているが、その以外の分野にも触れたい。

結論

私は4年間の大学生活で一番大事なのは色々あると思っているが、これからの日本での生活を豊かに過ごせる秘訣は言葉使いだと思う。言葉が通じないと大学の生活だけでなく日本での就活にも影響を及ぼす。私は大学を卒業し大学院にも進学するつもりなので日本人のような言語能力が必要だと思っている。そのため最初に書いている通りにたくさんの本を読みたい。文字を読むだけでなくわたしなりの考えや感想を作りたい。

授業の感想

4月に入学してからあっという間に時間が過ぎて1年を終わる瞬間が来た。最初にレポートを書くときは何を書けば良いか分からなかったが周りの人々の声で最後はこのような形になった。

また、この授業を通じて、これから私がすべきことを真剣に考えるようになった。自分を繰り返すことと未来のことを考えるのはこれからの人生で大事だと思う。この授業で一番良かった点は交流授業だった。授業交流を通して他の人の考えを聞くのは成長につながることであり、とても勉強になったと思っている。

初めて発表するとき、私は心の自由のために、大学の4年間は各地へ旅行して、国際ボランティアになりたいことを書いた。しかし、心の自由の定義は人によって、いろいろな説明がある。今の私にとって、自分に満足させる答えを出ることが難しいと思う。ずっとこの抽象的なことを議論しても、哲学者の能力を持っていないから、意味がないと思う。成長につれて、必ず自分にとっての心の自由を理解するだろう。大学生活は1か月に過ごして、目標、計画の重要性も分かった。私の一番懐かしい時間は高校時代だ。ある目標のために、毎日頑張っている経験は素晴らしいと思う。高校時代の友たちと話して、大学と高校は全然違うことが分かった。みんなは合格するために勉強しているのではなく、人々は自分の目標があって、自分のスペースに従って夢を叶えるために、頑張っている。だから、今一番重要なのは、自分が何をしたいのかを探ることだ。

大学四年間でやりたいことを見つけたきっかけは『房思琪の初恋乐园』（林奕含）という本である。2016年に、筆者が自殺することがマスメディアを通じて、大きく話題になった。この本は事実に基づいて書かれている。彼女は中学生の時から7年を過ごして性的虐待を受けた。犯人は彼女が崇拝している塾の先生である。自尊心、家族の性に対する忌避、社会の性に対する偏見のために、性的虐待を受けることをずっと話していなかった。彼女はPTSD(心的外傷後ストレス障害)にかかって、ひどいうつ病、精神分裂症は彼女にずっと苦しめた。彼女は文学に対して興味を持っていて、台湾の有名な大学を合格した。でも、精神障害のために、3年生の時休学した。その時、よく解離症状が発生した。彼女の説明の通り、自分の魂は体が嫌いだから、体から離れる症状である。自分が何をするか、どこにいるかが全然分からない。これは彼女にとって、一番怖い思い出である。2016年、この小説を完成した後で、自殺した。

この本を読む前に、私は子供への性的虐待の問題をあまり知らなかった。しかしこの本の中でのある言葉は私の心にショックを与えた。「私はこの本を書くことだけができる。女性はダメージを受けた。読者はこの本を読むとき、女性はダメージを受けている。でも、犯人今も学者として社会に活躍している。」性的虐待のような人間性がない事件はどんどん起こる。しかし、私たちは子供を守れない。犯人は何の処罰もなく、元のように生活している。この社会はどうしてこのようなことを許しているのか。この本を読んだ後で、毎回私は子供の笑顔を見るたびに、この主人公を思い出すようになった。彼女の無力感、世界に裏切られた感じ、家族に対しての絶望を強く共感している。考えれば考えるほど何もできない自分を許すことができない。そして、私は子供が性的虐待を受けた後の支援と子供に対する性教育について仕事をしたいと思うに至った。

この目標を立った後、自分が性的虐待について何も知らない状態で、まず一冊の専門書を読むべきだと考えて、図書館で森田ゆり書いた『子供への性虐待』という本を借りた。性的虐待の現状、子供の心理、解決することの困難性、支援の方法をだいたい理解した。3~4人の中で1人の女性、5~6人の中で一人の男性は子供の時に様々な形式の性虐待を受けたことがある。このデータは思いがけなかった。子供に対して、もっと重要なのはなるべく早くに、話をしっかり聞いてくれる人である。しかし、先進国としての日本でも、この性虐待を受けた子供を支援する専門的な施設がない。中

国の場合は、身体的な虐待についての法律、専門家、福祉組織も足りず、この性に関する虐待を研究する人はあまりない。将来、私は啓蒙活動をし、発展途上国で性的虐待を受けた子供を支援する福祉施設を作りたいと思う。安心を過ごすことのできる場所を提供するだけでなく、身体的、心理的な支援も行いたい。この目標のために、まず大学の4年間では、この分野を研究したい。中国には福祉についての専門書が少ないから、留学の時間を利用して、たくさんの資料を探す。「福祉」という言葉を理解して、中国の現状に適する定義も考えている。都市政策の中には家庭福祉という分野がある。授業を通して、具体的な支援する方法、施設の取り組みを勉強することができる。三回生になったら、これに関係があるゼミに入って、発展途上国の子供に対する性教育を行うボランティア活動を参加したい。アジアと比べて、欧米はこの分野についての研究が早く行ったので、現状についてのデータ、専門書、性的虐待を受けた子供に支援を提供する専門家、施設がもっと多いと思う。そして、私今は欧米の大学院へ進学するために、言語、専門知識を勉強している。

私は夢を叶えるために、この夏休みにもっと専門書を読む必要だと思った。自分は虐待についての基礎知識が足りないと思ったので、専門的な入門書『子ども虐待』（西澤哲 講談社現代新書）を選んだ。この本は虐待の定義から、加害者としての親の心理、DVとの関係、性的虐待、トラウマ、アタッチメント、回復の方法を含めて、「虐待」の基礎知識、今国際社会の中で心理的な支援のやり方を紹介する。西澤さんはトラウマを受けた子どもの心理臨床活動を行って、PTSD（心的外傷後ストレス障害：命の安全が脅かされるような出来事によって強い精神的衝撃を受けることが原因で、著しい苦痛や、生活機能の障害をもたらしているストレス障害である）などの障害を説明し、トラウマ記憶から回復の方法を考える。

この本を読む前、私は「虐待」ということは「暴力」と同じ意味だと思っていた。「暴力」は体にけがをすることで、心理的なダメージなどを考えていなかった。でも、本の中で、「虐待とは子どもの存在あるいは子どもとの関係を利用して、本来の親子関係における子どもの欲求や要求ではなく、親が自分からの欲求や要求を満足させる行為である」と述べられている。この定義から、私はもう一度虐待のことを考える必要があると思った。体罰だけではなく、家庭内でよくある親からの激しく叱ること、子どもの心理的な発達を考えておらず、いつも否定的な評価を与えることも虐待だろう。本の中で、国際社会の子ども虐待についての分類を紹介した。身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、心理的虐待、社会からの注目もこの順で進んでいる。今の中国は第一段階も入っておらず、直接に性的虐待に手を付けることが今の段階では難しいと思う。性的虐待を受けた子どものための福祉施設より虐待全体に対しての支援する組織を作る実行性がもっと高いと考える。そして、私の目標は性的虐待から虐待全体を支援することへ変化した。

虐待の定義について、「親が自分からの欲求や要求を満足させる」という言葉がある。これは今まで聞いたこともなかった言葉である。理解するために、加害者として親の心理を知る必要がある。この本は「虐待は世代間連鎖の特徴がある」を書いて、どうして昔被害者としてのは、親になった後で、同じ行為をしているか。どうして虐待を受けた人はDV（配偶者暴力）の加害者になりやすいのか。この心理を理解する上で、虐待を受けた子どもに対して、専門的な心理治療を行ったら、もっと子どもを守ることが可能だと思う。

この本を読む前から、森田ゆりの本を通じて、性的虐待対応の困難性を理解していたが、今回は日本社会がたくさんの性的虐待を受けた幼い子どもを見落とすという不

足を知ることができた。西澤は「私たちは性的欲求から犯罪を行うと考えて、実は性的欲求より支配欲求が先行している。そして、思春期前の幼い子どもの被害が見落とせれている可能性が非常に高い」という問題を指摘されている。将来、サポートをするとき、思春期の子どもだけではなく、もっと幼い子どもたちを重視することが必要だと思う。中国などの発展途上国は日本よりもっと問題に直面している。日本の児童相談所は学校、市役所、司法、医療機関と繋がって、もし子どもの体の中で傷があって、異常の行為を発見したら、直接に児童相談所と連絡し、子どもを支援する。同時に、加害者を処罰し、データも記録する。中国は虐待に関する専門的な組織がなくて、もし虐待を受けたら、警察と通報するのは最も重要なことである。この場合には、幼い子どもの保護は難しいと思う。日本のような専門家、施設、学校、警察署との繋がりを作ることは今大切な課題である。

西澤が書いた本の中で、一番印象的なのはトラウマ記憶を物語記憶へ変えるという回復の方法である。虐待という辛い記憶を乗り越えるために、親から受けた虐待体験を詳しく見ていく必要がある。しかし、虐待の記憶を何度も繰り返すことは子どもとして危険性がある。もし、心理治療の中で、少しでも間違いがあったら、子どもに対して、人生を壊滅する影響を与える可能性がある。身体的、心理的な支援を行う時、専門家は一番大切なことだと思う。一つの施設の中で、医学、心理学、福祉などの専門家が必要である。でも、この本の最後は、「日本は慢性的な人員不足の状態において、これは一般社会の無関心で、社会資本が適切に投入されていないからである。」と書かれている。先進国としての日本も社会無関心で専門家が足りない問題を直面している。子ども虐待という問題において、一段階も入らない中国はどうすれば、この問題を解決できるのか、これも重要な課題だと思う。

『子ども虐待』という専門書を読んだ後で、私は自分が夢に近くなる感じがある。しかし、現実の難しさも分かった。中国は特別な家族関係があって、虐待の定義は日本、欧米と違う。そして国によって、支援する方法も異なる。今の中国は現状に適する虐待の定義を決めていない状態で、公共権力は家庭内に入るべきか、入ったら、中国の家族関係をどう変化するのか。たくさんの未知が存在している。私は『房思琪の初恋乐园』という本から、子どもへの性的虐待に関心を持った。『子供への性虐待』という本から、性虐待を受けた子どもに対して、身体的、心理的支援する組織の重要性が分かった。今は『子ども虐待』という本から、国の現状を考えずに福祉組織を作る実行性が低い現実を知って、性的虐待だけではなく、虐待全体に対しての福祉施設を作りたいと考えるようになった。福祉施設だけで子どもを守らないと思って、専門家、施設、学校、警察署との繋がり的重要性もこの本から分かった。私は福祉という分野に研究することは、大学4年間の時間が全然足りないと思うが、まずはたくさんの知識を身に着けたいと思う。アメリカ、日本などの先進国の経験を勉強した上で、中国の現状を考えて、虐待を受けた子どものための福祉施設を作る。

この文章を書いたとき、子ども虐待についての韓国の映画トガニ 幼き瞳の告発 (도가니 熔炉) を思い出した。映画の最後、裁判が負けた後で、ダメージを受けた子供は裁判所の前に泣く。雨が降っていて、男生は犯人を殺す。法律は子供を全然守られなくて、この世界の黒い面より、善良、正義の力はそんなに弱い。彼たちの生きている希望はこれから失うかもしれない。子供の無力感を本当に感じて、私の考えはもっと強くなる。もし、将来のある日に、私はたくさんの子供を助けて、自分の人生価値を実現したら、その時はじめて私にとっての心の自由の意味を見つけるかもしれない。

授業の感想：

私実は大学の中で何をやりたいのかを最初に考えていなかった。この授業のおかげで、四年ではなく、これからの目標を立った。これは一番重要な収穫だと思う。みんなと交流して、何回も修正して、最初の文書から大きく変化した。自分から文章のメリット、不足を発見することが難しい。でも、みんなの力を貸して、考えたこともないところを見つけた。他人のアドバイス、意見を受ける能力もこの授業から高めている。心が弱くて、何の意見を聞いたら、すぐに反駁したいことが自分もずっと困っている。でも、今は意見を聞いたら、もう一度文書を読んで、自分の不足を認めることができる。成長につれて、「もっと意見が欲しい！」という考えを持つ人になりたい。たぶんこれは容易ではない道だと思う。レポートを書くための技術とか、日本語で書く、話す勇気とか、いろいろな成長になった。先生、みんなに感謝の気持ちを伝えたい。二回生の時、学術的な能力を上げるだけでなく、みんなとの交流、自分の反省を通じて、自分の不足を認めて、目標の達成に近くなりたい。

大学四年間を使って実現したい目標

龐 逸翔

はじめに

私は大学4年間を通じてやりたいことは、主に勉強と生活の二つ部分で分けています。大学からの人生は完全に自分自身で設計して完成させなければならないので、いろいろな考えが必要です。親から離れて完全な自由になり、誰でも以前より心が爽快になりますね。大学から遊び放題の時期になり、自制力がなければ、墮落な人生を迎えます。健康的な生活と勉強が両立できる人生が実現できるように頑張りたいと思います。

目標の具体的な内容ときっかけ

大学院に進学し専門的な知識を勉強することが私の目標です。今中国の自然環境が非常に悪く、特にPM2.5（粒径2.5マイクロメートル以下の非常に微細な物質）による空気汚染がひどく、青空が消えてオレンジ色まで悪化してしまいました。ですからみんなが出かける前に必ずマスクが必要です。悪い空気のせいで、病院に通う人も非常に増加しました。2014年に日本語を勉強するために、中国の首都である北京に3ヶ月住んでいましたが、あの時の空気は一生忘れられないほど悪かったです。毎日悪夢のような白い煙だらけなので、体に有害と思い、自然に自分と家族の健康に心配になりました。自分の家族が健康的に生活させるために、将来の次代が楽しく生活できるように、この大気汚染の問題を解決しなければならないと思うようになりました。今まで責任者たちがさまざまな手段を使いましたが、効果は微小です。環境問題を徹底的に解決できるように、環境保護政策の知識を沢山勉強したいです。自ら環境保護に直面し、豊富な専門知識を使って目標を達成するのが私の夢です。学士レベルの知識も難しいですが、環境保護に直面するのにまだまだ足りないと思うので、大学院でいろいろな研究や実験を通じて勉強したいです。高レベルの知識を身につけるために、大学院に進学しなければなりません。大学院に進学するのは、強い心が必要です。堅忍不拔な態度がなければ卒業することができません。将来、一年中365日の青空が実現できるように一切の困難を我慢し、汗を流して頑張ります。

大気汚染の問題だけでなく、すべての自然保護の知識を勉強したいです。大学院に行きたい理由は1つだけではなく、就職への心配もあります。就職する時、学歴の違いによって結果がかなり違います。日本では大学卒レベルなら十分ですが、中国で働くなら修士ではないと良い仕事に就くのがなかなか難しいです。特に私は大気汚染を改善する仕事がやりたいですから、中国の環境保護局で働きたいです。環境保護局が他の団体と違い、直接環境を管理できる権力がありますので、非常に有力なところだと思います。環境保護局の仕事が公務員ですから、さらに公務員になるのはかなり難しいでしょう。大学院卒業後、公務員の塾に参加することも必要です。環境保護局のレベルが高ければ高いほど持つ権力とパワーが強いので、高いところに行きたいです。多くの競争者に勝つには、博士の学歴と知識が必要かもしれません。以上の目標を達成するために、大学四年間に環境専門の基礎知識をしっかりと習得したいです。

まずはできるだけ早く単位をとる事です。沢山の単位を速くとれば、大学三年生から大学院に受験する準備ができます。次に、二年生から環境知識が勉強できる学科に入ることです。二年生から、総合政策学部で勉強する学生は必ず4つの学科からひとつの専門を選択しなければなりません。私は環境知識が勉強できる総合政策学部を目指しています。最後に、普通の大学生と違い、インターンシップに参加しないことです。インターンシップに参加する人はほぼ大学を卒業後すぐ就職したい人です。大学の最後の二年間を使い、社会人になるためにいろいろの社会知識を勉強します。私はすぐ就職しませんので、この時間を使い、環境保護の知識の勉強と大学院向けの留学生試験の準備をやりたいです。二年間を勉強に集中し、大学院を受かるために勉強します。

勉強以外、大学4年間勉強に邪魔しない上で1つのスポーツサークルに参加したいです。特にバドミントンサークルなどのサークルに参加したいです。実はバスケットボールが一番好き

ですが、十年間のバスケ人生で何度も骨折したり捻挫したりしてしまい、生活に大変な迷惑がかかりましたから、これからバスケをやめることに決めました。バドミントンなら、必ず怪我しないスポーツではないですが、怪我する率が低く、怪我の程度も低いです。加えて子供からバドミントンをやったことがあって、深い興味を持っています。バドミントンサークルは、体を鍛えながら、たくさん友達を作ることができます。誰でもわかりますが、健康と友達が非常に大切です。健康な体こそ、成功できます。春学期は自転車で通学していて、体が凄く健康になりました。3ヶ月の間、病気とかが全然なく、毎日元気で生活していました。健康な体のおかげで、集中力も運動する前に比べてかなりアップしました。健康な体こそ、より効率的に勉強できると思います。

また、人生は仕事だけではありません。学習と仕事のほか、生活のときに友達がいないと、悲惨だと思います。孤独感だらけの環境に生活することが一番良くないと思います。そして、たくさんの友達がいればこそ、将来の人生が楽しいだけではなく、各産業から有力な力で自分を支えて、自分の目標が実現しやすいです。社会に出ると、孤独な一人として生活するわけです。知らない未来と悩んでいる現状が深刻な問題になりますが、このとき友達がいれば、この人生の暗い階段が速く突破できます。友人との交流で生活上の辛さを一気に忘れて、明るい態度でがんばれます。交流だけではなく、もし自分が破産した場合、銀行からのローンが借りられないなら、熱心で信頼できる友達から直接経済的な援助を受ける可能性もあります。誰でも失敗するでしょう。再起のために一定の資本が必要です。このとき、信頼できる人が家族と友達しかいません！彼らの援助がなければ、多くの場合は再び強くなるチャンスがなくなって、永遠に自分が望むレベルになれない恐れがあります。ですから、友達が人生の中に非常に重要な一環として存在していますから、真剣な態度で対応しなければなりません。ですから、沢山の友達を四年間の間に作りたいです。学習の目標と生活の目標を同時に実現できることがかなり難しいと思います。実現できるように、4年間以上の努力が必要かもしれませんが、頑張り続けたいです！

本を読む理由と本の内容、感想、結論

母国を離れ日本の大学に留学に来て、本当に沢山の環境知識を身につけたいです。大気汚染の問題だけではなく、いろんな分野の環境保護に関心を持っています。そのために『海の環境100の危機』という環境保護の専門書を読みました。この本を選んだ理由は地球環境と緊密な関係があり、地球環境は空気、陸上、海洋と河川3つから構成されます。大気汚染と海汚染は緊密な関係があり、汚染の原因は同じ、工場から不正な排出です。ですから、大気汚染を知るために、海の環境保護についても重要です。

『海の環境100の危機』という本は、2000年から5年間文部科学省のサポートのもとに展開された大型研究成果の一つです。このプロジェクトでは、東京大学海洋研究所が中心となって全国の学者を呼びかけ、海の生き物の進化などについて総合的な研究を実施しました。今、地球環境が年々悪くなっており、自然保護への関心が深くなってきました。しかし、地球自体が完全に砂漠になっても、滅亡になることがありえません。ですから、地球を守るって、完全に人類自身を守るだけです。文章は海の生態系の危機から、海の環境の危機、環境保護・人と社会の取り組みを順番に描写しました。近年からの地球温暖化は非常に深刻な問題になっていきます。特に北極の氷が激減し、21世紀に完全になくなる予想が発表しました。北極の氷が融けると困るのは、人間だけではなく、ホッキョクグマの食べ物はいつも海中に生活していますが、時々水面に上る場合もあります。ホッキョクグマ自身が泳げないため、氷を利用して生き物を攻撃するわけですが、氷がないとホッキョクグマが滅亡するはずですが、また、鮭が生まれた故郷に戻れない状況があります。海や川の上流から人類が排出した化学物質により、鮭の鼻の機能が低下し、生まれた川の匂いを分析する能力がなくなるから、地球温暖化は他の危険があります。それが台風です。直接見ると両者の間に関係がないと見えるが、実はそうではありません。赤道を含む海水は高温であり、エルニーニョが発生しない通常の年には太平洋西部のパプアニューギニア方面に、より高温の海水が吹き寄せられています。高温な海水の蒸発が盛ん、上昇気流が形成され、何日後台風が形成されます。海洋投棄の問題も危ないです！特にプラスチック類は魚に食べられ、最後に人類がプラスチックを食べた魚を食べ、癌に

なることも多いです。愛された海を保護する人は人類自身しかいません。二酸化炭素の排出を減少し、海洋ごみも大切にしなければなりません。

私はこの本を読んで、驚きました。汚染問題の酷さを感じ、真剣に対応したいと思います。この本は専門的なデータと科学的な分析で今の海洋の現状と海の中に生活する動物から気象までを詳しく描写しました。文章の形が少し硬いが、わかりやすい本です。確かに、今の海がきれいとはいえません。魚の量も急速に減少し、漁師が転職し苦しい生活をする例が多く、台風も増加され、人類が受けた被害がさらに拡大されてしまいました。このまま行くと、他の星に移す必要が高いです。しかし、希望より科学発展がまだまだですので、人類が自滅する日が遠くありません。さらに悪化しないように、地球全員の努力がないとだめだと思います。身近くのことから、地球を守りましょう！私自身が環境に深い興味があり、2回生から総合政策学科の環境フィールドに入りたいです。本書のような環境保護についての知識をもっと知りたいです。本書から、人類の不正排出は海の汚染と大気汚染の共通点だと発見し、汚染源である工場の違法行為が主な原因だと分かりました。将来の学習に、この方面の内容をしっかりと勉強したいです。本のように人類の生活の質が年々上がっているのに、良い生存環境がどんどん消えていきます。人類が滅亡しないように地球全員の努力が必要です。自分も力を出したいです。一人の力が足りたが、貢献できるように努力します！

最後の結論

大気汚染などの汚染問題は解決しないといけません。きれいな未来を作るために、教育機関である大学でしっかり知識を勉強する同時に、大学院に進学の準備をやります。大学四年間はあっという間に流されます。有限の四年間を使ってレベル高い専門知識を勉強する同時に、健康な体と友達作りも大切に扱いたいと思います。2回生から総合政策学科に入る同時に、積極的に他人と交流できるサークルと場所を探します。遊ぶ時間を減らし勉強できる時間を作り、有意義な大学生活に頑張ります。

授業の感想

一年間の日本語授業の勉強は本当に留学生である私に役立つと思います。特に長い文章の書く練習は留学生にとって重要だと思います。そのほか、文章を議論するとき、日本語での交流が多く、日本語の話す能力はもちろん以前より進歩し、交流から他人の異なる観点も発見し、自分が間違った考え方の転換もありました。一年間、有難うございました。

関西学院大学総合政策学部

2018年度 日本語 I・II レポート集

大学生活の希望

発行日	2019年3月10日
発行	関西学院大学総合政策学部 牲川波都季 669-1337 兵庫県三田市学園 2-1
編著者	関西学院大学総合政策学部 2018年度日本語 I・II 受講生
問合わせ先	牲川 波都季 segawa@kwansei.ac.jp
